

電子書籍 日露戦争への列強の策謀

三国干渉からポーツマス日露講和成立までの列強国の意図



ビゴ風刺画

左露国、何か・・・中央日本、たちあえ一背中を押す英国様子を見まもる米国



現在の水師營 2002年撮る



西沙河子での休戦条約協定委員の会見

1905年9月13日、両軍委員が西沙河子付近に会見所を設定の様、中央背面の参謀肩章は福島少将、対面の白服はロシア側委員長オラノフスキー少将。『日露戦争PHOTOクロニクル』
滯標の会編纂より

2016年6月つゆい

池田勝宣

前編

	目次	2
序	はじめに	1
第1章	日清両国の対立と開戦までの経緯	3-17
第2章	義和団の乱勃発	18-31
第3章	ロシアの極東への進出と日本との軋轢	32-40
第4章	シベリア鉄道の経緯を観る	41-47
第5章	日本の通信は日清・日露に勝利を齎す	48-63
第6章	日英同盟のながれ	64-75
第7章	日露戦争前夜の米英の軍事状況を概観	76-81
第8章	日露戦争前夜にロシア圏への諜報活動した男たち	82-95
第9章	日露戦争の概観と乃木神話	96-121
第10章	「ウィッテ回想記」より開戦の経緯と講和談判を探る	122-130

(前編・A4・横40字×行30 130枚となります)

後編

第11章	高橋是清・末松謙澄・金子憲太郎の活躍	131-167
第12章	日露講和条約締結後の新聞報道	168-179
第13章	お雇いドイツ人フォン・ベルツの日記	180-191
第14章	ポーツマス講和会議	192-232
第15章	終章・談判後に出てきた秘密情報	233-253
	結びにかえて	254-257
付録	ロシア沿海州残影	1-8

(後編・A4・横40字×行30 135枚となります)

はじめに

日露戦争を現代より振り返れば、日露戦役は日本の運命を決定するターニングポイントであった事が分かる。幕末期より陸の王者ロシア帝国の南下に怯えていた日本は、西洋文明を列強国から取り入れ、列強国の時流に乗る富国強兵を目指し、極東アジア諸国を席捲する大国へと成長した時代であった。

明治27、28年、朝鮮半島に於ける覇権をめぐり、日本と清国は衝突し、日清戦争が勃発した。日本はこれに大勝したが、露国、独逸、仏国の三国干渉によって、三国の軍事力に屈服し、遼東半島を返還した。そして、明治33年(1900)、清国東北部に於いて北清事変が起きると、ロシアはシベリア鉄道と自国民を守る名の下に、清国満州にロシア軍は強硬出進した。日本をはじめ欧米列強の抗議にも動じず、ロシア軍は満州の野に居座わり、このロシア軍の居座続ける事によって、何度も日露交渉が行われたが解決策はなく、その沿線上に於いて日露開戦につながるのである。

ロシア国の満州領有は本格化してやがて朝鮮半島にも手を伸ばし、日本国に迫ってくるのではないかという不安視が増した。日本政府は安全保障のため満州・朝鮮半島からロシア軍を追い出すことに、国を挙げて軍力に傾けた。日本の近代軍事力はそれに伴って富国強兵となり、その結果として極東地域の欧米列強との植民地利益地が衝突することになる。ロシア、英国、仏国、米国等と列強国外交交渉が次々と難問の課題が起こるが、明治政府終脳たちの活躍により解決する歴史を刻む時代であった。

日清・日露戦争についての戦記物語には優れた著書が多々あるので、それらの書籍に譲り、日露開戦時の日本国を取り巻く欧米列強国の外交・意図・思惑・策略・策謀はどのような動いていたのか、その点の外交史を探ってみたいと思う。

明治政府は日露開戦同時期に、この戦争は短期決戦による限定戦争と想定して、そのシナリオに添って軍事を背景に行動を起し、そして欧米の世論喚起の広報活動を積極的に繰り出して米国世論の説得に当たった金子堅太郎、日本の戦費外債募集を英国£・米国\$を調達した高橋是清、ロンドンを中心に「^{こうか}黄禍論」の払拭に末松謙澄、ロシア帝国後方攪乱に走った明石元二郎・石光真清等の活躍も探りたい。又、乃木希典無能説や、通信、シベリア鉄道、日露戦争前夜の列強国の立ち位置や、ポーツマス日露講和会議の息詰る外交交渉の経緯も掘り下げてみたい。

第1章 日清両国の対立と開戦までの経緯

序 日本が朝鮮半島進出した理由は、朝鮮李王朝(1392－1910年)が清朝(1644－1912年)の冊封体制化下にあつて、一貫して鎖国政策を続けていたからである。「中国朝鮮商民水陸貿易章程」(清は宗属関係を明記した商民水陸貿易章程を朝鮮と結び、大院君を清の保定に幽閉し、軍隊を漢城に駐留させた。大院君とは李氏朝鮮の直系継承でなく、新国王の実父に贈られる尊号)より清国政府との全ての問題規範は固定されていて、変更の必要はないとされていた。この様な李氏朝鮮の立ち位置を、日本としては朝鮮を清国から独立させ、列強国の出進に対しての備えることが最大の課題となっていたのである。

明治3年10月、この鎖国政策解消に日本外務卿の3人が交渉に向かったが、朝鮮政府に引見を拒否され、更に2年後に代表を送り返事の催促をしたが回答はなかった。この時期、英国や露国の西欧列強が、砲艦外交(軍艦等の軍事力威嚇)で清国・朝鮮に門戸開放を迫っている最中で、日本は朝鮮が列強に支配されれば、我が国も危ない危機感を抱き、三條美美(太政大臣)も征韓論を主張して閣議に凶った。木戸孝允・大久保利通らは外遊中であつたので、西郷隆盛を全権大使として談判に朝鮮に派遣することが閣議で決定した。しかし、帰国した大久保らは、西郷を派遣すれば戦争になるという事で征韓論は消滅、その後この論議は国内勢力を二つに分裂を招き、「西南の役」となっていく経緯となる。

李氏朝鮮は明治初年、日本への国書は「日韓は各々完全なる独立国として平等に交際する」と回答していたが進展はなかった。明治7年(1874)5月、台湾に漂着した琉球島民54人が殺害される事件が発生し、日本政府は動向を解決するために台湾に侵攻した。李氏朝鮮は日本の台湾出兵に驚き動揺し、翌明治8年9月20日、日本艦「雲揚」が江華湾内の領海内で、朝鮮砲台から攻撃され、これに応戦して砲台を破壊した。この「江華島事件」により、翌年2月11日「朝鮮を独立国として清国との宗属関係を否定し、釜山・仁川・元山の開港による通商貿易の拡大」等の「日朝修好条規」(江華島事件後、日本が朝鮮の開国を求め締結させた条約。朝鮮の関税自主権を認めない不平等条約の恨みを残した)に調印して互に自主独立国であることを認めさせた。

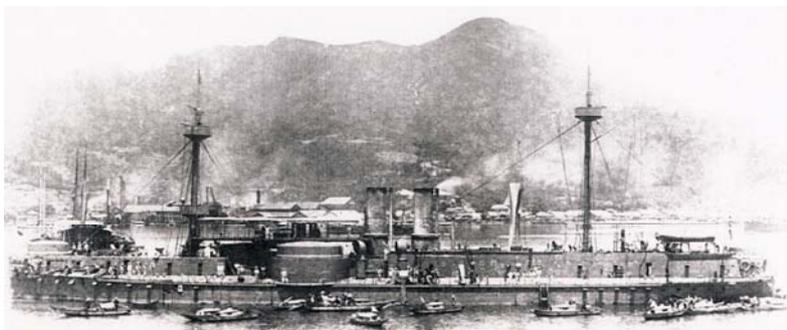
調印後、清国においては朝鮮の自国の属領であると譲らず、独立を認める日本と、宗主権を主張する清国との間に軋轢が高まり、それに露国や英国が絡んで複雑な国際情勢下に置かれた。明治18年、日清間に天津条約(甲申政変の事後処理のための条約)

が成立していたが、清国の野望は治まらず、軍事力に自信を持っていた清国は、朝鮮半島の完全属領化を狙い、日本を追い落とす行動に出たのである。

清国は明治19年9月8日、ドイツ製の「定遠」^{ていえん}「鎮遠」^{ちんえん}（当時の東洋で最大級軍艦）他4隻を、日本政府の許可なく長崎港に入港させ、水兵をも上陸させた。この水兵たちが、酒に酔い騒ぎを起し、日本警察、住民らを巻き込んだ大乱闘事件を起こした。清国側の死者1人、負傷者15人（清国側の発表は死者8人、負傷者42人）、日本側巡査2人が死亡、負傷者26人を出した大事件に発展となった。

この背景には、清国が海軍力を日本へ見せ付ける示威行動であり、太刀打ちできない力の差を、日本側へ歴然とさせたかったのである。これに対し日本海軍力の対抗策として、水雷艇（日清戦争で清国海軍旗艦定遠を沈む）の活用位であった。当時の日本陸軍総兵力3万2千、清国総兵力百8万の現実差があった。（『明石元二郎大佐』前坂峻之著）

注・江華島事件^{こうかとうじけん}=1875年9月20日に起きた日本と朝鮮の武力衝突事件。日本軍艦雲揚号（250ト）が朝鮮の江華水域に入った時、砲撃を受け、日本側は応戦して草芝鎮に損害を与えた。江華水域は現ソウルに通じる要衝にあたる。



清国海軍の「鎮遠」^{ちんえん}

ウィキペディアより

琉球帰属問題 清国と我が国との軋轢は琉球（沖縄）の帰属問題から始まる。琉球は徳川時代初期より、鹿児島島津氏に征服されて隷属していたが、裏面史に於いては支那（明・清）に通じ、明朝の滅亡後は清国に入貢^{にゅうこう}（朝貢）していた。

幕末期に西洋船の来航が頻繁となり、英仏等の列国たちは、琉球に対して通商を結ぶ事を要求し、琉球はその外圧に堪えかね、欧米列国と締約を余儀なくされ、列強各国に対し複雑な関係を結ぶに至った経緯となっている。

日本国と琉球との関係が極めて明白となっているにも拘らず、琉球は依然として旧来の慣習を改めず、清朝との通交と朝貢の礼を継続し、我が政府にこれを認めるよう歎願^{たんがん}していたが、素より我が国に於いてこれを許す筈もなく、明治12年、内務初期官松田道之^{みちゆき}（1839-1882 内務官僚、滋賀県令等）を遣わし、廢藩置県を断行し、藩を改め、

沖縄県として、^{しやうたい}尚泰王(最後の琉球国王、在位 1848—1872)を東京に移住させて華族に列し、邸宅を賜わる経緯となる。

明治維新前、1848年(清の元号^{かんぽう}咸豊3年)ペリーが琉球に来航し、翌年に琉米修好条約を締結し、1855年には琉仏修好条約を結び、さらに1859年には琉蘭修好条約を結び、琉球の立ち位置は維新前に於いて一国の態をなしていた。

栄典・1879年・従三位。1885年・公爵。

1887年・正三位。1901年・従一位

明・清の歴代王朝は中華思想に基づき、軍事的に外界の動向を察知する上で琉球王朝を外臣として遇してきた。その扱いは時により変動したが、琉球は清国を宗主国であることを歴史的な経緯となっていた。日本と清国は明治4年(1871)、18条の日清修好条規^{じやうき}



琉球国王・尚泰王(1843—1901年)

(明治4年7月29日天津で日本と清の対等条約し清側は李鴻章)が調印した後、先に述べた様に、同年台湾へ宮古島民54名が漂着して殺害される事件(琉球漂流民殺害事件)が発生した。その事件を楯に日本政府の抗議し、清国は、「台湾ハ^{せいぼん}生蕃(従わない原住民の人々)ノ地ハ^{けがい}化外ニ置キ^{まきにおよ}正速バズ」と回答してきた。台湾は清朝政府の力が及ばない“化外”の領土であると伝えてきたのである。

清朝はこの事件で、日本がまさか台湾出兵するとは考えが及ばず、この回答により明治政府は明治7年(1875)5月、陸軍中将西郷^{つぐみむ}従道(西郷隆盛の弟)率いる3千の兵が、台湾南部へ犯罪捜査ため派兵した。5月6日に台湾南部住民と小競り合いとなったが、22日、台湾西部に全軍を集結して本格的な制圧を開始したが、現地に於いて日本軍は亜熱帯の風土病に悩まされ、561名の病死者を出した。

この状況下の日本政府は、英国駐日大使パークス(幕末から明治初期の英国公使)に軍事行動を激しく抗議され、8月、北京へ大久保利通が交渉に赴き、台湾問題を交渉開始した。10月31日「日清両国互換」が調印され、清国が日本軍の出兵を「保民義拳^{ぎきんけん}」(民を保護するために起した行動)と認め、日本は^{せいぼん}生蕃に対し法を設ける事を求め、1874年12月20日までに軍を撤退させることに合意、清国は避難民に見舞金10万両(テール=銀37.5g・現在g=50円)を払った。清国が日本軍の行動を承認した事により、琉球民は日本人となり、琉球の日本帰属が国際的に承認され事となる。

琉球に就いては、琉球が日清両国間に両属する変則的な位地を不問にしたままでいたが、茲に日本国有の領地となったが、琉球民の独自の政策を認めることはなかった。

明治8年（1875）5月、日本政府は琉球王朝に対し隔年進貢（朝貢）、^{きくほうし} 柵封使（中国王朝の皇帝が従属国の国王に^{しきくごう} 爵号を授けるために派遣する使節）の受け入れ等を禁止した。同9年、内務官吏を琉球に常駐させ、裁判権と警察権を接收し、熊本鎮台から一分隊を派遣して軍事権も掌握した。

更に同年イギリス中国公使トマス・ウェードの仲裁により、清国側がこの非を認めたことにより、賠償金の支払いを約束し、^よ 因って宮古島島民は「日本国属民」と明記させ、続いて明治12年（1879）、明治政府は琉球藩を廃して日本国の沖縄県とした。中国へ朝貢を禁止し更に福州琉球館（明・清代の福州と琉球の進貢貿易館）を廃止させた。



ハリー・パークス英国公使(1865-83年) 明治7年台湾出兵日本人兵士 トーマス・ウェード

この屈辱的な条約をさせられた清国は、国防体制に与えた衝撃は大きく、海防論議が清朝で始まった。1875年、日本軍の台湾遠征の翌年、清国を代表する北洋・南洋の2艦隊の建造が開始され、その予算は^{えつかいかん} 粵海関（広東省広州税関）と^{こうかいかん} 江海関（上海税関）の関税収入2百万両、^{こうそ} 江蘇、^{せつこう} 浙江、^{りきん} 湖北の釐金収入（内地関税）2百万両と合せ計4百万両で艦隊創設に動きだした。このような清国の海防の強化は日本の出兵が動機となり、その危機感からくる艦隊の建設は、日本の台湾出兵による琉球帰属問題によって起きた事なのである。（参考文献『世界情勢と躍進日本外交史』内田茂編纂・昭和15年「琉球小笠原問題」と『近代日本戦争史・1』「日清両国の対立と開戦への軌跡」田中宏巳著）

清国の情報収集 清国側の日本に対する情報収集は明治12年に始まり、清国国内に於いて、この年に「清国に対抗した日露間に同盟が成立した」と云う噂が流布し、慌てた清朝は日本へ軍備情況と地理調査を^{りようこうそうとく} 両江総督（地方長官の官職）の^{オウ・シジョン} 王之春（1842

－1906・外交家）を、1879年(明治12年)12月7日から翌年1月5日・軍備、諸事情を探るため派遣した。調査報告書を『談瀛録』に旅行記に纏められ、日記は『東遊日記』(1、2巻)となり、調査報告書は『東洋瑣記』(3巻)となる。

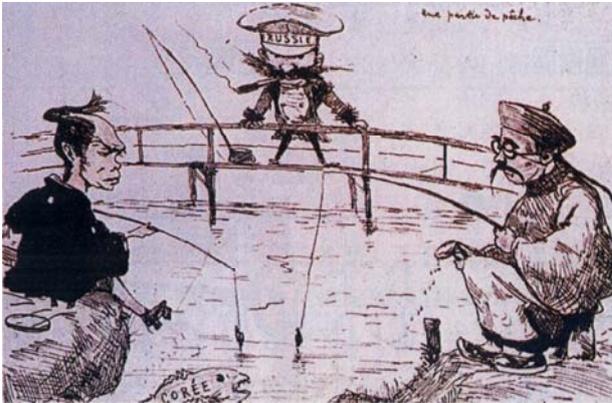
その一部に、《日本は国土を外敵に暴露し、しかもこれを守るべき險要(険しい地勢で敵を防ぐ場所)の地を持たない。・・・横浜は地形浩蕩(広々)として敵を制する便なく、東京横浜にも扼す(抑える)所がない。東京湾には5基の砲座を持つ品川砲台があるが海上にあるため弾薬補給が容易でない。陸上兵力は6鎮台常備兵員2万3千、砲7百20門あり、戦時には兵員5万余、砲900門に増加出来ることにはなっているが、国内事情は兵をして後顧の憂いなく戦い得る様な状態となっていない。即ち、国家は敏感な西洋文化摂取政策のため3千万円にのぼる内債の他、2千万円の外債を負い、外債は主として英国からの融資であるが、これら巨額の債務のためその利払いにも苦しんで居る状態である。そのため農民からは収入の7割を田租として徴収して、その他雑税に至っては「物として税ならないものはなく」「百万搜括(八方探す)して緘悉(細かい処を探る)も遺さず」という有様で、国民はまさに生死の瀬戸際に追い詰められている。従って軍事的見地からすれば、中国は敢えて日本を恐れるには及ばない。》と記述している。(「日清戦争以前における日中両国の相互国情偵察について」・代日中交渉上の一齣として・佐藤三郎 『軍事史学』創刊号・昭和40年5月より)

上記の王之春の報告書は、清朝政府に取上げられることを想定して、日本の実情を悪く評価した記述が見られる。ここで肝心なことは、王之春の報告書で「日本は政府と議会が対立し、また薩長閥が反目し合い、国民と政府が遊離し、混乱した国家と見えたことである。当時の中国人の文化思考レベルでは、日本の議会制度を全く理解できなかったことを示している。その結果、日本を威嚇すれば簡単に屈服させることができる弱体国家に映り、清国政府は対日強圧論が基本路線となっていくのである。

日清戦争の概略 日清戦争の概略は、朝鮮半島(李氏朝鮮)をめぐる日本と大清国の戦争で、明治27年、朝鮮国内の甲午農民戦争(農民の内乱)を切掛けに6月、朝鮮に出兵した日清両国軍が8月1日宣戦布告、近代化に成功した日本軍は、近代化の遅れをとった清軍に対し、終始優勢に戦局を進め、遼東半島など占領し日本が大戦勝をおさめ、1895年4月17日下関で日清講和条約が調印されたのである。

戦勝国日本は清の領土、遼東半島・台湾・澎湖列島(台湾西方約50km)と、多額の

賠償金2億兩を得ることになる。しかし、4月23日、露・仏・独の三国が日本に対して清国へ遼東半島を返還要求し、三国の軍事力を楯にした外交に屈して、日本は三国干渉(三国の軍事圧力による)を受け入れ、5月5日遼東半島返還の経緯となる。



日清戦争の風刺画・ジョルジュ・ビゴー
(1860-1927)画家・漫画家明治時代17年間日本に滞在。

「魚釣り遊び」(漁夫の利とも)魚(COREE)を釣り上げようとする日本と中国(清)、横取りを狙う露国

日清戦争・明治27、8年の開戦 明治27年(1894)4月、朝鮮^{ぜんらど}全羅道(八道の一つ)地方に農民の内乱が勃発し、甲午農民戦争が起き、その流れで東学党の乱(1860年慶州出身の崔濟愚・チェ・ジェウ、宗教家、東学を創始者)の教徒が起した内乱に発展、その集団を東学党と呼ばれた。

この東学党の勢力は、秕政(殻ばかりで中身がない)に半島の人心の間に^{たちま}忽ち勢いを増し、派遣された招討使(地方軍指揮)も鎮圧できない状態に陥り、乱徒は更に勢いを増して、京城(旧ソウル)に^{せま}迫り、この報を受けた清国の^{えんせいがい}袁世凱(1859-1916・軍人、政治家、北洋軍閥の総師)は朝鮮帰属の好機到来と受け止め、清国政府は猛将・葉志超(直隸提督)・聶士成(朝鮮出兵し後直隸提督)を将とし、兵1500を^{アサン}発して(忠清南道)に上陸した。

我が国へは口頭で知らせ、「清国の属国保護の慣例に依り、朝鮮に出兵することとなり、・・・。」との知らせは、誠に条約を無視する無礼に憤怒し、清国軍派遣は半島に於ける均勢を犯す重大な事件勃発なので、到底、我が国は黙視するわけには行かない。我が国政府は、当時帰朝中の朝鮮公使・大島圭介(1833-1911・西洋軍学者、外交官)を、急遽軍艦八重山(日本海軍通報艦・伝達艦)に乗せ、京城に帰任させ、次で陸軍少将大島義昌(1850-1926・陸軍少将、朝鮮派遣・安部晋三は玄孫)が兵を率いて6月12日^{インチョン}仁川に到着した。

当時我が国の韓国問題に対する国民感情は、従来から幾度も沸騰し、国権拡張の政治団体運動も盛んとなり、条約の改正は、何れも切実に問題解決の難事であった。この清国へ帰属している朝鮮半島問題は、前年条約改正^{れいこう}励行(議決通りに実行)を帝国議会

で決定されたことで、今や切迫した対韓関係に、今度こそは断じてこれを解決して積年の禍根を取除く意気込が日本側には強くあった。清国軍が派遣したことは日本軍も条約通り派遣することになり、日清両国軍が半島に対峙して一触即発の状態となった。

日本軍が仁川上陸すると韓廷は狼狽し、且つ清国もまた閔一派（閔妃・ミンピは李氏朝鮮第26代王、高宗の妃）と呼応し、日本軍を撤退させる策謀を企てたが、日本軍は容易に動かず、此の機会に日清共同して韓国内政を改革し、未永く将来の禍因を絶つことを提議したのである。しかし清国側はこれを拒絶して応答なく、依って日本国は、独力で改革に着手する事を決め、7月23日、大島圭介(1833-1911 幕臣)は兵を率いて王宮に赴むき提議し、韓兵はこれに抵抗してきたのである。日本軍はこれを退け、公使は王に拝謁して意見を開陳(意見を述べる)したが、閔族は全くその話日本側の意見を聞く耳をもたなかった。(参考文献・『世界情勢と躍進日本外交史』日本図書刊行会(昭和15年)。『東洋外交史・上』植田捷雄著参照)

余話・小村寿太郎の逸話 《日清戦争時、外相は陸奥であったが、小村は北京に臨時代理公使(陸奥の推薦による)として在籍、小村は韓国から清朝勢力を駆逐するには、清国と一戦することはやむ得ないこと、と考えていた。清国李鴻章が大軍を韓国に増派情報を聞くと、日本政府に開戦の決意を促して、公使館引揚の許可を求めた。だが、東京から返事がこない。小村は「よし、俺が一番、戦争を始めてやる」と豪語して、独断で国交断絶を清国政府に通告し、居留民をまとめて引揚げてしまった。戦機を逸することを恐れたのである。しかし、運よく、偶然にも同日に日本政府が宣戦布告したのであった。小村は厳罰覚悟の独断専行したのである。》小村の剛毅な一面を見る。(『中央公論・特集日露戦争』「小村寿太郎の苦悶」加瀬俊一著・昭和49年5月号)より

豊島沖海戦 明治27年7月25日、日本艦隊と清国艦隊が朝鮮半島西海岸沖の海戦が始まり、日本帝国海軍が圧勝した。その概略は、我が海軍の吉野(防護巡洋艦・当時世界最速艦)、秋津州(水上機母艦)、浪速(防護巡洋艦・東郷平八郎大佐)の3艦は、豊島沖に於いて、清国軍艦濟遠(ドイツ建造)、広甲艦(清国海軍巡洋艦)に出会い、清国軍艦から発砲が始まり、我が軍はこれに応戦し、広甲号を浅瀬に追い込み撃沈させた。濟遠は逃亡したが、運送船の高陞(英国旗を掲げて清国兵を輸送中)を撃沈、護送艦操江を捕獲してこの海戦を序幕とした。

陸軍少将大島義昌(安倍晋三は玄孫)の率いる軍隊は、進軍し成歡駅(忠清南道天安市)の敵壘を陥落させ、牙山の清兵を滅ぼし、日本国の宣戦布告は7日後の8月1日となっている。この時、英国船籍の商船「高陞号」撃沈した(高陞号事件)。この事件によりイギリスは日本に対し猛烈に抗議、この問題を英国新聞『タイムス』紙に、イギリス国際法学者の論調記事に、「・・・戦争というものは宣言せずに始めても、少しも違法ではない。この時、英国旗を掲げていたかは重要ではない。戦争が始まったのであれば、交戦国の艦艇は、公海上にあらゆる船を臨検し、交戦国の船もしくは、第三国の船でも相手国向けの戦時禁制品が積んであればこれを没収、あるいは破壊処分し、必要なら撃沈させることは艦長に認められる権利である。依って、日本政府は英国に謝罪する義務は生じない」と、結論を出したのである。この結論に自信を持っていたのは、東郷平八郎がイギリス留学時に国際法を勉強したことが、この事件は合法的な範囲であることを熟知していたのである。

黄海海戦 日本海軍連合艦隊と清国海軍北洋艦隊の海戦。明治27年9月17日、日本国連合艦隊指令長官海軍中将伊東祐亨(1843-1914 初代連合艦隊指令長官)は、本隊松島、千代田、厳島、橋立、比叡、扶桑、赤城の七艦及び第一遊撃隊吉野、高千穂、秋津州、浪速の4艦と仮装軍艦西京丸を率い黄海海洋島付近に於いて清国水師提督丁汝昌(1836-1895・清国末期の軍人北洋艦隊提督)の率いる北洋水師の12艘(小船)に水雷艇6隻と激戦5時間余の海戦によって、致遠(北洋水師防護巡洋艦)以下5艦を撃沈させた。平遠(装甲巡洋艦)以下3艦に火を放ち、両翼に軍艦を走らして大捷(大勝利)した。



丁汝昌・北洋艦隊提督

しかも我が艦隊は1隻も失わず、赤城艦の長坂本八郎太(1854-1894・海軍少佐)は奮戦して敵弾に斃れ。海軍々令部長樺山資紀(1837-1922・海軍大将)が搭乗する西京丸(日本郵船草創期の貨客船)は前後2回の水雷に襲われたが、事なきを得たのは天の助けであった。提督丁汝昌の最後は、戦うことを諦め、軍艦武器を挙げて我が軍に降伏し、丁汝昌自身は毒を飲んで自決し、我が艦隊指令長官伊東祐亨は清国水師の丁汝昌死を、礼を尽して見送った。

鎮遠・平遠以下10余艦が海に消え、北洋水師(北洋艦隊・1888年編成された清朝の艦隊)は茲に滅亡したのである。後、平遠・装甲巡洋艦は日本軍に接收され、艦名はそのまま日本海軍に編入された経緯となっている。

日清戦争の連戦連勝 こうして陸軍大将山縣有朋(1838-1922 長州藩士・内閣総理大臣経歴)を第一軍司令官に任じ、平城の陥落後、更に前進して鴨緑江を渡り、満州へ入り、九連城(鴨緑江沿町)鳳凰城(北朝鮮国境)の諸城を攻略し、民政署を安東縣(鳳凰城下)に設置した。

明治27年10月、陸軍大将大山巖(1842-1916・元帥陸軍大将)は、第2軍を率いて出発し、盛京省花園河口(後に奉天省・大連の東)より上陸して大連湾を占領、11月6日金州城を陥れた。同月26日、第一師団長中将山地元治(1841-1897・陸軍中将)は、第一師団及び第6師団の一部を率いて、海軍と共に旅順の攻囲に向い、椅子山、松壽山、二龍山、東鶏冠山の諸砲台を攻略し、1日にして堅固と称せられた旅順口も我が邦に帰したのである。



台山占領・11月6日(写真大連世界旅行社)



第2軍幹部・後列中央大山、左山地、左乃木

明治28年1月、第2軍は進みて蓋平(遼寧省に存在した県)を略し第1軍と互に攻略し、第2軍の一部は別に海路より山東省に向い、30日、榮城湾に上陸し摩天嶺(山東省威海衛)に迫ってこれを陥れた。

威海衛(渤海湾入り口)と旅順口は、清国が多大の年月と財費を費やし、築造した自信ある海軍基地であった。渤海湾の要の軍港として栄華を誇り、難攻不落と称されてきたが、今や日本の手に陥落したのである。満州に於ける第1軍、第2軍は協力し合っ
て、3月牛壯(牛壯作戦)、田庄台(旅順の北西)を占領し、まさに馬の先駆けの如く北京に迫り、3月に至り、台湾海峡内の澎湖列島(台湾の西方約50km)を占領した。

日清講和条約の動き 明治27年12月、天津海関税局（海港の税関）の独逸国人デットリングが、清国政府の命を受けて神戸に来朝したが、日本側の講和条件の情報を探りに来たと憶測され、政府は講和談判資格に疑問があったので帰国させた。翌28年1月、北京駐在米国公使デンビーは（全権委任状の条件を満していたが）、清国政府を周旋する意思でやってきた。講和の方法を協議する好機と捉えた米政府であったが、日本政府への思慮不足と回答されて反故にした。

更に清国政府は、総理衛門（外交等官庁）大臣の張蔭桓（1837-1900 外交官）、邵友濂（1840-1901 外交官）を全権委員を任命して日本国へ派遣する旨を伝えて来た。日本政府はこれを容れ、伊藤博文首相、陸奥宗光外相が全権弁理大臣の大命を拝して談判の席についたが、同年2月1日、日清両国の全権は広島県庁にて会合し、清国使節に資格の不備があり日本側は清国全権を拒絶し、張、邵の両氏を帰国させた。

伊藤は清国へ信義と和義を求め、その公使にふさわしい全権責任者を送るように伝えた。日本側の要求に応じて来朝したのが、北洋大臣直隸総督・李鴻章（1823-1901・清後期の外交を担い清朝再建に尽力）を選任し、清国第1級の政治家李鴻章は、李経芳（李鴻章の弟李昭慶の子・外交官）を従え下ノ関に来朝し、同月20日から地元の春帆楼（下関に現存）で談判を開始となる。

日清講和条約成立 李鴻章は講和に先んじて休戦条件を提示したが、日本側はまだその段階に至っていないと拒否、直ちに講和談判に移る段取りとなった。ところが、24日、狂漢小山六之助（日本人）が、李鴻章の帰途を襲い負傷を負わせた。その情報を知った列強国らは野蛮国日本と非難を浴びせ、列強の声が清国に同情を集める結果となり、この事件は政府も天皇をも震撼させた。明治天皇は勅使を遣して李鴻章を慰問した。この事件後、解決のため日本側はやむなく無条件休戦事項を認め、順次談判は日本側の指導で進み、かくして交渉は、4月17日講和条約が成立、両全権大臣は条約に調印の運びとなる。（『世界情勢と躍進日本外交史』日本図書刊行会・昭和15年）

下関条約（下関講和条約11ヶ条、議定書3ヶ条、別約3ヶ条及び休戦延期条約2ヶ条）

第1条 朝鮮国が完全無欠な独立国であることを認める。

第2条、第3条 遼東半島、台湾、澎湖諸島など日本に譲り渡す。

第4条 賠償金2億テールを日本に支払う。

第5条 割与された土地の住民は自由に所有不動産を売却できる。割与地の住民は日本国民とみなす。

第6条 沙市、重慶、蘇州、杭州を日本に開放する。（第7条から11条は略）

批准は山東省芝罘（煙台市）、明治28年5月8日とする。

大日本帝国全権弁理大臣 伊藤博文、同弁理大臣 陸奥宗光

大清帝国欽差頭等全権大臣 李鴻章、同李経方。



日清講和条約調印 1896年



李鴻章 李鴻章・1896年代



陸奥宗光外相

余話・賠償金は現代金額で 賠償金は2億テールと威海衛守備費焼却金3ヵ年分150両、遼東返還還付報奨金3000万両、合計2億3150万両（1両・テール=銀37、3g。現在銀評価1kg、=10万前後とすれば1兆円の金額）となる。銀両は英国に運ばれ、英国の3500ポンドに両替、評価額は日本円約3億5000万円となるらしい。（評価額は現在の7、8万倍とも）。尚、日清戦費は2、3億、現在額の約7900億相当、日露戦争は17、3億、現在額約6兆円相当になると云われる。

露、独、仏、三国の干渉 下関条約批准の6日後、露・独・仏の「三国干渉」により、遼東半島返還を共同提議され、4月24日の広島大本営に於いて伊藤、山縣、西郷始め、軍部の高等幕僚が集参し、御前会議を開きその対策を議論し、あらゆる方策をめぐらしたが、妙案はなく日本政府は苦慮の末、5月10日これを清国に返還となる。

明治28年4月23日受領、ロシア帝国公使の勧告覚書の内容は次の通りとなる。

露国の勧告 《露国皇帝陛下の政府は、日本より清国に向って求めた講和条件を査閲するに、その要求に係る遼東半島を所有することは、常に清国の都を危うくするばかりでなく、之と同時に朝鮮の独立を有名無実となすのみにて、右は将来永く極東永久の平和に対し、障碍（障害）を与えるものと認め、随って露国政府は日本国皇帝陛下

の政府に向い、重ねてその誠実なる友誼（友情）を表せんが為、茲に日本国政府に勧告する、遼東半島を確然領（明瞭）とし、これを放棄することを以てする。》

ロシアはドイツ、フランスに呼びかけ、日本の干渉に圧力をかけた。ロシアは極東進出のために不凍港が必要であり、ロシア南下政策実現のためには、満州の権益拡大を目論み、日本の満州進出を阻止に全力を挙げて来た。

ドイツ 独逸公使の勧告 《本国政府の訓令に従って左の宣言を致します。独逸政府が日清講和の条件を見れば貴国より請求したる遼東の所有は、清国都府をして何時までも不安定の位置に置き、且つ朝鮮国の独立をも水泡に属させ、よって東洋平和の永続の妨げになることであると認めなければなりません。それゆえに貴国政府が遼東の永久なる所有を断念なされるように本政府が御勧告致する。・・・》と。ドイツの真意は、

カイゼル・ウィルヘルム2世の対露政策について 『西洋史学』黒羽 茂著 1954年10月号に、《林 董 伯爵（ドイツ代理大使時代）の回想録によれば、「露仏両国公使の覚書の趣旨とするところはただ隣那の有誼（友情）を以って割譲の還付を勧告するというにあった。」が、ドイツ公使グートシュミットの覚書（カイゼル指示）は、「日本は三国を相手に戦っても勝算がないから三国の勧告を容れるべきである。」とする極めて強硬なるものであった。カイゼルは当初、日清戦争に於ける講和条件の確認時、「それは決して過大ではない」と頗る親日的態度を表明していたが、間もなく不可解にも「黄禍説」を唱えてその態度を豹変させた。それは、露国政界の大立者ウィッテの追想録にも、「ドイツ皇帝が膠州湾の占領によって、我がロシア皇帝に刺激を与えたことは事実である。・・・カイゼルは、当時ロシアを極東の冒険に押しやる努力していたことは明白である。ドイツは彼の東部国境安全確保するために、我がロシアの勢力を極東方面へ移動させようとしていた。・・・ドイツは極力ロシアの極東経営を援助し、門前の虎（露国）を満州の野に追いやらんとした、実にドイツの三国干渉への積極的参加であった。》このカイゼル2世の野望の件は3章と6章で述べる。

仏蘭西共和国政府勧告 《仏蘭西共和国政府の意見にては、遼東半島を領有することは清国の都を危うくし、朝鮮国の独立を有名無実に帰せしめ、且つ永く極東の平和に対し傷害を与えるものとなる。仏蘭西共和国は重ねて茲に日本国政府に対する友情を章表せんと欲するが故に、帝国政府に向って該半島を確然所有することを放棄あり

たく旨、友誼上の勧告を与うる事は仏国政府の義務なりと思考する。》と。

下関条約をロシア側の情報を覗く 『ウィッテ回想記』上・「李鴻章と東支鉄道利権交渉」の「馬関条約（下関）とロシアの干渉」頁に《アレクサンドル三世皇帝（在位 1881－1894）が崩御し、ニコライ二世が即位して間もなく起きた日清戦争は日本の全勝に帰して、遼東半島の占領によって終結した。平和談判に於いて、日本は色々と自国の利益を主張したが、取分け遼東半島の領有はその主だったものである。この条約は、私の見る処ではロシアに取って甚だ勝手の悪いものである。何故なら、今まで海を隔てた隣国の日本が、この条約によって一転して大陸に地歩を占めて、その一角に利害関係を有する事になり、しかもその地域は将来ロシアの東洋発展に重大な関係をもつ所であるからである。ニコライ二世皇帝は極めて漠然とではあるが、極東に我がロシア帝国の勢力を伸張して見たいという志望を抱いて居るようであった。そこで、日本が遼東半島を領有することを主眼とする日清条約に対して、私は最も手ぬかりなく考慮を払はらねばならなかった。

故に日本をして大陸に根幹を張り、遼東半島地域から北京の死命を制するに足りる地域を領有させることは、到底我々の容認しえない処である。私はこの結論に基づいて日清両国間に新たに成立した条約の実行を妨害する必要があると提議した。

「我々は主義として清国の領土保全と、その独立を破壊する様なことを容認し得ないので、今回の日清両国間に成立した条約に同意することは出来ない。但し日本が戦勝国として軍費を補填するために相当額の償金を取ることに異議はない、という意味の最後通牒を日本に送るべきである。」と提議し、我々は清国の領土保全とその独立を名目として日本に迫ったのであるから、それが容れられた以上、償金の多寡その他の細目問題に関しては、何らかの干渉がましい言動を避けた。・・・。》と。

李鴻章と交渉に入る 『 同 』第2章「李鴻章と東支鉄道利権交渉」頁には、《私は或る日、李鴻章との会見に於いて、まず今度ロシアが支那に与えた援助が、いかに清国のために有利であったかを説いた。今度我々が強調した清国の領土保全という主義がいかに清国の声威を保持する上に有効であるかを説いた。更に私は言った。

「先ず第一に、ロシアと清国の間に完全な交通路、即ち鉄道を敷設することが必要である。ロシアの兵力は常に欧露に集中されているので、一朝有事の際に清国の救援

に向かうには、欧露とウラジオストクとの両方面から兵力を必要の地点に移動する必要を生ずる。現に日清戦争の際にロシアが万一の場合を考慮してウラジオストク駐屯兵を吉林方面に移動しようとした時も、道路の無いために、その兵は戦役の終る頃に至っても、まだ吉林に到達し得なかった。そのため支那の領土保全を確保するため当面の急務は鉄道の建設である。」

李鴻章は私の外交交渉になかなか応じなかったが、好機は1894年11月、ニコライ二世の帝即位の戴冠式が行われる時が来た。清国は大官李鴻章が派遣されることは異例で、それは日清戦争の終局に於いて遼東半島を返還と償金の外貨募集に尽力したロシア新皇帝に謝意を表す意味で来露した。

私はこの好機に「東支鉄道」敷設路の交渉を成立させ、秘密協約によって蒙古・満州を経てウラジオストクに至る敷設権利を得た。この三国干渉の裏には遼東半島返還への協力と、清国に負った対日賠償金をフランスからの借款介入し、恩を売ったロシアは1896年5月、皇帝ニコライ2世の戴冠式に李鴻章は出席させて「露清秘密条約」を結び、李鴻章は50万ルーブルの賄賂を手にした。》と記している。

「露清秘密密約」の主な内容は下記の通りとなる。

★日本が朝鮮・清国に侵攻した場合、露清両国の陸海軍で援助する。★両国の同意なくして平和条約を結ばない。★戦争の際には清の港湾は全てロシア海軍に開放される。★清はウラジオストクへ至る鉄道建設を許可すること。★ロシアは鉄道により軍隊と物資を自由に輸送できる。★この条約は15年有効とし、期限満了には双方が条約継続を協議ができる。

『蹇蹇録』 陸奥宗光著「露、独、仏三国の干渉・下」(筆者により読みやすく直した)

《明治28年4月23日、露、独、仏三国の干渉が突来すると、その翌24日、広島行宮で御前会議を開かれ、廟議は第三国との和親は到底破ることはできない。新たに敵国を作るは断じて得策でないことと確定したのである。・・・社会はあたかも一種の政治的恐怖に襲われ、驚愕極まって沈鬱に陥り、憂心忡々、今にも我が国の要所は三国の砲撃を受けるような虞を感じ、誰一人として目下の大難を匡救(危険から救う)すべき大策ありと高談する者ない。・・・物情恟々(世間の心情)ひたすら速やかに時艱の去るのを黙禱するのみ。かくて十有余日を経過し、遼東半島の還附は遂に露、独、仏三国に盟約され、日清両国の講和条約は芝罘(煙台)に於いて首尾能く批准交

換を了するに至り、世人は茲に始めて事變の猝發(にわかにかきた)すべき眞なきを知り、漸く積日の愁眉(心配)を開くに至ると共に、且つて彼らが胸裡(胸の内)に鬱積(心に溜る)した不平不満の念は一時に勃發し、昨日まで驕り高ぶって人を見下すことを抱いていたが、今日の終天(万世)の屈辱を蒙ることによって、その思いを反省し、各人その驕慢(おごり)を挫折した度合に従い、非常の不快を覚え、彼の不満と、この不快とは早晩いずれの所に向かって声を張り上げるか、自ら慰さめに至るには、また人情の自然なるべし。……。(略)

而して平素政府に反対する党派は、是の如き社会の趨勢(ながれ)を視て、忽ちこれを利用して、総ての屈辱、総ての失錯を政府の責任に基づくものとし、大いに政府の外交を非難した。戦争に於ける勝利は外交に於いて失敗したと、攻撃の喚声は四方に起り、その反響は今なお轟然(騒がしい)としている。政府がかかる非常の時に、非常の事を断行する時は、深く内外の形勢に斟酌(相手を汲みやる)して、遠く将来の利害を押し計った政策を、いくら審議精慮(せいりよ)ほどこしても、その計策は一として上手く行かないものである。思い切って、国難を匡救(危難から救う)し、国安民利を保持する道をここに示し、以てこれを断行するに至ることは、自分はこれを湮晦(滅び消える)すると思っている。

……戦勝の狂熱は社会に充満し、浮望空想殆んどその絶巔に達して、もし講和条約中に、軍人の鮮血を注いで略取するという遼東半島割地の一条を脱漏してしまつたら、如何に一般国民を失望させ、誠に失望することになるだろう。氣勢の馴致(馴れ)する所、是の如き条約は当時の事情に於いて、殆んどこれを事実(行為)に於いて許すすか否や疑うことになる。しかし内外の形勢互に相容れずしてこれを調和することは甚だ難しく、もし強いてこれを調和しなければ、当時起きたであろう内に発したる激動は、その危害を他日あるいは将来起こると推度するわけである。政府は実にこの内外形勢の難しい難題を処理して、時局の緩急輕量を較量(おしはかる)し、常にその重要事項と、かつ急用な事項をかたづけ、内難はなるだけこれを融和し、外難はなるだけこれを制限し、全くこれを制限することができない事項は、尚その禍機(災難)の発することを一日も遅からしめんことに努力し、外交の能事(なすべき事柄)に全力をあげる所存である。……。(略)》 (『蹇蹇録』(原文P 363-369))

第2章 義和団の乱勃発

義和団ぎわだんの乱は1900年、中国の清朝末期に起きた動乱で、義和団事件、義和団事変、北清事件とも呼ばれる。義和団の蜂起は日清戦争後、列強国らによる5年間の間に、弱小国家となった清朝の領土を、列強国に分割競争を激しく繰り広げていた状況下で起きたのが義和団事件である。清国政府の退潮期に現れた愛国的な民衆兵集団が立ち上がり、それに触発された各地の軍閥、馬賊集団たちに伝達され、北支から北満にかけて排外はいがい(外国思想文化排除)戦争に発展した。

同時期の1900年1月、イギリスはボーア戦争(南アフリカ)へ投入兵力(17万4千)を派遣し、同年1月にアメリカはフィリピン独立戦争鎮圧のために8万の増援兵力を送り込んでいた。イギリスのボーア戦争終結は1902年5月31日、米国のフィリピン平定宣言は、同年4月30日と義和団事件と並行していた。

清国山東省で「義和団」が「扶清滅洋ふしんめつよう」(清朝を助けて西洋を討ち滅ぼす)を唱えて蜂起し、同年1月、英・米・仏・露・独・伊・オーストリア 奥太利の各公使が清国政府に義和団暴動の鎮圧を要請した。同年3月に英・独・伊の軍艦が天津の大沽タークウで義和団を想定した軍事訓練を行っていた。大沽は天津の外港にあつて、北京に最短距離の港に義和団が北京に現れたのは4月22日、そして義和団包囲下の北京城では各国公使らは籠城ろうじょうとなったのである。日本国の防衛の指揮をとったのは、北京公使館付武官柴五郎砲兵中佐(後大将)であった。『タイムス』(英国保守系新聞)の記者ジョージ・アーネスト・モリソンによる、北京籠城の記事によって欧米に広く知られ最初の日本人柴五郎中佐となる。柴は陸軍内部きっての中国通(語学堪能)で、共に総指揮を取ったイギリス公使クロード・マクドナルドにも柴中佐の勇氣と礼儀正しさに感服している。



駐日英国公使クロード・マクドナルド



柴 五郎中佐(当時公使館付武官)

義和団の蜂起の概略 (『北京籠城』柴 五郎述・大山 梓編 東洋文庫。『近代日本戦争史・I』「北清事変」川野暁明著。『東洋外交史・上』植田捷雄著・参照)

ロシアは清国と「露清密約」(1896年)(ウイッテと李鴻章が秘密に結ぶ。『タイムス』のモリソンが暴露記事は後述する)を結び、東清鉄道敷設権、旅順・大連の租借(1895)に成功し、仏国は西南諸島の利権獲得(1895年)と広州湾を租借、ドイツは膠州湾を租借(1898年)と山東の鉄道敷設権を取得した。英国は威海衛(山東省)と九龍半島(ホンコン)を租借、日本は福建省不割譲に関する交換公文要求、即ち、清朝政府に対し台湾の対岸の福建省を外国に割譲しないと確約を交わした。

こうした列強の進出に清国内では「仇教滅洋」(反キリスト教)・「扶清滅洋」などの掲げた排外攘夷の機運が高まり、白蓮教(南宋から清代までの宗教団)や八卦拳(中国武術)や離卦拳(武術)の流れを組む徒らの暴徒が蜂起した。

列強国の我が物顔で清国大地の利権獲得は、中国民衆の反感と怒りを買ひ、暴徒らは清国を脅かす列強国に刃向う義徒となり、それを組織したのは独自の武術・拳法をもった新興宗教たちが「義和団」となっていく。明治33年(1900)2月、山東省で蜂起した義和団は「興清滅洋」(清朝を扶け西洋を滅ぼす)、欧米帝国主義打倒のスローガンを挙げ、北上して急速に勢力を拡大した。帝国主義の抑圧に苦慮していた清朝は、この義和団の活動に期待し、清朝政府の西太后たちは義和団を援護し、欧米列強国に対抗する軍隊の様相に発展させた。これに対し日、露、独、仏、伊ら7カ国は、水兵計394人を集合させ、公使館保護のため5月31日北京城へ入城した。しかし、6月3日、黄村停車場(現北京市大興区)と付近の橋梁が義和団の襲撃より破壊され、北京―天津間の鉄道が不通となり、北京は事実上の孤立無援の街となったのである。

日本人は軍艦「愛宕」(大型巡洋艦)から水兵25余人が入城し、総指揮を取ったのはイギリス公使クロード・マクドナルド(写真18頁・英国外交官)が各国の義勇隊員の総合の指揮を取った。列強国の出兵に激怒した清国政府は、6月19日、24時間以内に各国公使らの北京より立ち退きを要求し、その列強軍に対し宣戦の布告をした。列強国に対し清朝西太后をはじめ、端郡王(愛新覺羅載漪・1856―1922 清の皇族・38歳で端郡王)が陰の指導者となり、義和団に合流して排外愛国団体の「義和団」が各国公館・教会などを襲撃した事件が「北清事変・義和団の変」と呼ばれるものである。

列強8カ国の救援軍は清国軍に阻まれて前進が止り、北京へ軍隊を急派できるのは日本軍のみと考えられ、列強側からは強力な陸軍を日本に救援を求めて来ることを秘

かに日本政府は期待し、北京の公使館の救出と保護は、地理的に近い日本は列強側からの出兵催促を待っていたのである。

6月23日、7月3日、7月5日の3回に渡り、英国から日本の出兵を求める通牒が齎された。英国はこの時期、ボーア戦争（南アフリカ）の最中で、極東の地へ軍を送る余裕はなく、日本もしくは露国に鎮圧軍を期待したのである。日本政府の方策は、先の日清戦争後に三国干渉による遼東半島返還の苦い体験から、この事変の動向も不確実で予断を許さない事情と考え、莫大な出費を伴う大兵力の派遣には、日本政府の判断にも苦慮が伴った。又、列強国間にも日本の派兵に根強い猜疑心もあり、列強国たちは欧州から軍を移送するには時間的に余裕なく、事情は切迫し、列強は日本にその派遣要請を強く求めて来た。日本国に於いて、莫大な軍費と大派兵を費やした場合、果たしてこれに見合う代償が得られるかどうか、列強がその費用を保障の担保を受けてくれるかの問題も憂慮した。しかし、日本政府の深層に於いて、日清戦争後の三国干渉によって遼東半島返還の苦渋から、自からの出兵はできるだけ抑え、列強の要望が高まるのを待ちながら行動を起す方策をとった。又、政府首脳らは軍兵を派兵し、この乱を平定すれば列強に恩を売ることが出来ると考え、時の陸軍大臣桂太郎は「将来東洋の覇権を掌握すべき端緒(手がかり)になる」と考え、列強帝国主義陣営の一翼に肩を並べる好機と捉え、政府首脳は大陸への進出に期待を抱いていた。

5、6月、義和団は北京、天津^{てんしん}地方を支配し、北京の列強側の公使館を包囲し、6月10日には、20万の清朝軍と義和団軍が北京に入り、当初、清国正規軍は傍観する立ち位置にいたが、清朝軍は義和団と共同戦線の旗を挙げ、各国公使館連合軍に攻撃を開始した。生命危機に迫った北京城の各国公使館員や在留民・キリスト教民など合わせて4千人余が北京城に避難籠城となった。援軍の来るまでの55日余(米国映画コロネル・シバの名で『北京の55日』)抗戦籠城事件の舞台となった所である。

抗戦籠城の経緯 外務省編『日本外務文書』には西公使（西徳次郎・清国駐在公使）が青木外務大臣に電報「北京籠城戦況一斑」とその内容の5区分は下記の通りとなる。

第一期 6月1日ヨリ6月10日マデ 義和団匪鉄路破壊

第二期 6月10日ヨリ6月20日マデ 団匪北京ニ闖入^{ちんにゆう}シテ外人家屋焚焼^{ふんしょう}、教民虐殺

第三期 6月20日ヨリ7月17日マデ 連日戦闘

第四期 7月17日ヨリ8月6日マデ 事実上休戦

第五期 8月6日より8月13日マデ 一面平和的交渉 一面ヨリ襲撃

参謀本部編『明治33年清国事変戦史』「戦闘時期」に、《6月20日ヨリ7月16日ニ至ル間ニシテ、昼夜連続激烈ナル攻撃ヲ受ケ、列国護衛隊死力ヲ竭シテ防戦ニ従事シタル時期。「外交時期」7月17日ヨリ8月14日解圍ニ至ル間ニシテ、一時休戦ノ形勢ヨリ、続テ列国公使ト総理衙門（外交官庁）ト相互交渉シタル時期》とある。

6月13日から義和団の攻撃を受け、北京と天津との交通も遮断され、公使館の区域から北京市街へ出ることもできず、事実上籠城となる。日本側の総指揮官は公使館付武官柴五郎砲兵中佐となり、戦術能力にも各国武官が認められ、その能力を活躍期待される籠城となって行くのである。

ロンドン『タイムス』紙の社説に「籠城中外国人の中で、日本人ほど勇敢に奮闘し、その任務を全うした国民はいない。日本兵の輝かしい武勇と戦術が、北京籠城を持ちこたえさせたのだ」。この記事を記述したのはアーネスト・モリソン記者で、柴中佐の親友でもある。モリソン記者については6章で後述べる。

籠城ができるような武器弾薬、食糧の備えも無く、兵力も無く大変な苦勞多き籠もりとなった。乱徒の義和団は攘夷救国の旗の集団であるから、長髪を背に垂らしていたので「長髪賊の乱」とも云われ、又全満州の馬賊(民兵集団)もこれに呼応して蜂起したので、やがてこの事件は、中国各地の軍閥、馬賊集合の発展乱徒となり、北支那から北満州に広がり「北清事変」とも呼ばれた。籠城の経過を見て行く。

『北京籠城』柴五郎述（明治34年12月29日講演記録）東洋文庫53より抜粋する

《私（柴五郎）は軍事教育会より頼まれましたので、本日の講演は諸君に北京籠城の講話をいたします。ご承知の通り、昨年の北京籠城は60余日に渡っての話なので、詳しく話すには少なくとも10数回になるので省略しながら話します。護衛兵が北京に入ったのは、5月31日で、各国護衛兵の数は、皆で430人程でありました。

日本は将校1、下士以下24、イギリスが将校3、下士以下79、フランスが将校3、下士以下75、ロシアが将校2、下士以下49、ドイツが将校1、下士以下50、オーストリアが将校3、下士以下30、イタリアが将校2、下士以下39、アメリカが将校3、下士以下53でありました。或る国にては、海軍の小口径の速射砲や、機関砲などを持参して来ました。イギリスは88年製の5連ノルテンェルド機関砲1門、オーストリアが機関砲1門を持って来ました。イタリアが37ミリ機関砲1門、アメ

リカがコルツ機関砲1門、ロシアは小口径野砲1門を持ってくるはずが、何か鉄道運輸の都合で弾薬だけ持参、砲は次の汽車で送る手筈となっていたが、天津に残し次の汽車より不通になり、役に立たなくなりました。・・・。

6月13日から16日頃までは、彼らは、昼間は公使館の区域には襲来しません、夜になると各方面に少しずつ来襲がありました。彼らは公使館以外の各所には火をつけたり人を殺したり、残酷な事があったようです。就中の14日の夜、外城にいた幾千百の基督教民が義和団に逐い回わされ、男女老若、公使館外の城壁下に来て、悲鳴号泣して救いを呼ぶ声と、これを容赦なく虐殺する団匪(暴徒)の怒号と、相混じて実に凄惨でありました。・・・外国人や支那耶蘇教民を公使館区域内に連れ入れ、その支那教民の男女合わせて3千余。16日、私も日、英、米の兵を40名ばかり率いて北京の東北部に行き、義和団の屯している寺を囲み、50名ばかりを銃殺して、教民の若干を助け出しましたが、気の毒なことに、寺の柱に縛られていたため、我が方の弾にあたり義和団と一緒に殺された教民いました。

6月21日　・・・この日は、露清銀行(シベリア鉄道建設のため清・露間創設銀行)の西側にあるオランダ公使館も焼かれ、この日より、敵は大砲二門ばかりを正陽門(図面左側一番下)に上げ、諸公使館に向けて射撃しました。その弾丸は7センチ半のクルップ砲の榴霧弾(破片が飛び散る)で、我々の頭上で矢鱈に破裂し、若干の支那人に怪我のみで、外国人には負傷はありませんでした。・・・。

6月22日　・・・英国公使「サー・クロード・マクドナルド」氏(後、駐日英国公使)は、かつて身を軍籍に有って、実践の経験あるこの人を推して全体の指揮を委任することになりました。英公使は早速これを承諾し、即刻命令を伝えて、米、露兵は直ちに各その公使館に帰し、伊、仏、独、^{オーストリア}「^{オーストリア}」の兵は、日本と共に^{しよくしんのう}肅親王府(図面25頁・清の皇族・清朝8大世襲家の筆頭)防禦の指揮は、私(柴)に命ぜられました。・・・「こんな広い混雑きわまる家屋を防禦することは到底できない」という異論が盛んに起こりました。各国の兵は皆この肅親王府を引揚げて、日本人だけがここに留まりました。・・・当分援軍の来る望みは無いと断念し、そこで今後は愈々日本の陸軍、もしくは露国の陸軍が、大挙して出兵を待つより外はない。それにしては今後、幾日待てば援軍が来るだろうかと、日々指を屈して算する者があり、支那兵いかに弱くとも、援軍が^{クークー}大沽に上陸するのは容易であるまい、・・・。

6月23日 . . . この日の早朝、肅親王府の北50メートルばかりにある^{りはんいん}理藩院(図面中央上・清朝の中央官庁)あたりに、多数兵集合する様子が見え、9時頃になりますと、500ばかりの支那兵が肅親王府と塙公使館の間より、^{そうぜいむし}総稅務司(図面右上・税関)および肅親王府の東阿司門付近まで迫って来ました。そこで日本兵の一部を、府の屋上及び壁上に上げて射撃、私と日本兵は応援に駆けつけました。税関の義勇兵とで、20人余を連れて総稅務司西側民家の間より突き出しました。安藤大尉は、日本兵8名ばかりを率いて、稅務司の南より出て、どうやらこうやら敵を追い退けましたが、敵は総稅務司に火を放って退きました。この頃日本の義勇兵中、獵銃を併せて銃器を持っておる者は3、4人にして、いかにも困りましたから、英公使へそのことを申した処、イタリアの「パオリニー」大尉が、兵を10人率いて来援しました。この日、我が方面で負傷をした者は、日本兵が3人、イギリス兵が1人、イタリア兵が1人、支那人が5、6人もありましたが、死者は出ませんでした。 . . .

6月24日 . . . ^{はなは}甚だ兵の不足に困り、急に援兵を乞いにやりましたら、独、仏、塙の兵を、各々10人ずつよこしてくれました。各国より10人ばかりの援兵は、いたって少ないように思われますが、当時10人の兵を他に援兵にやるというのは、中々容易なことではありません。 . . . 昨夕よりイタリア兵の全部の將兵以下27名、肅親王府に入り、私の指揮に属することになりました。英公使の方より、英公使館が危急であるから、援兵をよこせと言ってきました。それでまた安藤大尉は、太刀を振って、その時すでに英公使館の一部に進入しつつある敵中に飛び込み、各人これに続いて突貫し、ついに敵を撃退したそうで、後に、諸外国人みな安藤大尉の勇氣に感服しておりました。この日肅親王府では、仏兵1、伊兵2、耶蘇教民が2人死亡、負傷兵は仏兵1、耶蘇教民が9人、日本兵が1人おりました。耶蘇教民男女3千ばかりを、置き所無いため、肅親王府の正門面の広場、及び西阿司門西の並木のある広場に入れて、自然、日本人に直接に保護されるような形になり、彼らも、大いに我が日本人を恩に思い、我らの言うことをよく聴き、よく働きました。 . . .

6月25日 . . . 我が義勇兵中村秀次郎氏は、仏公使館の北裏門(中央左上)の哨所にて戦死しました。この人が日本人中第一の戦死者で、この外、我が方面にて日本人4名負傷し、塙兵1名戦死、仏兵1名、伊兵2名、支那教民4名負傷しました。 . . .

6月27日 . . . この日我が方面の死傷は教民13名、ここに私は、この日の戦いに英兵の沉着なる挙動に関心いたした。 . . . 樹の下にわずかな高さの煉瓦^{レンガ}を積んで、

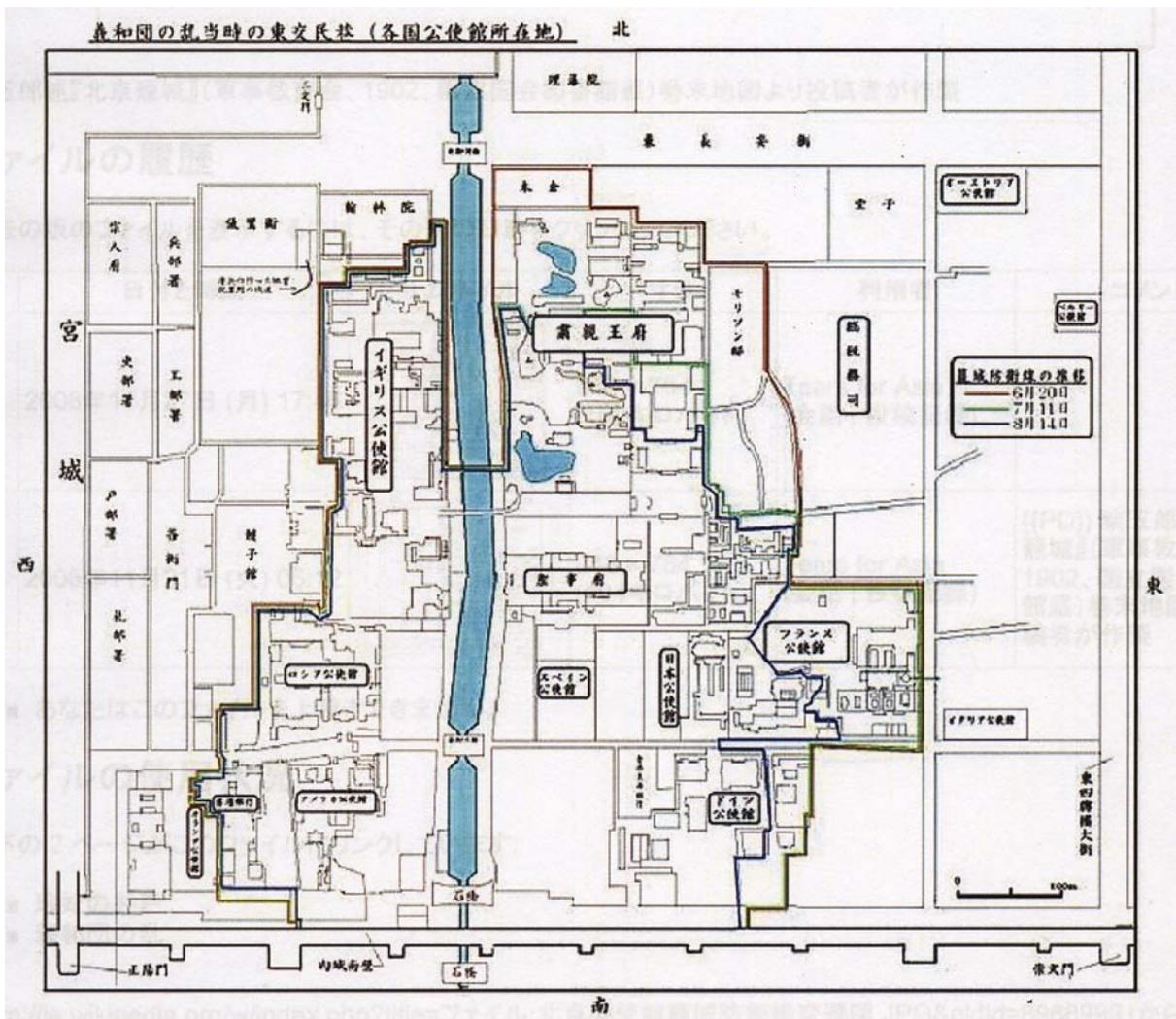
その蔭に英兵が5人隠れ、しきりに射撃して、私は往来(車道)を隔て、こちらの物陰におりましたが、時々彼らの方に様子を見に行きますと、危ないからもうくるなど言います。そのうち射撃が益々激しくなり、いかにも危ないから、私は手招きをして英兵に、こちらに来いと言いますと、英の伍長は^{はなは}甚だ沈着して、部下4人の兵を1人ずつ指図して、時機を見計らい、身を低くして往来を横切り馳せさせますと、そのうちの1人が、往来の真中へ弾薬を10発ばかりこぼし、はじめて弾薬を落としたことに気がつき、こんどは身を平たく蜘蛛のようにして、地面をはって敵弾雨飛の下に出て行き、落とした弾薬を^{ことごと}悉く拾って帰り、アングロサクソン人の沈勇な処は、即ちこれだと、私は一人関心いたしました。・・・。

7月1日 ・・・この日もまた総出で大砲取りに出撃しました。この日の出撃は伊の「バオリニー」大尉の発意で、同大尉より英公使に企画を告げて援兵を乞いますと、英公使は大いに危険と思い、重ねて私の意見を求めてきて、私も多分は成功するだろうと考え、伊大尉に同意と答えますと、英より海兵7名、義勇兵5名をよこしてくれました。そこで伊の大尉は、伊兵に英、仏、墺の援兵20余名を合して、府の西側より突いて出て、我々日本人は、府の東門の閉鎖を乗り越えて、C角の北方にある大砲を奪いとる計画で、両方合図を決めて出ました。・・・伊兵は^{トンネル}隧道より出て、府の周壁に沿って北門外に向い、この小路に築かれた堅固なる敵の胸壁(身を隠す)に突き当たり、この小突撃隊は、勇を鼓舞してこの障碍を^{のつと}乗取る際、伊の大尉は重傷を負い、やむを得ず苦戦しつつ退却し、2名の戦死者はついに敵手に捕われました。・・・この日の失敗は、最初英公使が危ぶむにも拘わらず、私が伊の大尉と共に出撃を主張いたしたので、籠城以来の大損害を出したのは、まったく私の罪であります。・・・。

7月4日 ・・・この日より、列国糧食委員にて、馬、^{ろば}驢馬、^{らば}騾馬などの肉を配分し、人々勝手に獣を^{はふ}屠り、または^{へい}斃獣の肉をとることを禁じました。元来、牛、羊、豚などは、籠城2、3日目より尽きて、その後は、主に馬、驢、騾の肉を食しました。最初我が線内にあった獣類は、150、60いましたが、飼料に欠乏したころより、肅親王府の西南、庭の隅の所にある池に、たくさん芦やその他の草が生え、ここに放し、次第には府中を駆けて木の皮や小枝を食って回り、その際敵弾にあたり^斃れた獣、毎日1、2頭あり、列国糧食委員の手にて配分するようになりました。・・・。

7月6日 ・・・安藤大尉は、終にこの日の晩亡くなりました。実に哀惜に堪えま

せんでした。大尉は以前より支那のことに志し、今回、家宅を売却して、自費留学を
 思い立った人で、事の始まりは5、6日前に北京に到着が、北京、天津間の汽車不通
 となり、その日の朝、用事を帯びて天津に行くために停車場まで行き、汽車不通とな
 り籠城となってしまった。この程の想いでいた安藤大尉の最後を遂げたのは実に不運
 の人でありました。・・・英公使の人は、大尉の死を聞いて、悲痛の弔詞をよこしまし
 た。・・・私はいつも葬式に列する^{いとま}違はありませんが、大尉の時だけは、間を^{ぬす}偷んで、
 戦闘線の人に隠れるようにして葬式に列し、一^だ朶の草花を手向けたときは、^{かんがい}感慨のき
 わみ^{しばらく}少時は墓前を去るに忍びませんでした。



北京公使館籠城図・『ウィキペディア』より(柴五郎述『北京籠城』・軍事教育会 1902年・投稿者作製)

7月16日 ・・・我々日本人は、開戦以来約1カ月余、ほとんど^{きょうへき}胸壁塹壕(身を隠
 す壁・土盛り)にしがみつ、炎熱雨露に^き晒されて戦い、毎日平均3、4時以上の睡眠
 を得ず、衣袴破れても^か更える^{いとま}違も余裕もなく、ことに食糧は10余日前より半減とな
 り、甚だしいのは負傷3回に及び、休むことを許されず、人々は^{こんぱい}困憊の極に達した。・・・

この日私はストラウツ大尉および「タイムス」新聞記者のモリソン氏と共に、歩哨線を巡視していますとストラウツ氏は打たれ、私は軍服の左脇を打ち貫かれ、幸いに免れました。ストラウツ大尉は間もなく絶命しました。・・・。

『北京作戦日誌』7月16日の記事に、「『ケプテン・ストラウト』、「ドクトル・モリソン」ハ柴中佐ト伊哨ヲ巡回ノ帰途、停山ノ西下ニテ、「ケプテン・ストラウト」狙撃セラル、之ヲ看護中、「モリソン」モ、足部ヲ射ラル、柴中佐ハ幸ニ、軍服ノ左腕ヲ貫カレタルノミニテ、負傷スルニ至ラズ、「ケプテン・ストラウト」11時頃、永眠ス」と記述がある。



北京城乱徒防衛状況・yahoo



紫禁城(故宮博物院)に集結する連合軍



時の陸軍大臣桂 太郎

7月20日 ・・・おかしなことには、諸公使が難儀をして困っておられるだろうと、西太后(1835-1908・清の第9代咸豊帝の妃)からのお見舞いといって、西瓜、黄瓜、茄子などを車に4台送って来ました。一方では頗る強硬な手紙がくるかと思えば、また一方よりは西瓜のお見舞いなど来るといっているので、甚だ不可思議で思い、この頃の清国政府は、平和派と主戦派とが、互に議論が一致しなかったものと見えます。

《『北京作戦日誌』7月20日の記事。「西太后ノ名ヲ以テ、西瓜、黄瓜、茄子等、車4台ヲ、英館ニ在ル外人一般ニ送り来ル」とある。

7月27日 ・・・この頃よりは、敵の隊長よりも毎々使いをよこしたり、矢文を射たり、ことにおかしい事は、犬の首に手紙を結んでよこしたりして、しきりに天津へ出て行けとか、早く降参したら命だけは助けて、本国へ無事に帰してやる。もしいよいよ聴かずに、出ても行かず、降参もせずに24時を過ぎると、皆殺しにするから覚悟せよ、などつまらぬことを書いてある。・・・。

8月1日 ・・・午後になり、去る22日に出した密使が、26日付きの福島少将の手紙を持ってきた。・・・その大意は、大活の上陸困難にて意外に日時を費いやし、

鉄道も自由に使用できず、また白河の舟が不足で糧食、弾薬の輸送も予定通りにできぬ。それがため今に天津を出発できないが、昨25日私(柴中佐)の書に接し、北京の危急を^{つまびらか}に「詳」になったので、火急に北進して救いだすと、列国軍間で協議中であると。たぶん両3日中に、1万5千ばかりの兵で、準備整い次第、通州を経て北進する予定、とありましたが、まだ中々援軍は来ないということが分かりました。・・・6月20日以後、我々日本人の手により28通も出しましたが、そのうち無事に目的地については4通、また援軍の方より我が手に達したるものは3通のみで、・・・手紙はもちろん暗号で、色々と工夫をして紙縊^{こより}に^よ撚り、多くは日本の雁皮^{がんぴ}(ジンチョウゲ科の植物の和紙)を用い、これを衣帽靴底などに縫いこんだり、傘の竹柄^{たけのえ}などに押込んだりいたしました。・・・。

8月9日　・・・この頃、糧食^{いよいよ}愈々欠乏して、教民の婦女、小児などは草木の葉だの槐^{えんじゆ}の花などを食っているのを見ました。・・・。

8月14日・15日　・・・一同はそら援軍が来たというので、飛び立つように喜んで、ほとんど狂気のようにありました。・・・胸壁上から首を出して辺りを見ますと、敵はもはやおりません、すぐに塹を越して飛び出して見ると、敵はよほど、周章^{あわ}てて遁^にげたものと見えて、残飯や鞍置いた馬などそのままに遺^{のこ}してありました。・・・。

そこで一つ疑問なのは、支那兵いかに弱くとも、1万内外の多数にて、しかも大砲を持っていて、4百に足らぬ外国兵に、しかも弾薬糧食ともに窮乏^{こんぱい}して困憊^{こんぱい}を極めていのに、本気で攻撃して攻め落とせないことはない。そうしてみると、彼らは最初から、各国公使を殺戮しようという考えではなく、ただ猫が鼠^{もてあそぶ}を「弄」するように若干月日間^{なぶ}騷りものにしたのに過ぎず、即ち真面目^{まじめ}の攻撃をしたのではなからうと、こういう疑問を起すのであります。

・・・わが海軍陸戦隊の勇健なる働きは、実に称賛に堪えません。彼らは下士以下非戦闘員ともに24名でしたが、常によく全体の骨幹になり働きました。彼らの中にまったく無疵^{きず}のものは僅かに5名だけで、5名は戦死し、他の14名は負傷いたしました。その負傷も一度ならず二度、三度、甚だしきは五度も銃傷を負い、繃帯^{ほうたい}にて頭を縦横に巻いて戦っている者もあれば、足を撃たれて碌々^{ろくろく}歩けぬために、塹壕^{ざんごう}の中に坐ったままで戦っている者もありました。彼らは不慣れな陸戦に従事し、ありとあらゆる危険^{こわ}に堪^こえた。・・・府中内より見つけだした「オルガン」を鳴らして、冗談を言うたり笑ったりして、少しも惨めな様子がありませんでした。

2名を選抜して、県庁の給仕として採用した。その一人が柴五郎である」とある。

柴五郎砲兵中佐（最終階級大將）安政6年(1859)会津藩士柴佐太蔵の五男、戊辰戦争の時10歳で、親たちの計らいで五郎を戦火より逃し、柴家の血を守ったという。

明治6年陸軍幼年学校、同12年砲兵少佐、同17年中佐、日清戦争には大尉、少佐で大本営陸軍参謀心得、戦後駐英公使館付、翌年北京公使館付武官となる。義和団事変に於いては8カ国の籠城の指揮をとり、英語、仏語、中国語に精通した柴中佐は各国の相互理解に大きな役割を果たした。総指揮者は英国公使クロード・マクドナルド、現場指揮を執ったのは柴五郎となり、開城後、日本人柴中佐は欧米人から賛辞が寄せられた。英公使マクドナルドは日本人の勇気と礼儀正しさに心服し、日英同盟の構想の切掛けは、マクドナルドと柴五郎の信頼関係が始まりと云われている。柴中佐は英国ビクトリア女王から、又列強国からも勲章を授与されている。

柴五郎の中国観 義和団の蜂起に列強側は彼らを「賊徒」と呼び、所謂馬賊（^{いわゆる}賊）と称するものは、正規軍の勢力の及ばない地域を守る民兵集団で、夫々の地域ごとに協定が形成され、義和団の蜂起に繋がる情報網が出来上がっていた。

17—18世紀、ロシア軍がシベリア・アムール河に進出したときには、「^{フィンフーズ}紅鬃子」と称する集団が常に馬に乗って襲来し、この集団がカザック（コザック）、ダットンと呼ばれ歴史を刻む。この集団が地方軍閥と手を結び、その戦力集団が清国正規軍と結びつき、北支から北満にかけて暴走したのが「義和団事変」に発展したのである。

柴五郎は後年、北京籠城の経験を振り返り、列強国のみ褒め称えるのではなく、影の功労者として、清国教民（キリスト教徒）の献身的な協力に言及し、少数の日本義勇隊による^{しゅうしんのう}肅親王府（清朝筆皇族府）の防衛を維持できたのも、清国教民の助力の賜物であると明言している。真に中国人を理解し、真に中国を知り、真に中国の友たらんとした多くの人々たちは、その後、軍の中枢から次第に外されて行くのである。

この事変後、「馬賊」の頭は、日露戦争、満州建国草創期、日支事変に於いて日本軍はこれらの馬賊を利用し、そのあげく匪賊の名を冠して討伐した。柴はこの賊と云われた人たちに終生心傷を負っていた。

後のことであるが、昭和17年の秋、柴五郎翁は「この戦^{いくさ}は負けです」と石光真清に確信をもって言ったとある。（『ある明治人の記録』第二部「柴五郎翁とその時代」）

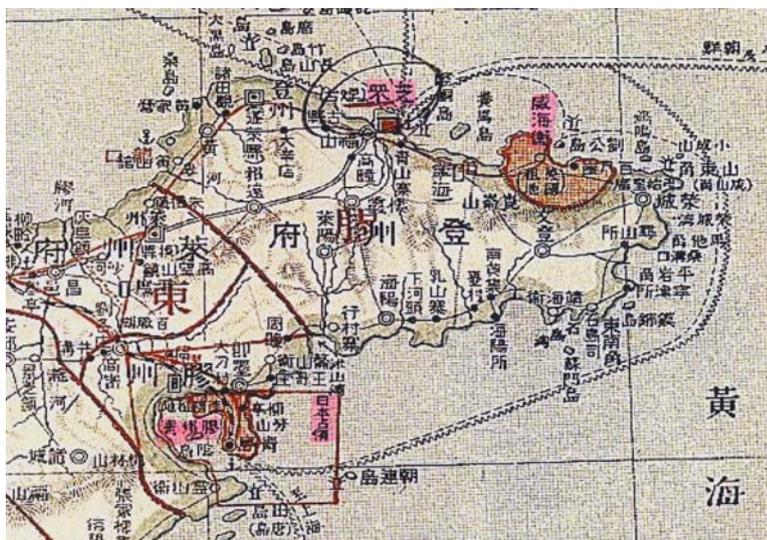
義和団事変後の日本・露、仏、独、英国・米国の中国分割の意図

義和団の乱の第一報を受けたロシア陸相クロパトキンは笑みを浮かべ「満州を占領する口実ができた」と語り、ロシアは満州を乱徒征伐の名の下に満州を占領した。ロシアは朝鮮に及び、日露の緊張は高まりこの緊張が日露戦争に繋がって行くのである。

ドイツは1897年、山東省で自国の宣教師が殺害されたことを口実に、^{膠州湾}を占拠、翌年ロシアと内応して膠州湾の租借権と山東省の鉄道敷設権と鉞山採掘権を獲得する。ロシアはドイツの膠州湾占拠を見たロシア艦隊は急ぎ派遣し、遼東半島の旅順・大連を占拠して、1898年に遼東半島全域の租借権を獲得した流れとなる。

日本は日清戦争後に、露・独・仏の三国干渉により清国へ返還させられた遼東半島は、清国は日本への賠償金の仲介をしたロシアに報酬として遼東半島を差し出す結果となった。フランスも清国へ賠償金の融資担保権として、ロシアと提携して1898年に広州湾の租借権を得た。イギリスは1898年、日本軍が威海衛を撤退すると、ロシアに対抗するために威海衛の港を租借した理由は、ロシアに遼東半島を勝手にさせない牽制であり、日本側と了承の上に租借している経緯となっている。

この時期の陸軍大臣桂太郎は、今回のような数カ国連合軍が成立したことは歴史上初めてのことであり、同盟に参加は列強国の一角にくい込むことは、願ってもない絶好機が到来したのである。この時、桂は列強連合軍への参加こそが「将来、東洋の覇権を掌握すべき端緒」と考え、いま派兵する軍隊は「列強の伴侶となる保険料」と桂は云い、列国の援軍到着する前に、乱を平定すればその功績は日本に帰し「各国ハ永ク我国ヲ徳トセン」と桂は述べている。



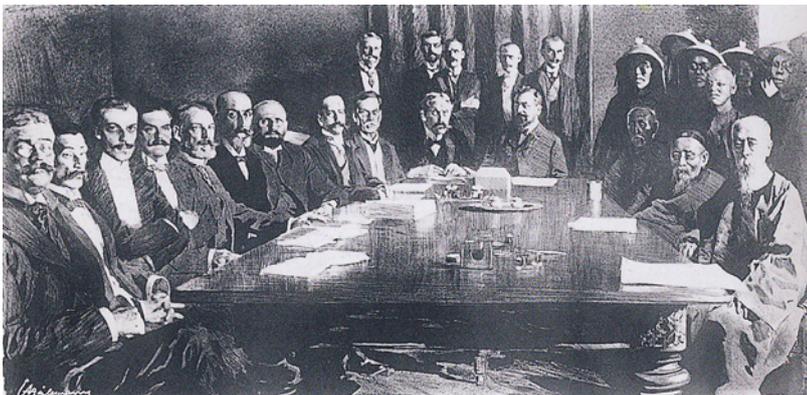
黄海山東半島は旅順大連対岸となる・威海衛と兗州(チーフー)・左下が膠州湾

列強国の仲間入りを果たし、明治政府の指導者の喜びが溢れている。ロシア軍は北京救援と称して満州に軍を入れて、8月30日黒龍江省、9月21日に吉林省、10月2日満州奉天を占領した。

このロシア軍の脅威に、日本を「極東の憲兵」として期待したのは列強イギリスである。ロシアの南下を軍事力で極東を阻止できる国、それは日本に他ならない。イギリスは将来に於いて、日本こそが利害を共に出来ることを自覚し、イギリスは駐英公使林^{ただす}董に急接近したのが、日英同盟案だったのである。



北京城入城時に撮った写真



北京列国会議での小村寿太郎・左より2番目・右側・右端は慶親王、隣が李鴻章
1900年10月8日北京各国公使会議開催の様子・『骨肉』より。義和団事変
に於いては、講和会議全権として事後処理にあたる。

第3章 ロシアの極東への進出と日本との軋轢

ロシア帝国ニコライ2世皇帝が何故極東へ野望を果たそうとしたのか、それを理解するために、先ずドイツ国を見て行く。ドイツは稀有の大政治家ビスマルクが辞任すると、名実共に独裁者の位置に着いたカイゼルが、ヨーロッパ政策から世界政策へと大きく舵をきった。それは極東に於いて日本と清国の間に明治28年(1895)下関条約に基づき、日本に割譲された遼東半島を返還されたことによる。露国、ドイツ、フランスの三国干渉により返還された事により、列強たちが次に手を打つ極東地域への展望と策謀を考えた。ドイツは1892年に締結された露仏二国同盟は、両国に挟まれたこの同盟はなんとしても無力なものにしたかったのである。そこでカイゼルは、ロシアが極東経営に乗り出すチャンスを待っていた。好機到来は日清下関条約(1895年4月)が締結し、カイゼルは独露両国が手を携えて遼東半島に乗り込むことにより、露国を極東に釘付することができる。そうなればドイツはフランスの復讐の恐れは無くなるのである。次にカイゼルの行動を追うことにする。

独逸皇帝カイゼル(ヴィルヘルム2世) カイゼルはどのような人物であったのであろうか、その人物像から探って観たい。1888年、祖父ドイツ皇帝・プロイセン王、ヴィルヘルム1世が死去すると、ヴィルヘルム2世の父フリードリヒ皇太子が、フリードリヒ3世としてドイツ皇帝・プロイセン王に即位し、ヴィルヘルムはその皇太子となる。しかし、不治の病にいたフリードリヒ3世は、在位99日で死去となり、皇太子ヴィルヘルムが即位(ヴィルヘルム2世・29歳)が第3代ドイツ皇帝・第9代プロイセン王となる。帝政ドイツ国の議会は皇帝に大きな権力が集中し、国政は皇帝の意志が大きく反映される議会となり、「世界で最も力のある玉座」と評されていた。

英国女王ヴィクトリア(1819-1901・英国ハノーヴァー朝の第6代女王・在位1837-1901)の孫がドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の血縁関係となっている。ロシア皇帝ニコライ2世とも従兄弟同士の関係となっている。カイゼル(皇帝の称号)を日本ではヴィルヘルム2世を指すことが多い。

カイゼルの野心 1894年、朝鮮問題を契機として勃発した日清戦争の結果、講和条件によって日本官民共に歓喜したが、それも東の間、三国干渉により日本はやむなく遼東半島を返還の経緯となる。日清戦争開戦時はドイツの動きは消極的であったが、次第に変化が現れた。露国ウィッテの『回想録』に、「膠州湾の占領によってドイツ

皇帝(カイゼル)は我がロシア政策に最初に刺激を与えたということは事実である。恐らく彼は我がロシアの立場を、あらゆる方面から見て、カイゼルのドイツ政策は、当時ロシアを極東の地に冒険に押しやろうと努力していたことは明白である。ドイツは露国との東部国境安全保障を確保するため、我がロシアの勢力を極東方面へ移動させようとした」と述べている。

カイゼルの対露政策は、三国干渉への参加することにより、寧ろヨーロッパ政局の危機より打開の糸口を探し、遠大な世界政策の一端として生まれてきたものと解すべきである。領土的野心、日本との通商上の利益を疎外の目的の様に見えるが、真の目的は欧州全体の政策より割り出された、ドイツの対露政策の一環であった。極力ロシアの極東経営を援助して、門前の虎を満州の野に追いやる事に、ドイツの三国干渉の意図があったのである。(『西洋史学』黒羽茂・1954年10月号)

ドイツの極東政策と日露戦争を想定 1901年の極東三国同盟提議問題(独・英・日)は、ドイツが自国の西ヨーロッパ安全保障の手段として、露仏同盟の無力化を計って、ロシア皇帝をヨーロッパ侵略への野心を遠ざけることにドイツ皇帝は心血を注いだ。ドイツ国土をロシア侵食されない様にするにはどうしたら良いかを考え、思案の末、ニコライ皇帝に暇を与えないことの結論に至り、日英両国(当初は独・英・日の同盟)を結ばせ、この同盟にニコライ皇帝を対峙させる企てを仕組んだのが、カイゼル(ヴィルヘルム2世)と云われる。この外交戦術は、日英同盟締結を促した真の動機であったのである。

陸の王者ロシア帝国を極東に神経を向けさせることは、カイゼルにとって対仏政策上、確かに一石二鳥の名案であった。日清戦争後の三国干渉以来、悪化を辿っていた極東状況は、1900年の義和団の乱を契機に、ロシアの行動は様相を一変してしまった。ニコライ2世皇帝の目的は、複雑化した極東侵略は愈々ロシアの行動は露骨になり、満州から朝鮮半島をも含む併合を目指した。カイゼルは形勢の手応えに自信を持ち始め、ロシアの極東覇権出進に、ヨーロッパ列強国は日露の開戦を予測から現実視として捉えた。ドイツは日露が軍事対峙に発展するな



左・カイゼル、右・ニコライ
2世・2人はいとお互となる

らばドイツはこの好機を利用しつつ、仏国だけに対峙すれば良いとの結論に至ったカイゼルの秘策であった。日露の開戦を予想し、ロシアの軍事力を極東に留め置く事ができれば、との想いの発案が、初期の日英独同盟を提唱して、その同盟を煽ったのはカイゼル本人であった。(『世界史上より見たる日露戦争』黒羽茂著)

ロシアの極東政策の意図 ロシアは日本による遼東半島返還と 1900 年義和団事変を好機と捉え、満州進出と不凍港である旅順・大連の進出に大きく舵をきった。この間の英国は南アフリカに於けるボーア戦争に忙殺され、英国単独では満州までの抗議さえも出来ない状態にあった。日本自身の外交方針も満・韓交換説を唱えている状態であり、この段階では満州進出への派兵もあり得ない結論に至っていた。

1900年6月、義和団事件は満州奉天地区の治安が不安定となり、教会の焼打や宣教師殺害事件、ロシアの敷設した東清鉄道も随所で破壊され、義和団の暴徒らは満州の各地に波及した。ロシア政府は義和団事変を好機到来と捉えていたが、当時大蔵大臣のセルゲイ・ウィッテ(ポーツマス全権)は清国の国境紛争問題の解決を親和的政策と考えていた。ウィッテは満州へ派兵反対者で、平和的な方法で清国政府から満州政策(鉄道敷設権利獲得)の譲歩を求めている。一方満州を武力占有する宮廷議会を牛耳るベゾブラゾフ一派(極東の領有する)は皇帝に極東献策し、ウィッテの派兵政策には大きな相違があった。ウィッテの極東政策は「シベリア鉄道を開き、東西の交通を活発にしてヨーロッパ貿易を発展させ、支那向けの綿布・毛織物・金属類の輸出政策を考えていた」。しかし、1897年から翌年にかけて旅順・大連の租借地獲得以後、ベゾブラゾフ一派は宮廷議会を仕切り、ニコライ皇帝を極東侵略策に同意させたのである。ウィッテは大蔵大臣を皇帝から罷免させられ、ニコライ皇帝よりロシアが旅順・大連を占有したことを聞くと、ウィッテはアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公(露国皇帝ニコライ1世の末子ミハイル公の4男)に、「殿下よ、今日の日を憶えていて下さい。この宿命的第一歩がロシアのためにどんなに恐ろしい結果を齎すかを、見ていてください」と述べ、長い溜息ついたと述記している。(『ウィッテ伯回想記』上)

ロシアの撤兵の動き ロシアは清国・日本・列強の抗議に従い、満州撤兵に同意することを決め、1901年4月8日、ロシアは清国との満州還付条約に調印した。

条約はロシア軍の撤兵を3期に分け、6ヶ月間の期間ごとに、計1年半で撤兵を完

了すると伝えてきた。第1期は盛京省（遼寧省）の遼河の線以南、第2期は盛京省残部と吉林省、第3期は黒龍江省という順次で撤兵計画を示していた。

ロシアと清国は露軍撤兵後に於いて、この地区を他の国を入れさせない、清国に返還された鉄道はロシアが経営し、修膳費等の返還などの規定を取り決めた。ロシアは半年後の10月8日までに第1期撤兵を実行したが、明治36年（1903）4月8日、第2期撤兵は実行されず、奉天のロシア軍は撤退の行軍を始めたが、元の兵舎に引き揚げてしまったのである。

陸相クロパトキン（1848－1925 アレクセイ・クロパトキン、日露開戦時ロシア満州総司令官）は欧州西部国境を重視する立場から、満州に大兵力を割く事に反対で、南満州を放棄して、北部満州だけをロシアの勢力圏置くことを皇帝に進言していたが、1903年6月、彼はニコライ2世皇帝の勅命によりクロパトキンは極東視察の途次に来日し、日本の軍事力を高く評価して日本との軍事衝突には一貫して反対したが、日露戦争開戦直前にロシア満州軍総司令官となる人物でもある。このクロパトキンの満州撤兵視察行に鴨緑江（中国と北朝鮮の境）を訪れその足で訪日し、日本世論はクロパトキンに強いスパイ行為と感じとり、彼の日本訪問はきっと開戦偵察にやって来たと日本国民は皆そう思っていた。

クロパトキン自身、日露戦端について、陸軍大臣寺内正毅との雑談の際、「予（クロパトキン）は武官なり。日本より戦を開くに於いては、3百万の常備軍をもって日本を攻撃し、東京を手裡（手の内）に入れん。しかし我一人としては日本と開戦するは決して望ましからず」と、陸軍大臣寺内に語っている。又、クロパトキン回顧録に、「予は日本に於いて最も鄭重親切な待遇を受ける。予は、日本政府と露国との衝突を避ける希望をもっており、露国は満州にて既定の約束を完全に履行し、且つ韓国の干渉することを避ける要を痛感せり。・・・。」（『機密日露戦史』第1章「日露海戦の経緯」）

参謀本部中堅が露国との開戦を要望　日本は開戦論に沸き立つ世論に軍部参謀本部の中堅層が動き始め、明治36年5月29日、陸軍・海軍・外務の中堅幹部が会合し「戦争を賭して」ロシアの横暴を抑制しなければならないという覚悟を決めた。主戦論の中心、総務部長の井口省吾少将（1855－1925・日清・日露戦争代表する軍人）等は、6月8日大山巖参謀総長（1842－1916 陸軍大臣・西郷隆盛は従兄弟）、田村怡与造参謀次長（1854－1903・陸軍中将）が出席、部長会議を開きロシア開戦を主張した。

井口の意見書は、ロシアを満州から追い出し、満州を解放して列強の利害関係の入り混じる地域を実質中立とし、さらに韓国を日本の支配下に置き、旅順・大連の租借地を返還させその上ウラジオストクを日本が領有し、「ロシアの太平洋への出口を塞いでしまう事が日本の安全を確保する道だ」という目標を掲げた。この延長として、今日シベリア鉄道や東清鉄道が未完成であること、ロシア東洋艦隊拡張の途上である現在こそ、日本には最も有利でありロシアには最も不利である判断を示し、「今やらねばならない」と声を大に訴えた。日本がこの時期を見逃し、勝てる戦争が勝てないと進言し、開戦の焦りが主戦論を生み出す結果となり、井口の戦争案に対して大山総長は、「ロシアは大国だからなあ」と述べたと伝わる。(陸軍省編『明治軍事史』下)



井口省吾少将

井口総務部長の対露意見具申 『機密日露戦史』谷寿夫著・「満州に於ける露国の行動に対する帝国が取るべき処置に関する意見」より。

《・・・つらつら日露両国の兵力関係を案ずるに、露国の戦時東亞に使用する全陸軍兵力は23万余なり。此の中西^{シベリア}ベリ^ア、黒龍両軍管内及び関東州に属するもの、16万余にして、他はモスクワ軍管区に属するものなり。此の最後の7万余人の遼陽付近に到達するには、自今西^{シベ}比亞鉄道の状況にては120余日を要すべし。

・・・之に対する我が陸軍の兵力は13師団にして、其の内少なくとも4師団は開戦の初期に於いて、決戦を予期すべき一地に集中すること難からず。爾後遂次海軍に依り其の兵力を増加することを得るべきなり。右の関係は露国が西^{シベ}比亞及び満州の両鉄道を改修し其の効果年を追いて増加するに従い、露国陸軍歩兵の集中に速度を増加するに反し、我が陸軍兵力を輸送する船舶効果の今後著しき増加を見ざる限りは、殆ど同一の情態に在る^{しか}然るべき(当然)を以って、今日の景況は我が帝国に最有利にして、露国の為^にに最不利なり。

・・・彼我海軍力に就いて比較するに、目下に於ける帝国艦隊の勢力は、露国の3に対する4割合にして、優に露国に対して優勝を占め、明年6、7月の頃両国海軍の勢力は殆んど相比敵すべく、其れ以後は年々露国の勢力を増大し、次第に其の差著しく、我第3期拡張計画通り実施されるものとするも、僅かに老朽艦を補充し若干の勢

力を添加するに止まり、到底露国の勢力に及ぶべくもあらず。・・・。》

更に《27、8年戦役の費用は陸海を合して約2億円を計上し、之を以って今後日露交戦の為要する経費を推算する時は、約5億を以って足りとする。此内、国庫の負担し得るべき額を1億5千万とすれば残り3億5千万は増税によるか、はた公債に依るかの二途に出でず。今之を公債に依るものとして、50カ年償還、年6分の利子と算するとき、戦後国民の負担すべき最大年額は28百万円にして、一国の存亡に係る大事の為には、国民たるもの此額の負担に堪えなければならない。3億5千万の公債は国内に求むべきか、はた外国に求むべきか。・・・》と開戦予算を算出している。

この頃から新聞や世論が、シベリア鉄道の輸送能力が達成されないうちに開戦する主戦論が勢いを増し「戦って勝てるのは今のうちだ」という世論は高まり、明治36年(1903)6月24日4面東京朝日新聞に「七博士意見書」が発表された。東京帝国大学教授の富井政章、戸水寛人、寺尾亨、高橋作衛、中村進午。金井延、小野塚喜平次の7人の博士が、対露強硬策を主張したこの意見書は、開戦論を盛り上げる大きな役割を果たした。内容は桂内閣の外交を軟弱であると糾弾して「満州、朝鮮を失えば日本国の防御が危うくなる」と主戦論及びロシア軍の満州からの完全撤退を唱え、対露武力強硬路線の選択を迫ったものであり、世論も主戦論に後押しをした。この意見書を読んだ伊藤は「なまじ学のあるバカほど恐ろしいものはない」と述べている。

「ドイツの膠州湾占領について」『ウィッテ伯回想記・上』より、この開戦前夜のウィッテは、日露の関係をどのような外交決着を考えていたか、その模索を探る。

《1897年、外務大臣ムラヴィヨフ伯はドイツ軍艦が青島へ入港した電報を受け、この電報に付いて彼に、仕官が「これは多分一時的占領で、間もなく彼等は撤退するだろう。しかし、もし彼等が撤退しない場合には、ロシアその他の各国は強制的に彼等を撤退させるのが至当である」と言うと、ムラヴィヨフ伯は「否」とか「然り」とか答えなかった。ムラヴィヨフは「この占領、もっと正しくいえば、ドイツのこの強奪政策を利用して、ロシアも極東に於ける太平洋沿岸に港湾を獲得する必要があるからだ。それは戦略上重要な位置を占めているこれ等の港湾(旅順・大連)を占領すべきである。今こそこれを敢行するに絶好の機会である」と述べたのに対し、ウィッテは次のように語っている。

「嘗て我々はこういう占領に対し極力清国の領土保全を主張した。そしてこの主張

により日本から遼東半島を放棄せしめた。しかも大連と旅順はその遼東半島の中に含まれている。また我々はその後、日本に対抗して清国と秘密防衛同盟(第三国からの攻撃あった場合に機能する)を締結し、その際我々は清国の領土を占領しようとする日本の一切の方針に対し、清国を防御すべき義務を負ったのである。その様な約束をしておきながら、自らこれらを占領することは非常に不穏な、且つ悪辣な手段である。そればかりでなく、もしこんな悪辣な方法で侵略し、日本や清国に疑惑の念を起させた場合、この方法は大きな危険をもたらすことになる。・・・旅順・大連を占領すれば、親密な関係の清国に非常な反感を起させるに違いない」と信義を説明した。

この意に陸軍大臣(クロパトキン)は「外務大臣がこの手段が危険でないと考えるなら、陸軍大臣としては、旅順・大連の占領は極めて必要なことである」と了解した。ウィッテは「日本もイギリスも決して平然とこれを見逃がしはしまい」と指摘すると、すると陸軍大臣は「それに対しては自分が全責任を負う。日本やイギリスはこの問題に関する限り、何らの報復手段に出ないことを自分は確信する」と言明した。》

ウィッテは平和的外交を進める政策を考え、ベゾブラゾフ派は「日本は絶対戦争を起す国力と気力がない国」と宮廷派は考えていた。



ハバロフスク公園ムラヴィヨフ像 アレクセイ・クロパトキン アレクサンドル・ミハイロヴィチ太公

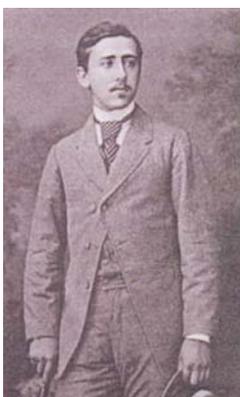
注・ニコライ・ムラヴィヨフ伯爵(1845-1900)外交官、政治家。1847年東シベリア総督に就任。1858年アイグン条約締結。露国の極東政策を推進する事により日露戦争の勃発を招く。

「ニコライ皇帝は旅順占領を決意する」 そして更に《その会議の4、5日後、ウィッテは上奏報告を持参して皇帝の処へ参内した。すると皇帝は私に向って言った。「ウィッテ君はもう知っているかも知れないが、私は旅順と大連を占領することに決めた。それで陸兵を乗せた運送船を派遣するように命じてしまったよ」。更に皇帝は、「あの

会議の後で、外務大臣は私にイギリス艦隊が旅順大連付近を回遊していて、もしロシアがこれ等の港を占領しなければ、イギリスがこれを奪取するだろうという情報を持ってきたので、それで私は占領の決心をしたのだ」と。ムラヴィヨフ伯の上奏は無論虚偽であり、事実はイギリス艦隊が太平洋沿岸の或る地点を回遊したのは事実であるが、何処かの港湾を占領する意図などは持っていなかった。皇帝はまだ若い、勝利と名誉を渴望している。外務大臣は旅順・大連の占領はロシアのために利益であると、冒険派たちは皇帝を唆した。》と。ウィッテの賢明な平和的^{そそのか}一切の努力は終わった。

「團匪事件とロシアの極東政策」 (同) 《・・・日本人はロシアの表面では朝鮮から手を引いたと見せ、裏で朝鮮を占領する野心があると解釈した。日本人が極度に我々に反抗するようになったのは極めて自然の成り行と言える。遂には支那人や日本人ばかりでなく、イギリスやアメリカまでもがロシア軍の満州撤退を要求する様になった。ロシア軍隊が満州に侵入した時、ベゾブラゾフは「ロシアは團匪(義和団)を鎮圧する力のない清朝政府を援けるため軍隊を派遣したのである。清国の暴乱を鎮定すればロシア軍隊は直ちに満州から撤退するものである」と公言した。ところが團匪の乱も鎮定後も、我が軍隊は依然として満州に居残った。清国政府は百方手段を尽くし、ロシア軍の満州撤退を要求したが、我々は色々な口実を示し拒んだ。関東州の占領と團匪鎮圧のため、清国政府を援助するという口実を以って満州に残留した。・・・》と。

ベゾブラゾフ人物とは ベゾブラゾフ退職騎兵大尉 (元近衛騎兵連隊大尉・1853-1931) が、ロシア皇帝に接近し極東侵略を皇帝に進言した。ロシア帝国未来図を示して1902年にウィッテを追い落とした。



アレクサンドル・ベゾブラゾフ) 露国皇帝退位後軟禁中のニコライ2世 ヘンリー・ダイアー

ベゾブラゾフは極東制覇の冒険思想をミハイロヴィチ大公(ニコライ1世の末子4男)に説き、大公はその思想をニコライ2世に仲介した経緯となる。ベゾブラゾフは一般人と称し満州・朝鮮・沿海州に私設の林業開発会社、鉱山富源、漁業獣猟業を作り、この会社にロシア政府の融資と軍隊の支援を受け、朝鮮を占領して朝鮮王朝を乗っ取る計画を立てていた。経営の規模拡大したため、1904年に倒産。多額の借金のためスイスへ逃亡、1931年パリで没する。

開戦前夜の日本の深層を分析 『大日本』ヘンリー・ダイアー著・平野勇夫訳・実業之日本社。ヘンリー・ダイアー(英国人)は、明治黎明期の西洋式技術教育の確立と、日英関係に貢献した技師伝授教育者。彼は電話機やフットボールを日本へ持ち込んだ人物として知られる。

彼が日露開戦時の帝政ロシア政治政策の暗部を分析し次の様に述べている。

- ①シベリア横断鉄道が全通すれば、アジア北辺の膨大な資源の開発が可能になる。
- ②ロシア軍部首脳の領土拡張の野心は、ロシア皇帝やロシアが外交の必要を遥かに超える処まで進んでいる。
- ③ロシアは何時も、国民大衆の宗教感情を利用し、侵略行為を正当化する際には、決まって東洋人を野蛮民族視してきた。
- ④ロシア人はロシア正教会を通じて野蛮な民族を教化する使命を信じていた。
- ⑤欧米にとっては小問題だが、日本にとってはロシアの満州占領は、国の存亡に係る大問題なのだ。ロシアがこのまま満州に居座り続けるなら、兵力と武器弾薬を増強し、韓国を忽ち席捲して、領土を広げてくる危機感を日本は持っていた。
- ⑥そればかりか、日本が日清戦争に勝って清国から得たものを露国・独逸・仏蘭西がクスネ取り、不当にも我がものとした事実は、日本側には我慢できない。
- ⑦ロシアの制海権を考えれば、不凍港の韓国を手中に収めることは計り知れない価値がある。
- ⑧これは疑う余地のないことだが、「日本がアジアの強国として出現しなかったら、ロシアは早々に領土を太平洋岸まで広げ、さらに渤海湾まで南下して、日本を手中に収めるまで満足しなかったことだろう。」と、国際人としての論考を述べている。

第4章 シベリア鉄道建設の経緯を観る

序 ロシアは三国干渉の成功後、明治29年、露清秘密同盟^注の締結に依り満州横断鉄道敷設権を獲得し、超えて31年初頭、遼東半島の租借権と、大連を起点としてその租借地とハルビンを連結する東清鉄道南部線の敷設権を獲得し、次いで33年夏、北清に於ける義和団事変が満州に飛火すると、鉄道保護の名の下にロシア軍を満州に進め、数月にして満州を占領するに至るのである。

注・露清秘密同盟について。露清密約=李鴻章—ロバノフ協定とも、ロシア外務大臣アレクセイ・ロバノフ、財務大臣セルゲイ・ウィッテと、清国は欽差大臣李鴻章により取り交わされた露清秘密条約となる。この条約は、日本がロシアと清国のいずれかに侵攻した場合にお互いの防衛参戦する相互防禦同盟が目的であったが、ロシアの満州に於ける権益を大幅に認めさせる側面もあった。これ等ロシアへの優遇は、三国干渉による清国への遼東半島返還と、対日賠償金への協力の見返りとされる。1896年、ニコライ2世戴冠式に出席した李鴻章は、密談会議の謝礼として50万ルーブルを受け、6月3日に条約に至る。ロシアはシベリア鉄道の短絡線となる東清鉄道を清国領内に敷設する権利を認めさせ、ロシアは鉄道建設に必要な土地の管理権を拡大解釈して行政権も手にした。1900年、清と「第二次露清密約」を結び、満州への軍隊駐留権、邦人保護、監督権の施行など、鉄道沿線から満州全域に軍事、行政支配下に置いた。

シベリア鉄道建設計画は1850年に始まり、現在に於いては全長9297kmと世界一長い鉄道となる。1891年に建設を開始し、フランスの公債による、ロシア連邦中南部チェリャビンスク州のチェリャビンスクから、東の終点ウラジオストク目指したものである。極東地域に入り、ウスリーリ川に沿ってハバロスクまでのウスリー鉄道が先ず建設され、それが1896年に完成の経緯となる。

日清戦争後、ロシアは1896年に露清密約を結び、満州とウラジオストク結ぶ東支鉄道(中国東北部満州里からハルビン^{ハルビン}を経て綏芬河^{すいぶんが}の本線と、長春から大連までの南部線2430Km。日本では東清鉄道と呼ぶ)の鉄道敷設権を獲得して1903年より営業開始となる。この鉄道は清国内の土地と収益をもロシア側へ齎し、鉄道敷設とそれに関連した鉄道所有地はロシア側に帰属し、行政権もロシアに有していたのである。

鉄道建設の進捗はイルクーツクから60km東にバイカル湖が最大の難所となり、砕氷船を使い、冬は湖上に線路を敷いて列車を走らせ、1901年、一部を残してシベリア鉄道は一応完成した。又、清国政府から満州を横断して、ハルビンを経由する

東清鉄道の敷設権を得て、ウラジオストクへの鉄道も完成した。



大シベリア鉄道・1904年（郵便はがき）馬のトラクション（駆動輪）を使用して軍列車を輸送する
（写真の出典『русско-японская война 1904-1905 гг.・1904-1905年のロシアと日本の戦争』より）

貨車輸送について 日露戦争時、ロシア軍は兵士や物資を満州方面に貨車で輸送が終ると、輸送空貨車は本国へ返却せず、その貨車は倉庫や兵士の宿泊所や燃料として使用していたという。日本参謀本部はこの情報を得たとき、この貨車輸送の仕様方法には驚いたと云う。

モスクワからウラジオストクまで、当時要した日数は35日の日数を数えたとい、この鉄道が単線であるため、貨車を本国へ返す方が輸送の難問が生じていたのかも知れない。複線でないため、戦時ともなれば、兵士・物資の輸送は激しく要求され、その迅速輸送問題の解決策が、貨車の片道輸送のみで、空車は廃材処分としたと思われる。しかし、日本人の質素を宗として生きて来た我々は、1回の輸送のみで貨車は現地で廃車にする発想はない。

『日露戦争を演出した男モリソン』下巻・ウッドハウス映子著に、単線のシベリア鉄道の“からくり”について述べている。

《奉天の占領時、単線のシベリア鉄道の輸送能力を基にして、軍部参謀本部はロシアがハルビンに結集する日時を綿密に計算していたが、それは日本の計算より、遙かにスピードが早かった。日本の参謀本部がスパイを使って調べてみると、驚くべきことが分かった。貧乏な日本には思いつかなかったが、ロシアは兵隊と武器を満載してきた車両がハルビンに着くと、空車の送り返しをせず、そのままレールからはずし使い捨てにしていたのである。続々と到着する貨車は、物置にしたり、壊して薪にしたりしていた。これなら単線のシベリア鉄道も複線と同じ機能が果たせる訳だ。》と、同

じように述べている。

シベリア鉄道建設の経緯 日露開戦前のシベリア鉄道の建設推進者はウィッテ蔵相を中心に進められていた。ヴィッテの出生は高級官僚の子息で、急速な鉄道発展期に事務職として鉄道会社に就職したが、優秀な彼は、政府が鉄道事業の監督指導機関の新設にあたり、初代鉄道事務管理局長に抜擢され、数ヶ月後には交通大臣に昇格し、其の6ヶ月後の1892年9月に大蔵大臣に任じられている。天才能力の持主と想われ、皇帝（ツァー政治）の信任する皇族や大臣や側近政治発言権が、国政に大きな影響を与えた時代、ウィッテの政治発言は首相に等しい力を持つに至っていた。

1880年初頭、鉄道敷設工事は金融調達が遅れ工事は止まっていたが、西比利亜の部分敷設計画は極東に近づくに従い、国際関係の動きに合わせて俄然復活した。

ロシアはこの時期、ドイツからロシア公債を締め出され、ロシア公債はフランス市場に求めていた。フランス国は普仏戦争（フランスとプロイセン王国の戦争、ドイツ諸邦はプロイセン側に立つ）にフランスは敗北した結果、フランスはドイツの侵略を恐れて、ロシアとのフラン借款協商を受け入れることにより、背後（ロシア側）からドイツ軍事力を牽制することができた。ロシアの軍事力を以ってフランスは安全保障を得ていた。

1891年、フランスの借款でシベリア鉄道敷設工事が始まり、ロシアは急速にフランスに接近し、露仏の軍備の近代化にも成功し、1894年1月、露仏秘密軍事同盟成立となって行く過程をとる。

同年5月、ロシア政府はウラジオストクを目指し、シベリア鉄道敷設工事が開始され、日清戦争で清国が敗れた結果、ロシアは好機到来と、満州に対する権益拡大戦略に強め、翌6月3日、李鴻章とウィッテ蔵相との間で秘密露清条約締結に成功し、日本による攻撃には、ロシアの軍事力で清国を守る秘密条約が結ばれ、その上、清鉄道敷設権をもロシアが獲得していたのである。

東清鉄道はシベリア鉄道のチタ（地図 44 頁参照）から分岐する支線で、満州里からハルビンを得て綏芬河に至る本線となり、さらにウラジオストクへと通じるものであった。又、ハルビンから大連方面にいたる南満州支線（1898年に旅順・大連租借による）となるもので、東清鉄道が完成すると、ロシアはアムール川沿いのシベリア鉄道本戦だけに頼ることなく、満州北部から本戦によってウラジオストク方面へと結ぶ鉄道敷設に成功したのである。ロシア・清国の秘密露清条約締結は、東清鉄道会社の設立と、

明治24年3月(1891)、露帝皇太子(ニコライ2世・22歳)名の基に、シベリア鉄道建設宣言が全世界に向けて宣布され、このシベリア鉄道極東地区起工式典に出席のため、ニコライ皇太子はウスリー鉄道(ウラジオストクからハバロフスク・ウスリー鉄道と東清鉄道の分岐点の町は烏蘇利^{ウスリースク})で極東への旅行の途次に日本へ来朝した。その時、滋賀県大津で巡查津田三蔵に斬りつけられる事件(大津事件)に見舞われた。政府高官も天皇側近、天皇自身が謝意を表明したことにより、ロシア側も冷静に対処したことにより、この事件は悪化する事態に至らなかった。幸い軽傷ですみ、そのままウラジオストクに向かいシベリア鉄道極東祝賀起工式典に参列して事なきを経て、露都に帰還した経緯となっている。

1892年、ウィッテは全シベリア直通鉄道を、欧露、シベリア領域に絶大の利益を齎すであろうと述べ、それまでスエズ運河を通過してヨーロッパに入っていた「生糸と茶」は、上海—欧州間は45日間かかり、シベリア鉄道が完成すれば18日—20日に短縮するであろうと述べている。

シベリア鉄道が完成すれば、中国生糸は欧州で首位に立ち、フランス金融資本がロンドン金融市場を凌ぐことになると自信を示していた。そして、ロシア海軍は^{いちじる}著しく強大となり、欧州並びに東亜に政治的に^は覇(軍事的に)を制することになるだろう。このウィッテ蔵相の発言は、野心を持ち合わせたニコライ2世にとっては、刺激的な国策宣言でもあった。

シベリア鉄道は1897年に竣工、ウスリー鉄道のウラジオストクからハバロフスク間が1900年(明治33年)完成となっている。ロシアと清国による「露清銀行」創設により、資本金6億ルーブルの8分の3がロシア政府及び銀行の持ち分となり、8分の5が仏国銀行団の出資額となっていた。1900年が義和団事変、日英同盟が1902年、日露戦争が1904年—05年となり、この鉄道建設敷設工事の完成は正に日露戦争前夜となっており、日露戦争は避けられない戦争への階段を昇ってゆくシベリア鉄道となっていたのである。(『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著より)

シベリア鉄道建設に対する日本の対応

ロシアのシベリア鉄道建設の完成間近の明治25年(1892)、情報将校福島安正による単身騎馬でシベリア横断に成功した。その裏で参謀本部は、シベリア鉄道建設の完成時期と鉄道建設の進捗情態を探らせた報告は、10年後に完成すると云うものであった。翌年、それを受けて山縣有朋陸軍大臣は意見書を提出し、「シベリア鉄道が完成す

れば、ロシア軍は極東にやってくる、と警告を発し、国をあげて対処するように」と、国家の一大事危機であると宣言した。更に、「東洋の禍機^{かき}は今後10年待たずしてやってくる」と警告したのである。

福島安正陸軍中佐 明治18年、陸軍大学校でドイツから来日したメッケル(明治初期大日本帝国陸軍制の基礎を作ったドイツ軍人・1842-1906)に学ぶ。明治19年、インド、ビルマ方面を視察、翌年陸軍少佐に昇進、ドイツ・ベルリン公使館付武官となり駐在する。公使の西園寺公望にシベリア鉄道敷設情報等を報告している。

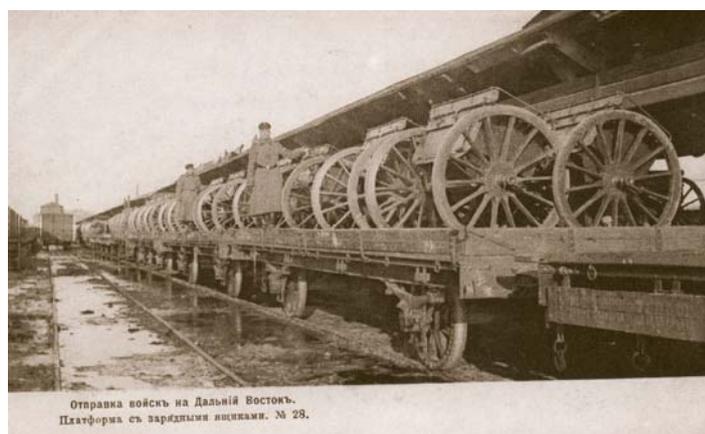


福島安正(1852-1919)陸軍大将



ロシア騎兵に送られる福島安正少佐

明治25年、帰国に際し有名な「シベリア単騎横断」を行い、ポーランドからロシアのペテルブルク、エカテリンブルク→外蒙古→イルクーツク→東シベリアまでの約1万8千kmを、1年4ヶ月かけて騎馬で横断、現地実地調査を行う。明治26年6月29日、シベリア横断を終え新橋駅には大群衆が熱烈歓迎を受けている。



シベリア鉄道の古写真

「ケーソンとプラットフォーム」とあるからコンクリートのモルタル運搬車である。旅順地区の要塞構築用に使用と思われる。1904年『ロシアと日本の戦争』露国郵便はがきより



左・「極東への派兵」とある。1904年 『русско-японская война 1904-1905 гг. 1904-1905年のロシアと日本の戦争』より) 右・シベリア鉄道『русско-японская война 1904-1905 гг. 1904-1905年のロシアと日本の戦争』より)



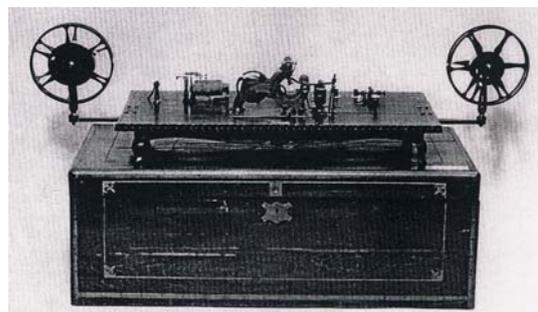
ウスリー川付近の建設の様子・1895年(ウィキペディア) アムール川北岸線工事に従事する囚人



現在のウラジオストク駅構内・2014年筆者が撮る

第5章 日本の通信は日清・日露戦争の勝利を齎す

日本で最初に電流による磁気の発生を利用した電信機を試作したのは、幕末の志士で万能の天才であった佐久間象山と云われている。右写真のエンボッシング・モールス電信機は嘉永7年（1854）年、日米和親条約締結のために、2回目の来日時に米国遣日使節ペリー提督が徳川幕府への献上品に持参したものである。



ペリー提督から献上したノルトン社製モールス電信機の実物・通信総合博物館

モールス電信機は送信側の電信機上の電鍵（電気信号を断続してモールス符合出力する装置・ストレート・キー）でモールス符合を打つと、受信側の電信機の紙テープにエンボス（凸凹の傷がつく）されて信号を送る仕組みの機器で、8町（900m）の間に電線を架し通信実験を行った。（郵政博物館より）

『ペリリ提督日本遠征記』 に《電線は約1マイル（1600m）張り渡された。両端に技術者を置きその間に通信が開始された時、日本人は烈しい好奇心を抱き、運用法を見物し、一瞬にして英語、オランダ語、日本語を建物から建物へと通じる通信を見て大いに驚いたと云う。毎日毎日、役人や多数の人々が集って、技手に電信機を動かしてくれるようにと熱心に懇願し、通信を往復するのを絶えず興味を抱いて見学していた》、と伝え、当時の日本人文化意識高く、通信技術者を異常な関心で迎えていた。

嘉永2年（1849）、松代藩士の佐久間象山が、オランダ語の文献を元に70mほどの長さで通信実験を行ったのは、サミュエル・モールス（アメリカ合衆国 1791-1872、モールス電信機を発明とモールス符合）が世界初の電信機を開発した5年後の事となる。

当時、1853年から1863年に英国は大陸を接続する海底電線6本、デンマークとスウェーデンの間、イタリアとコルシカ島間、コルシカとアフリカ間などに海底電線が敷設された。大西洋横断海底電線の敷設は英米の実業家たちによって、1856年に大西洋電信会社が設立され、苦難の末に1858年に完成をみる。尚且つ英国はインドへの電信線建設を急ぎ、1860年にスエズ→アデン→アラビア半島→ペルシャ→カラチと不安定であったが完成をしている。1866年から英国はイギリス・インド海底電信会社が、ポルトガル→ブラジル→マルタ→スエズ→ボンベイを結ぶ海

路を、1870年迄に完成させ、ペンダーの会社と合同して、「東方電信会社」（大東電信会社）が設立されて行く経緯となる。この時代の大英帝国の国力が偲ばれる。

もう一つ、欧州とアジアを結ぶ電信線はシベリア大陸を横断し、米国を結ぶものであったが、この回線は失敗続きで、工事はシベリア、アラスカの両方から進められたが、1866年に大西洋横断海底電線敷設が成功したため、シベリア・アラスカ回線の米英間電信線は無用となり中止、ウェスタン・ユニオン社が300万ドルの損失を出したという。この中断した電信線工事に着目し、新たな計画を立て直したのが「大北電信会社」であった。（『情報覇権と帝国日本1・海底ケーブルと通信社の誕生』有山輝雄著）

『国際通信の日本史』 「わが国の国際通信」 石原藤夫著・東海大学出版会・参照

明治3年4月、函館（明治2年まで箱館）駐在のロシア領事代理タラフテンベルグから、維新まもない外務省初代外務卿（外務大臣）澤宣嘉（^{のぶよし}1836-1873 公卿、明治黎明期の政治家）宛てに一通の書簡が舞い込んだ。書簡には次の様であった。

《「アジア・ロシアから日本へ、日本からシナへの海底ケーブルを建設することについて、今回ロシアに設立された会社から申し立てがあった。ついては、わが国と格別の親善関係にある貴日本政府の承認を得たい」、という意味の書簡の呼びかけであった。

この「ロシアに設立された会社」というのは「大北電信会社」（英語名・The Great Northern Telegraph Company、グレート・ノーザン・テレグラフ株式会社）はデンマークの電気通信事業の会社であった。このデンマーク国籍の大北電信会社は、デンマーク、英国、ノルウェーの電信会社であったが、更にデンマークとロシア（ロマノフ王朝）結託して「デンマーク・シナ・日本拡張電信会社」という別会社を創設し、それがロシアに於いて設立された会社の社名で、日本へ売り込んできたのが、日本で言う処の「大北電信会社」であった。

これに対し明治政府は箱館開拓使に調査させると、「会社の者は3名、シベリアのウラジオストク、又はポシェット（ウラジオストク南西部、北朝鮮国境）から横浜・大阪・長崎・上海・香港に結ぶ通信で、3年から5年以内に完成を見込んでいる」との事であった。その主旨は次の通りとなる。

①デンマーク・シナ・日本拡張電信会社に長崎・大阪・神戸・横浜・箱館さらに今後開港される港への海底ケーブルの陸揚げを免許されたい。

②機械や用品類への一切の税を免除されたい。

③会社職員には政府の保護を与えられたい。

④測量することを許可されたい。

これは容易ならぬ事態に明治政府は回答に苦慮し、6月、澤宣嘉^{のぶよし}・寺島宗則^{むねのり}（1832－1893、薩摩藩遣英使節団に参加、維新後外務卿）がデンマーク側に対応し、「大北電信会社」がロシアとデンマークが裏で一体となっていることが判明した。ロシア帝国の出資により、シベリア開発とロシア南下政策に沿って、ウラジオストクから長崎を経由して上海に至る、海底電線の布設を明治新政府に認可を求めて来たのであった。7月、この折衝を負かされた寺島宗則は、伊藤博文・大隈重信・井上馨らと相談したが、この電信敷設については、今後の日本にどのような意味を持つのか、正確な方針を定められず、見切り発車ということに決まった。

19世紀後半の海底ケーブルについて

右の写真はKDD国際通信資料館に保管されている、日本初の海底電線の実物。現在でも動作可能という。

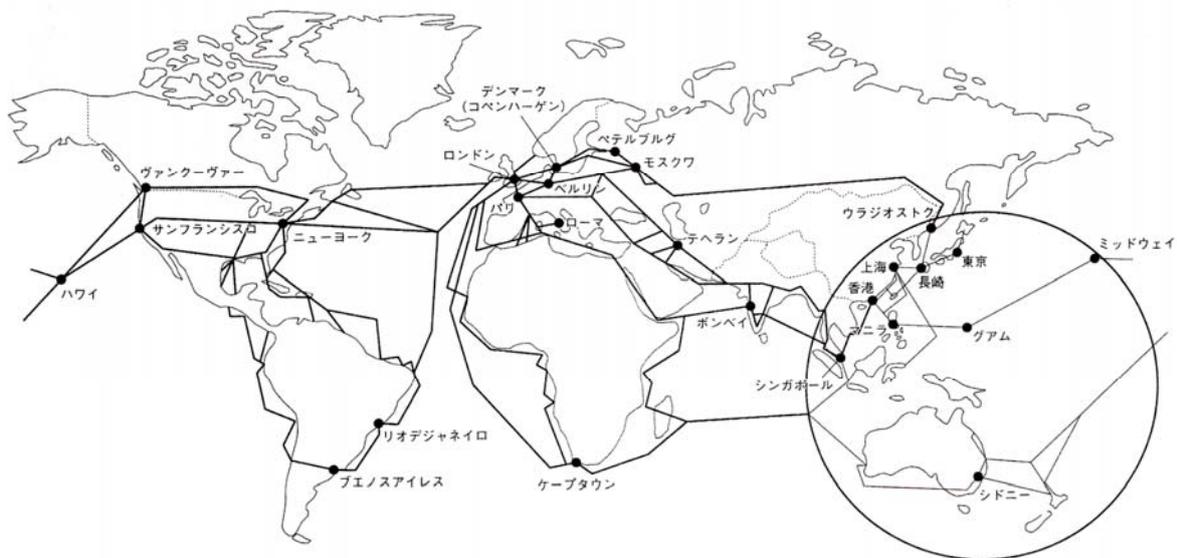
ガタパーチャ^{注ひふく}被覆の電線の周囲をタール、ピッチ、亜麻仁油^{あまにゆ}の混合液を塗装して製作されていた。



注・マレーシア原産のアカテック科の樹木、その樹液からゴム状の樹脂。ガタパーチャとはマレー語で「ゴムの木」 当時の海底ケーブル・KDDIよりの意味。先の太平洋戦争での南方出進に石油と共にこのガタパーチャゴムの獲得にあった。

大英帝国の海底ケーブル網 下記の図は明治35年の系統図、大英帝国が50年歳月をかけ、ロンドンから世界各地の殖民地へ海底ケーブルが布設され、英国の巨大帝国であることを示している。極東の日本はケーブルが結ばれず残されていた。英国ルート以外、ロシアの首都ペテルブルグやモスクワからシベリア横断する陸上電信線を大北電信が、ウラジオストクまで来ていた。先に述べた様にこの回線は、当初、米国が欧州と結ぶために、カナダ、アラスカを越え、ベーリング海峡を渡り、シベリアを通り欧州ルートを計画していたが、大西洋横断海底ケーブルが先に完成したため、この計画は中断となる。その中断の残りを、ロシアの費用で布設して、ウラジオストクから欧州に繋がっていた。

その電信の続きを、日本から上海に、ウラジオストクに海底ケーブルに繋がれば、北部欧州からシベリア回りで極東を経由して、更に東南アジア、インド洋から中東を回って欧州や英国に至る、世界一周の大電信網ができあがることになる。そのため極東の日本に眼をつけ、デンマークの大北電信会社がやって来たのである。



19世紀後半までに築きあげた大英帝国の海底ケーブル網の世界電信ケーブル回線図円内は未布設

日本はロシアからの通信に不安があった 日本側から通信を見れば、シベリア経由の電信に背後のロシア帝国の野心を感じざるを得ない。ロシアはこの時点で、ウラジオストクから長崎だけでなく、将来北京まで引く陸上電信線をこの海底ケーブルに接続する契約ができていた。このような野心と策謀を背景にある大北電信会社を相手にした寺島宗則の心中は大変な苦勞があったことを知るのである。



国際海底電線小ヶ倉陸揚げ庫(長崎市)

(長崎県小ヶ倉町・ながさき旅ネットより)



国際電信発祥の地・日本で最初の国際電報局の碑

(グラバー邸入り口所・電話局の写真館より)

明治3年8月25日、澤宣嘉外務卿・寺島宗則外務大輔とデンマーク特使ジュリアス・フレデリック・シックとの間で調印がなされた。内容は本文11カ条と内密の付属2カ条となっている。

① 大北電信会社の海底ケーブルを長崎と横浜に陸揚げし、両港間を九州と四国と本州の太平洋側を通して連絡運営する。又これに伴う海岸や陸地の施設を大北電信が建設運営する。②③は略 ④この約定の有効期間は30年とする。⑤日本政府は大北電信の施設を保護する以外は干渉したり関与したりしない。⑥略。

約定内容は一見すると国際通信施設を建設する力のない日本に大北電信会社が協力しているように思えるが、実質的には、大陸側との国際通信の権利を外国の企業に奪われないようにすることを意味していた。

調印後、ロシア皇帝から「贈り物」が明治天皇に届いた。ロシアがこの問題に深く関与していた証拠である。後、「大北・支那および日本拡張電信会社」という名前の会社は消え、変わって「大北電信会社」の極東総支配人が上海に常駐するようになり、日本との折衝の窓口となった。

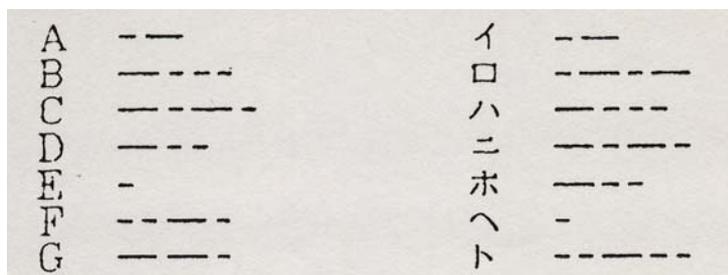
調印の翌日、調印文書を見直した寺島宗則は急に不安になり、この調印の仲介の労を取ってもらったパークス駐日英公使(1865-1883・幕末から明治初期18年公使を務める)を訪ねている。と云うのは、澤外務卿(外務大臣)、寺島外務大輔(次官)という日本政府の外交最高責任者が署名しているのであるが、デンマーク側の代表者フレデリック・シックの肩書きが無かったからである。

この疑問にパークスは「大北電信会社の代表が私の処へ挨拶に来た時、シックという人物はその陰にいたが、大北電信の利益を代表していると考えてよく、信用できるだろう。またこの文書は国際間の条約ではなく、^{コンベンション}Conventionと言って日本政府が民間企業に与えた免許状(Concession・譲歩)である。安心してください」と答えてくれた。このシナリオは大英帝国が用いて、植民地経営を民間企業に委託し、現地の反感を和らげる仕様方法となっていた。シックの正体はデンマーク皇帝の^{そばようじん}側用人と伝えられるが、当時の日本人は軽くあしらわれていることになる。

この変則的な調印は日本の技術力も外交経験もない我国に於いては、これ以上の電信条約条項を望めなかったことであるが、電信の自国運営に執念をもつ寺島宗則だから、この程度の譲歩で済んだといえる。

明治4年6月には、長崎—上海が布設竣工し、8月には長崎—ウラジオストク間が竣工した。日本にとっては、資本提供していない事により、権利は取り上げられた形であるが、欧米と自由に連絡できるようになったことは大きな前進であり、そして器機が改良され、明治13年には東京—長崎間、横浜—長崎間は直通となった。

注釈・海底ケーブルからの電信は、陸上の電信技士が受信し、それを陸上の技士が打ち直して送信する方法である。従って海底ケーブルと接続する時は、必ず人手を介して打ち直される。海底と陸上では信号の形式が全く違っていたので、秘密情報が洩れる不安はあった。



モールス符合（明治初期に吉田正秀らによって定められた）

マルコーニの発明の無線電信

電気通信産業の基礎を築いた人たち 明治10年代に、現代日本が世界に誇る電子電気の基礎を築いた3人の男を挙げる。「からくり儀右衛門」こと田中久重^{ひさしげ} (1799—1881) 「東洋のエジソン」云われた男の活躍によって、芝浦製作所となり、後の「東芝」の創業者となる。日本の軍事産業の筆頭となる。

三吉正一^{みよししょういち} (1853—1906)、日本初の電気機器製造会社経営、電気機器(電話機・直流発電機・芝浦電気の前身)に於ける、白熱電球の国産化を図った。沖牙太郎^{きばたろう} (1848—1906) 明工舎(沖電気の前身)創業者、日本初の電気通信機器製造者。この3人の功績を簡単に紹介する。

田中久重は、有名なベル電話が明治9年発明され、翌年に日本に入ってきた。その1年後の明治11年には早くも沖牙太郎、田中久重は製作して自宅前で実験成功している。明治12年田中久重の筆頭弟子の田中精助たちが、日本で最初の国营通信機工場「電信寮製機所」はカラクリ儀右衛門の弟子たちによって10台作られた。性能は輸入品を凌駕していたと伝わる。

2代目田中久重(婿)は港区芝浦に大きな工場を作り、従来からの工部省向けの製品や、警視庁向けの非常報知機、海軍向けの水雷艇に力を注いだ。当時、清国海軍に対

抗すべく超小型で安くできる水雷艇に力を注ぐ。日清戦争「威海衛の戦い」で勝利に結びつけた「水雷艇」は田中製作所が貢献したもので、その開発力に明治初期の日本人の文化機器技術の高さに驚かされる。今日の技術国日本の祖を偲ばれる。

明治23年、2代目田中久重と田中精助は大型の蒸気機関・発電機・モーター等に日本の国策として乗り出したのである。明治26年、資本金を三井系に仰ぎ、芝浦の地名をとって「芝浦製作所」となり福澤諭吉の愛弟子の藤山雷太を経営者に迎えた。時代はこの頃から通信機器から電気関係に移り、やがて大型発電機、重電機製造の発展を遂げ続けて行くのである。

三吉正一は、田中精助らの「電信寮製機所」で学び、電信機の製造修理技術を修得し、明治16年に「三吉電機工場」設立、電力器機を開始した。明治18年、自身で設計した発電機を作り、東京銀行集会所の開所式での電灯点灯に成功し、これが我が国の電灯の歴史の始まりとなる。

この会社は明治32年に三吉が引退すると、「東京電気(株)」と改名され、田中久重の「芝浦製作所」と合併して、現在の「(株)東芝」となっている。明治後半の日本の電気業界は、弱電・強電を問わず、輸入品と国産の戦いの場であり、国産製造者の苦節の時期でもあった。後の電機関係企業は「三吉電機工場」から生まれている。

沖牙太郎は輸入品に対して壮絶な戦いを挑んだ男で、明治7年、農家を飛び出し「電信寮製機所」に入り、近代技術を身に付け、製機所のボス田中久重の弟子田中精助に認められ、明治10年には電信用印字機など電信関連装置の国産化に貢献した。これは米国以外での電話機試作は世界でも最も早かったと云われている。

沖牙太郎は明治14年に「明公舎」を設立し、明公舎の開発は電話機の改良で、「^{けんびおんき}顕微音機」(マイクロホン)を試作、同年国内博覧会に出品した。この会場に明治天皇にこの装置が目にとり、「送話器を叩く音を受話器でお聞きになり深くうなずかれた」、沖牙太郎は感動に震えた逸話が残っている。

この電話機は博覧会側から二等賞を受けた時、明治天皇が直接言葉を賜った感激が、その後の沖牙太郎の半生を純国産技術の確立に一生を捧げることになる。明治27、8年の日清戦争時、軍専用電信線の布設などの多くを「沖電気工場」と共に引き受けたことが、戦勝に繋がっていたのである。

国際通信回線の危機 現実には日清戦争時には、呼子^{よぶこ}—釜山^{プサン}間の海底ケーブルは

清国軍艦によって切断される危機にあったが、日本側が黄海海戦に勝利して制海権を握ったことにより、大本営と現地との軍事連絡は保たれた。

当時の大陸向け通信線の弱点を考えてみると、**第1**に大北電信長崎局経由の呼子から釜山線は欧米人も使用しているので、軍が独占することは困難であり、釜山から先の陸線も切断される危険もあった。**第2**に抑々大北電信はロシアと繋がっている会社であり、この回線を使えば日本側の軍事情報がロシアに筒抜けになってしまう。**第3**に英国・米国との連絡に、大北電信の長崎—上海海底ケーブルには、その危険が考えられる。陸線と海底ケーブルの接続局では、信号変更をするため、必ず人が介在するため、電文内容が局の技士により判明してしまう。**第4**にロシア側で切断の問題、日本側でのロシアのスパイによる切断が考えられた。

軍神児玉源太郎による電信の新設 電信通信を積極的に採用した児玉源太郎（1852—1906・日露戦争時満州軍総参謀長）は、日清戦争終結の直後、明治28年6月、陸軍省内に「臨時台湾燈台電信建設部」が設置し、その部長に就任した児玉源太郎が上記の問題解決に素早く行動に移したのである。

①日本独自の海底ケーブル布設船を持ち、戦争開始と同時に本土と大陸半島間に複数の海底ケーブルを布設、大本営と戦地の連絡と、海軍の制海権を確保する。

② 前項に必要な海底ケーブルを密かに購入し秘匿して置く。

③日本本土と台湾を日本独自の海底ケーブルで連絡し、台湾経由で英国と結び、大北電信やロシアとは無関係に欧米と連絡できるルートを確保する。

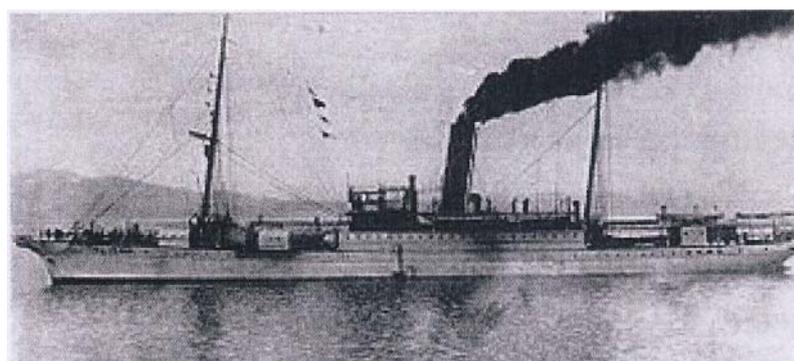
④そのために、台湾と福州（福建省）間の英国製海底ケーブルを買収し、台湾の本線の電信局を大陸の英国電信局に直接つなげる。

通常時の通信は明治15年の大北電信の独占権により、①は不可能であったが、戦争の次元となれば、それは可能であった。②は、当時海底ケーブルは英国製であるが、納入期間が半年はかかり、戦争開始で手続きしたのでは到底間にあわない。無理に購入手続きすれば、戦争準備の状況が知れ、ロシアや大北電信の妨害を受ける恐れがあった。そこで隠密行動の購入作戦を取ったのである。

英国ロブニック社に、日本初の本格布設船「沖繩丸」（奈良県三笠山にちなん因で命名）を、極秘に発注し、その秘密交渉を在英の加藤高明（駐英公使、日英同盟成立に尽力）が当っ

ていた。「沖繩丸」は総トン数・2278。長さ88、6m。ケーブル用船首車輪0、9m×3。ケーブル用船尾車輪0、9m。電線槽大・中・小の設備。明治29年4月に竣工。日本人のみによる記念回航となる)

③の九州—台湾間の布設には、児玉が部長就任後、ケーブルを明治28年7月、英国に総延長1600海里（1海里=1852m）発注（秘密裡に）していた。そのケーブルを、「沖繩丸」活躍敷設により、明治29年7月、大隈半島から奄美大島を経て、沖繩までを8月までに完成させた。明治31年12月、台湾—福建省の間の海底ケーブル買収に成功し、その先の運営を英国の大東電信会社及び大北電信に委託したのである。この英国からのケーブル調達と、秘密電信敷設工事をロシアに察知されずに完了させたことは驚異と云う外はない。児玉の活躍の話は戦線が多いが、世界的な視野から観た場合、日露開戦の計画は無線電信に依ることを見通していたことは、現代の我々を改めてその児玉の思慮に感動するのである。



児玉源太郎・陸軍省臨時台湾電信建設部長 海底ケーブル敷設船沖繩丸・明治29年竣工

対露戦略激務により、日本陸軍の至宝と言われた川上操六（1848—1899・参謀総長）は明治32年病没、日本の諸葛孔明と言われた田村^{いよぞう}（1854—1903・川上操六と参謀本部で活躍）も明治36年、過労で病没となり、翌年明治37年、^{いよいよ}日露戦争開戦となり、児玉は遼東半島に渡り大山巖の下で総参謀長となり作戦追行に精魂を傾けたのである。児玉を教えたドイツ陸軍メッケル（1842—1906・明治初期、日本陸軍兵制の近代化に貢献）は、ロシア圧勝の予想が多かった列強軍事専門家の中で、「コダマがいるかぎり日本が勝つ」と予言した。戦争終結の翌年、明治39年に病没するが、日露戦争は日本国の軍事天才を疲労困憊^{こんばい}で命を失っていることが、如何に日露戦が疲労が激しいことであったことが実感されるのである。

日英同盟による通信関連事項 明治35年1月、日英同盟条約がされ、同年7月に

調印された「陸海軍協約」8項目は電信の重要性が記され、協約の過半が通信関連事項となっている。当時の日本陸海軍の首脳は「日露戦争は情報戦争である」と認識していたことが凄い。

- ①、共同信号法を定めること。
- ②、電信用共同暗号を定めること。
- ③、情報を交換すること。
- ④、戦時における石炭の供給方法を定める。
- ⑤、戦時陸軍輸送におけるイギリス国船の雇用をはかること。
- ⑥、艦船に対する入渠修理（船修理のドックに入る）の便宜供与をはかること。
- ⑦、戦時両国の官報をイギリスの電信で送付すること。
- ⑧、イギリス側は予備海底ケーブルの布設に務める。

アメリカ・スペイン戦争に於いて、海底ケーブルが大きな役割を果たす

日露海戦前の明治31年4月、米西戦争(米国とスペイン)に於いて、海底ケーブルが大きな役割を果たしていた。この戦い現場に日本海軍参謀、秋山眞之（1868-1918・海軍中将）が観戦武官して参列し、その戦場レベル高さに驚嘆している。秋山はこれからの戦争に於ける通信の重要性を認識して、海軍首脳に無線電信の一刻も早い実用化の提言をした。海軍大臣山本権兵衛（1852-1933・後総理大臣）はこれを受理して直ちに行動を起すのである。当時のイギリス通信レベルはロシア通信技術より遥かに進んでいたらしい。

明治36年12月26日、ロシアとの緊迫状況から、国際通信の非常手段を取り始め、重要な電文は機密の洩れやすい危険な大北電信回線を通さず、児玉源太郎が構築した九州-台湾間の海底ケーブルで台湾につなぎ（交信の整理する）、台湾-福州間の海底ケーブルによって、大陸側のイギリス大東拡張海底電信会社の局につなぎ、そこから香港経由で欧米に伝達した。このような臨時回線の獲得によって、欧米での戦費調達に奮戦する高橋是清・金子堅太郎、黄禍論をロンドンに中心に展開した末松謙澄らの機密連絡が、通信電報より極めて上手にいった理由がここにあった。

日本海海戦の始まりは電信通信技術による 明治38年5月27日午前2時45分、哨戒任務の仮装巡洋艦「信濃丸」は西北方面に10数隻の船影を発見し、

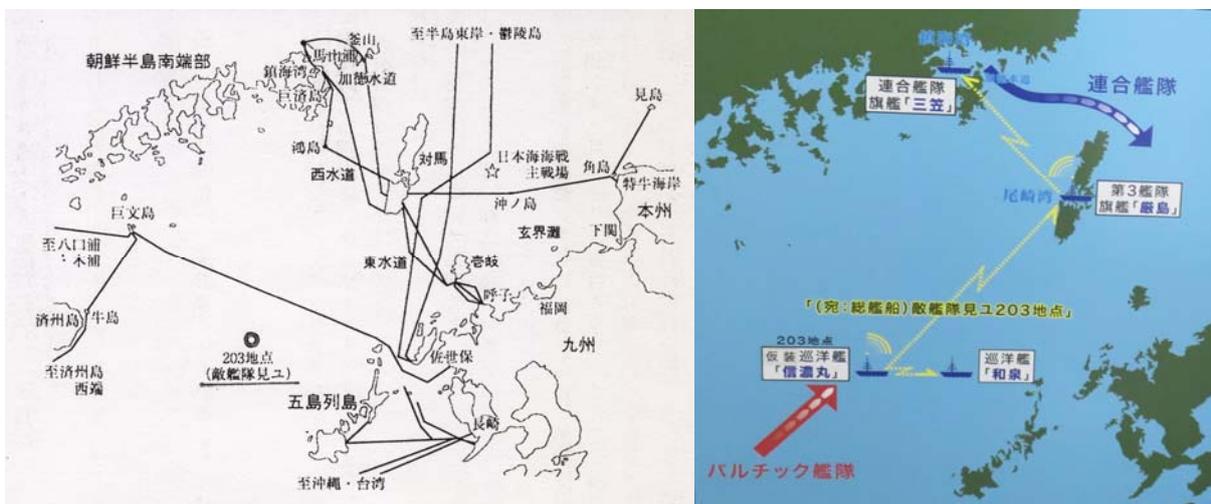
「総テノ艦船・望楼へ 敵艦隊ラシキ煤煙見ユ 4時45分 信濃丸」
(推定暗号 ム ネネネネ・・・ ○四四五 「Y R」)

ほぼ5分後、4時50分頃、有名な電文を打電し、対馬に待機中の巡洋艦「巖島」を中継して旗艦「三笠」に伝えられた。

「三笠へ 敵ノ第二艦隊見ユ 203地点 4時50分 信濃丸ヨリ 巖島中継」
203地点とは五島列島すぐ近くで、旗艦「三笠」は直ちに連合艦隊に出撃命令、東京軍令部（大本営）に出撃の報告を打電する。打電は午前5時15分、軍令部への着電は6時45分と伝わる。

「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ連合艦隊ハ直チニ出動之ヲ撃滅セントス本日天気晴朗ナレドモ波高シ」参謀秋山眞之の名文となって、旗艦の「三笠」より13時55分、「皇国ノ興廃コノ一戦ニアリ、各員一層奮励努力セヨ」のZ旗信号を揚げ、2時5分、敵との距離8kmに於いて左大回転、東郷ターンを^{かかれい}下令した。

この出動報告文後半の「天気晴朗ナレドモ波高シ」は、軍学的に大きな意味が潜んでいて、砲撃戦ではどちらが有利か、水雷艇の動きは、黄海海戦時とどう違うか、など、情報を軍令部へ伝えているのである。日本海海戦は世界海戦史上、空前絶後の大勝利は、無線の活用が戦いを制した世界初の快挙となったのである。



海戦時の臨時海底ケーブル網・『国際通信の日本史』 索敵強化に70隻の艦船を配備 三笠艦より

日露戦争開戦時の大北電信海底ケーブルの処理については、長崎—ウラジオストクの回線を、開戦と同時に日本側から切断した。また長崎—上海回線は欧米諸国の観戦記者や、一般用及び日本側の対外宣伝用に活かし、長崎局で中継される電文は、全て日本側が判読できる処置を強制的に講じて内容を確認していた。情報がロシアに流れることを防ぐ、これ等の非常処理について、大北電信は当然不満を持っていたが、これは戦時国際法によって認められていたものである。

軍用使用は総て臨時回線を使用したのである。又、多くの文献戦史に「謎」とされているロシア艦隊が何故、妨害電波を出さなかったのか、と云う疑問があるが、当時の無線技術の観点から見れば、それは当たり前の話で、当時のロシアの無線送信技術妨害(機器)では殆んど不可能であり、妨害に不可欠な、無意味の信号を連続発信することは、当時の通信技術レベルでは、極めて困難な高技術レベルであったのである。

日本国を救った三六式無線電信機 明治中頃より、日本海軍はロシアの軍事脅威の対抗上、英国に多くの新鋭艦しんえいを発注した。その建造の検査と受領のために、海軍軍人が派遣されていた。明治30年1月、イタリアに於いて「マルコーニ無線電信」の開発に成功したのを機に、その威力を派遣士官の注目することとなり、駐在武官から無線電信の開発に着手すべきと建議をもちだされた。

「マルコーニ無線電信」は、イタリア人、グリエルモ・マルコーニ(1874-1937)、1894年、無線電信の実験に成功した。高い木の上にアンテナを取り付け、地中の金属に接続する接地アンテナ式を考案し、コヒーラ検波器の改良を工夫して、高さ8mのアンテナで2400m離れ、モールス信号の受信に成功した。1897年英国の特許を取得しマルコーニ無線電信会社を設立し、1899年、ドーバー海峡横断の無線通信に成功し、1901年、大西洋横断の無線通信を成功させた。この頃の無線の通信距離と発信電力に於いて、感応コイルの火花が弱く、交流発電機出力20000Vに昇圧し、高圧コンデンサーを用いて強力な火花を飛ばした。1902年コヒーラ検波器は、長距離通信に空電(雷放電による電磁波、大気中の放電現象に伴って発生し、雑音として受信される低周波電波。発生源は電光、雷鳴を伴う雷放電となる)の影響を受けたことにより、これを防ぐために磁気検波器が発明された。

海軍は軍艦建造費の一部を、マルコーニ無線電信から装置一式の購入を求めたが、100万円(現在の金額約7百-8百億)の特許使用料を請求され、さすがに逡巡し、日本国の英知を結集して開発することに決定したのである。

明治33年5月、無線電信調査委員会を発足させ、逋信省からは明治31年末から東京湾の台場で無線実験を進め、松代松之助技師しよくたくが囑託として参加している。学会からは米国留学後、第二高等学校で物理の教鞭を取りながら、無線の研究を続けていた木村駿吉(咸臨丸で渡米した木村摂津守の次男)が海軍技師として参加している。委員会は3年後、80海里(約150km)の船舶用無線電信機の開発を目標とし、翌年、数海

里の通信距離の無線通信を開発、これを改良して「三六無線電信機」を完成させた。

日露開戦前の直前に各艦船やその陸上電信施設に配備し、戦艦「三笠」「朝日」を含む、17艦に設置命令が出て、辛くも開戦前に電信網を確保できたのである。

この無線機は600Wの電力で、30mのアンテナにより370kmまで届いたと云われ、又、島津源蔵（初代・1839-1894、発明家・島津製作所の創業者。2代目・1869-1951、1897年鉛蓄電池を作製し、後に改良された「GS蓄電池」を完成させ、この蓄電池が無線電信機使用された）の2代目が製作した蓄電池が大きな貢献をしたのである。

この電信の艦船の指揮をとった秋山真之参謀は木村駿吉に対し、6月10日付書簡で「無線電信の武功拔群」と感謝の意を表し、5月27日の「信濃丸」へ「^{われわれ}吾々指令部員がこの海戦に於いて、奉公の応分に尽くし得たり、その用いし武器は無線電信と鉛筆とコンパスにて、特に貴下に対して深厚なる謝意を表する所以に御座候」と感謝の手紙を送っている。（『電気通信物語』城水元次郎著。『にっぽん無線通信史』福島雄一著）



記念艦「三笠」には36無線電信機・正確に再現されている

右側より、★水銀開閉器=電路を開閉 (on/off)、スイッチ。★送信用電鍵=電鍵、モールス符合受信送信。★インダクションコイル=誘導コイル、リレー、電信を増幅して送る。★火花間隙=ヒバナカゲキ、間隙を開けた火花放電による電磁波発生装置。★送信受信切換用開閉器=無線通信で送受信装置。★送信機=送信する信号エネルギーを発生する。★コヒーラ検波器=電磁波検出装置。★印字機=モールス符合を自動的に紙テープに記す、受信機。★コンデンサー=気を蓄え放出する。

36式無線電信機(34式無線機の改良) 直流を電源とする火花式であることは同じであるが、アンテナ直結でなく、インダクションコイルから、アンテナ波長変更線(送信機のアンテナは高周波エネルギーを空間に放射し、受信機のアンテナはそれをキャッチし電気に変換する)、又は送信蓄電池器(電池を管理するバッテリーから、バッテリーへの電池データ送信に共通の光回線とを備える通信システム)に放電させる方式となった。受信はコヒーラを用いた印字式。使用波長はアンテナを架設するマスト長から約600m、送信電力は約600Wであった。

三笠記念館の「三六式無線電信機」の説明 日本海軍はマルコーニが発明した無線電信に着目し、明治36年に三六式無線電信機を完成させた。三六式無線電信機は、突貫工事によって日露戦争が始まるまでに全艦艇、監視所、陸上司令部などに装備され連合艦隊の円滑な指揮運用、迅速な情報の収集と配布が可能になった。尚、この電信機の通信距離は80海里(km/1、852×80=148、16km)であった。

(記念艦「三笠」三笠保存会資料より)



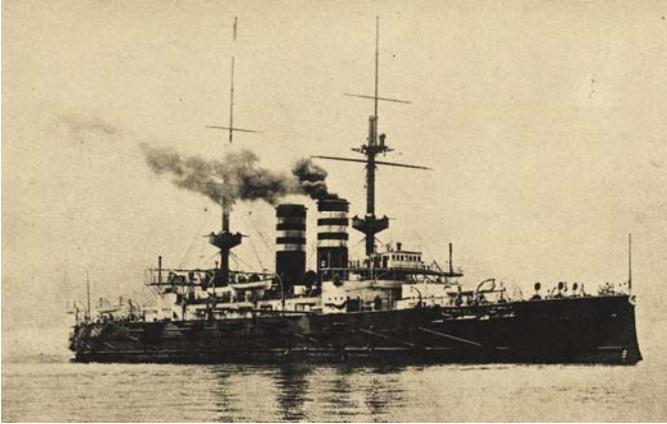
海軍技師・木村駿吉・三四、
三六式無線電信機を完成

戦艦「三笠」 は明治35年(1902)らイギリスのヴィッカーズ造船所(1828-1999年、ヴィッカーズは1999年、ロールス・ロイスに買収される)で建造された。日本海海戦ではバルチック艦隊を対馬沖に迎え撃ち、東郷平八郎司令官が座乗する連合艦隊の旗艦として勇猛果敢に戦い海戦史上例を見ない圧倒的な勝利に大きく貢献をした。

いよいよ 愈々バルチック艦隊と我が連合艦隊の激突が迫ってきた。明治37年10月15日、ロジェストウエンスキー中将(バルチック艦隊司令長官)を指揮官とする第二太平洋艦隊は、苦戦している旅順艦隊を支援するためバルト海のリバウ港を出発した。日本側はバルト海に因み、バルチック艦隊と呼んだ。12月29日マダガスカル着、フェリケルザム支隊と合流、翌年3月16日同地発。ロジェストウエンスキー中将は第三太平洋艦隊をベトナムのカムラン湾において隷下に編入、総数73隻が翌年5月14日出発した。

バルチック艦隊のシンガポール沖通過を知った日本艦隊は、ウラジオストク沖に機雷を敷設し、全兵力を朝鮮半島に集め、日夜厳しい訓練を実施しつつバルチック艦隊

を待ち構えた。5月27日五島列島西方海域を哨戒していた仮装巡洋艦「信濃丸」は、海上遙かに東航する白灯を発見、確認のため近接したところバルチック艦隊に随伴している病院船であることが判明し、連合艦隊に「敵艦隊見ユ」の警報を発信した。



日本連合艦隊旗艦・三笠一等戦艦旗艦

排水量 15362 t、速力 18 ノット、12
インチ砲 4 門、6 インチ砲 14 門、魚雷
発射管 4 門。館長は伊地知彦次郎。

三笠の勇壮の姿。日本海海戦・三笠の
活躍 『記念艦・三笠』(三笠保存会)

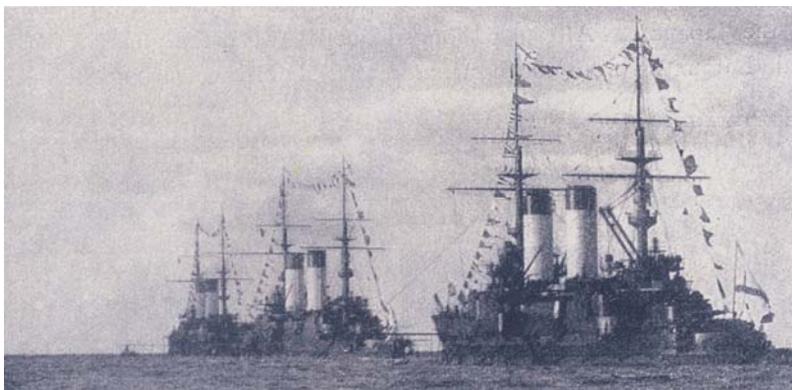
海戦史上例をみない大勝利 戦艦 4 隻・巡洋艦 8 隻を基幹とする日本艦隊 9 6 隻、ロシアは戦艦 8 隻・巡洋艦 6 隻を基幹として艦艇 3 8 隻・運送船など 9 隻からなるバルチック艦隊を対馬沖に迎え撃ち、5月27日から28日の海戦において、その19隻撃沈（戦艦 6、装甲巡洋艦 3、海防艦 1、巡洋艦 1、駆逐艦 4、その他 4）。7隻を捕獲または抑留し（戦艦 2、海防艦 2、駆逐艦 1、その他 4）、主力である戦艦・装甲巡洋艦・海防艦を全滅させた。辛うじて脱出した艦船は・巡洋艦・駆逐艦・運送船 12 隻、ウラジオストク港に到達艦は、巡洋艦 1、駆逐艦 2 となる。北方に逃走した巡洋艦 1 隻は座礁して破壊放棄され、南下した巡洋艦 3 隻は損傷し、マニラに入港後武装解除となる。日本海海戦に於けるロシア側戦死者は 4、5 4 5 人、捕虜 6、1 0 6 人、日本側の戦死者は 1 1 6 人、日本側の損害は水雷艇 3 隻のみであった。

日本側の大勝利により日露両国の講和の機運が高まり、アメリカ大統領の仲介によるポーツマス講和会議が始まる。この日本海海戦の5月27日が海軍記念日に制定されている。

バルチック艦隊の無線管理について 一方ロシア側の無線はどのような状況であったのだろうか。明治37年7月、ウラジオ艦隊の一部が日本近海に現れた時、吾妻山電信所（横須賀）でロシア艦からの信号を受信している。バルチック艦隊は、ドイツ・テレフンケン社（1903年シーメンスとAEGの合併会社）製の設備を整え、ドイツ人技師を乗り込ませていたが、マダガスカルで技師たちは下艦してしまった。ドイツ技士ら

の待遇問題に、ロシア側は冷たくあしらっていたらしく、ドイツ技士の反発によるらしい。その技師の下艦にロシア士官たちは「ネズミが逃げた」と笑い、ロシア側の将士たちは、日本海海戦の最新通信機器による海戦(当時最高の最新科学戦)が、これから始まる開戦の予測を全く想像することが出来ていなかった。バルチック艦隊の士官級たちは、無線機による最新科学戦が無線によって決戦が起きることを理解していないことになる。

バルチック艦隊



バルチック艦隊、左スワロフ、インペラートル・アレクサンドル3世、ポロディノ。この3艦は日本海海戦に参戦した。(『日露戦争 PHOTO クロニクル』濤標の会より) 右・ジノヴィー・ロジェストヴェンスキー指令長官(1848-1909)最終階級は少将。

記念艦「三笠」



現在の姿の記念艦「三笠」 神奈川県横須賀市稲岡町 82-19 2014年筆者が撮る

第6章 日英同盟のながれ 『東洋外交史・上』 植田捷雄著・東京大学出版会・

「義和団事変およびその後におけるロシアの対満進出」参考

ロシアは義和団の乱(北清事変)の勃興から、この事変を好機と捉え満州支配の軍事占拠行動を起こした。事変により北京城が陥落するとロシアは1900年8月「満州の秩序が回復すれば、その占領地から軍隊を撤退する」と宣言したが、虚偽の宣言をして軍隊を満州に駐留し続けた。

事変中に清国がロシア領のブラゴヴェシチェンスク(シベリア南部アムール州の州都・対岸は中国領黒河)を砲撃に対して、東清鉄道とロシア人保護の口実の下に満州占領した。ロシアの野心は満州域に留まらず朝鮮半島にも延び、茲に日本としては絶対譲れない利害衝突し、避けられない状態となったのである。

当時、ロシア宮廷に於いては満州占領政策の強行派ばかりでなく、ハト派はウィッテ蔵相、外務大臣ラムスドルフ、クロパトキン陸相の東清鉄道関係者は、平和主義の主張し、軍隊の満州から撤退によって清国との親和を図ろうとしていた。これに対し皇帝の側近に退役軍人の当時政務顧問タカ派のベゾブラゾフ派(ベゾブラゾフ、アバザ、プレーベ等)の冒険的野心家が、東洋で一旗挙げようと皇帝を煽動していた。やがて、その冒険派に煽動された陸軍大臣クロパトキンをも満州占領継続を主張し、この機会に口実を利用して満州の支配を確立すべきと進言しだした。

この間皇帝ニコライ2世は優柔の態度でいたが、皇帝はベゾブラゾフ(3章の39頁)策謀に乗り、次第に満州占領の野心を深めていった。一方、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世はロシア軍を思謀遠望の策略を立て、東欧州からロシア軍を極東に向かわせ、ロシア軍事力を削ぐ作戦が実りつつあった。そして平和解決を進めてきたウィッテ派は皇帝の側近から遠ざけられ、ベゾブラゾフ派が満・朝侵攻に邁進するのである。

『タイムズ』紙の北京特派員モリソンの登場 『日露戦争を演出した男モリソン』上巻序に、「イギリスは、日本人に激しい反露感情を焚きつける極東政策を取り付けるべきである。日本を煽動するためには、あらゆる手段を講じなければならない。ロシアはなんとしても抑えるべきだ。東清鉄道の完成を妨害し、不凍港の獲得強化を阻止しなければならない。・・・それを日本にやらせるのだ」。これは、ロンドンタイムズ北京駐在員、豪州人のジョージ・アーネスト・モリソンが、同社上海特派員J・O・P・ブランドに宛てた書簡の一部である。書かれたのは、1898年1月17日、義和団事

変の2年前、日露戦争勃発の6年前のことであった。

日露戦争は、「モリソンの戦争」と云われ、モリソンは「戦争屋」とも呼ばれた。それは、モリソンが、日露戦争を惹起(問題を引き起こす)することと、日本を勝利に導くことを、自己の使命として全力を尽くしたからであり、また、彼の仕事の効果が日本及び世界に認められたからである。

モリソンは、何故、日露戦争を切望したのであろうか。それは、オーストラリアの安全保障を確保するためであった。当時、大英帝国の自治領として、その翼下にあったオーストラリアが、平和と安全を享受し続けるためには、英国には、アジア・太平洋地域における優位な地位を保持してもらわねばならなかった。しかし、ロシアが南下を続け、英国の極東勢力を脅かし始めていた。そして、頼みとする英国は眼前に迫る南阿戦争(ボア戦争)のため、極東にまで軍事力を展開させる余裕はなかった。そこで、熱烈な豪州の愛国主義者モリソンは、これまたロシアの南下に悩む日本を刺激して、日本にロシア征伐をしてもらおうと願ったのである。》



中央モリソン(『日露戦争を演出した男モリソン』上
ウッドハウス映子著・新潮文庫より)



慶親王(愛新覚羅奕劻)1838-1917

1894年西太后の命令で慶親王となる

モリソンの世紀のスcoop 1901年1月3日、ロンドンタイムズ北京駐在員、モリソンは、「ロシアと清国が満州に関する協定を秘密裡に調印した」との事実を『タイムズ』紙上ですっぱ抜いたのである。満州侵略のチャンスを狙っていたロシアは、1900年6月、義和団の乱勃発に乗じて大軍を出兵、乱の鎮圧後もそのまま満州に居座った。そして在満のロシア軍撤兵を餌に、列国には極秘にして清国に迫り、この年の暮、密約を締結したのである。この密約は清国から満州の宗主権(従属国に代わり条約・外交権を行使する)を奪うものであった。

モリソンは、11月10日の『タイムズ』紙上でロシア大軍の満州の居座りは、「確

固たる軍事的占領に等しく、・・・ロシアは満州撤兵を再三列国に保障しているが、清国人はみな、満州はもう失ったものと痛感している」との警告を發した。

そして、12月31日夜10時、上記予告の到来を告げて「露清密約調印成る」との記事を記載、20世紀初の正月早々、日本と列強国をアッとさせたのである。

尚、後年モリソンは1909年5月、明治天皇に拝謁している。1912年に、日英親睦に寄与した功により、天皇より御紋付料紙硯箱すずりばこ一組を受けている。

注釈・小村寿太郎が露清密約をモリソン洩らす 『魂の外交』本多熊太郎著(ポーツマス講和会議、小村全権の秘書随行員)昭和16年・千倉書房より『タイムス』記事を抜粋する。

《・・・義和団事變の前後外交時代に、露清の密約談判を当時北京駐在の何れの国の公使よりも、先に嗅ぎつけて、遂に之を打破したのは小村侯である。露清密約を最初の案文は時の『タイムス』通信員「モリソン」の電報に依って世界に暴露されたのが、是は小村侯が慶親王側より内密に入手し、本国政府へ電報すると同時に、モリソンにその写しを与えたものである。侯(小村)は「タイス」紙上の暴露によって、世界の与論を露国に向けさせる考えから、そうされたと思う。》と本多は述べている。

この時期の小村寿太郎は1898年駐米・駐露公使を歴任し、ロシアの表裏をよく研究し、満州に対するロシアの意図に就いて、的確に見通していた。

日露協商か日英同盟かの選択 この時分の日本は、明治34年(1901)6月2日に第一次桂内閣が成立し、内閣成立時よりロシアの南下政策をいかに対処するかは大問題となり、二者択一から一方の方策を取らざるを得ない状況に追い込まれていた。

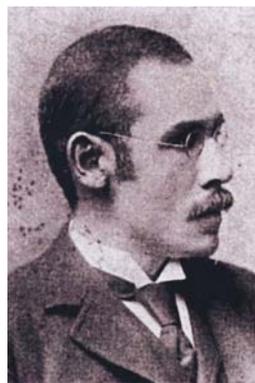
一つは、日本が朝鮮に於ける優越的地位を維持し、その代わりロシアの満州経営の自由を認める、即ち「満韓交換主義」(ロシアは満州を・日本は朝鮮を)である。二つは、ロシアの朝鮮侵略が避けられない場合は、実力(軍事力)で阻止する、この2つの難題は、議会を二分していた。

丁度このタイミングに、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世による、日・英・独の三国同盟案が進み出し、この提案に極東に於ける利益を同じにするイギリスとの同盟が検討されていた。在英日本公使林董たかすが、この同盟は日本としては「望むところ」と捉え、積極的に同盟案作成と成立に奔走した。

日本国内に於いては、明治黎明期より大英帝国の遣り方を見てきた伊藤博文らは、

「イギリスは日本との同盟をそんなに簡単に結ぶ訳がない」という考え方を持っていた。日露協商推進者は伊藤博文、井上馨、陸奥宗光、谷干城、尾崎行雄、栗野慎一郎らとなり、日英同盟論者らは、山縣有朋（最初は日露協商論者）、桂太郎（首相）、加藤高明（外務）、林董（駐英公使）、小村寿太郎（外務）、福澤諭吉等となっていた。

伊藤博文はロシアの南下が激しくなればなるほど、日露協商（お互の權益を認める）の必要を認め、協商によってロシアの侵略を防ぎ、朝鮮を守る、という考え方は、まだ日露交渉に余地は残されていると見た伊藤らは、日英同盟を時期早尚と考え、日英同盟は実現性が薄いと見ていたのである。この時期の状況は1903年8月にロシアは極東総督府を建設し、主戦派のアレクセーエフ海軍大将を総督に任命、旅順に要塞、大連に艦隊用軍港を建設し、朝鮮の馬山に石炭貯蔵所・海軍病院建設を促進していた。そして満州国境から漢城（ソウル）間の電信の架設を終え、じりじりと日本を圧迫していた時期なのである。



林董 親英派

加藤高明 親英派

井上馨・親露派

ドイツ宰相フォン・ビューロー

日英同盟に傾く

日英同盟推進の中心人物は林董で、林は「三国干渉」将来の三国の勢力図を鑑み、イギリスと同盟する以外、日本の未来はないという結論に達していた。福澤諭吉の『時事新報』（明治28年5月28日）に「外交の大方針を定めるべし」と題しての記事を掲載した。「日英同盟の必要を論じ、露国の南侵は日英両国の共通利害とする処であるから、その同盟は必ずや実現し得るべきことを強調した」これは、日英同盟論が、我が新聞紙上に発表した最初であった。

日英同盟の経緯は列強国の面子があって、その実現性の機運は日英からの発案でなく、ドイツの媒介から出てきたもので、1900年、義和団事変後にドイツから「日英独三国同盟」の締結論が提議され始め、その主唱者はドイツ皇帝ヴィルヘルム2世を始め、宰相ビューロー、外務省政務局長ホルシュタインらであった。それは1901年、

ドイツ皇帝がロンドンに赴いた際、英国新帝エドワード7世(母ヴィクトリア女王、在位1901-1910)に対して「日本は極東に優越した海軍を有するが故に、日本をドイツ及びイギリスに結びつけておくことが必要である」と力説したことから始まる。

そこで、ドイツ宰相ビューローは、駐英ドイツ臨時大使エッカードシュタインにその旨を密かに伝え、イギリス外相ランスタウンおよび駐英日本公使林董に対して、日英の接近の感触良好であるので、同盟提議を強く進めた。

エッカードシュタインは独逸皇帝の側近に信頼が厚く、「この秘密裡の外交話は皇帝から直接にお話してください」と進言し、日英独三国同盟の意向の流れを誘導した。

林公使はこの流れを日本政府に報告と同時に、同年4月17日ランスタウン(英国第5代侯爵)と会見し、イギリスの真意を探ったところ、イギリスも敢えて反対の意思が無いことが察せられ、エッカードシュタインはさらに5月11日、イギリス政府に対し、「もし日英同盟が不成立ならば、日本は日露協商に傾くであろう」と伝え、日英同盟の推進に全力で努めている。日英同盟の先導したのはドイツであるが、やがて最終的に英独同盟が流産し、成立したのが日英同盟なのである。

ドイツは何故、日英同盟仲介の役を買って出たのであろうか。動機として考えられることは、帝政ロシアの軍事力を出来るだけ極東に向けさせて、ヨーロッパからロシア軍を遠ざけようとしたカイゼルの謀策が挙げられる。これはロシアを牽制することによって、露仏同盟の勢力を弱め、ドイツの宿敵フランスを孤立に陥れる策にあった。



山縣有朋



アレクセーエフ極東総督



ヴィルヘルム2世



第5代ランスタウン公爵

ドイツは日英同盟の成立によって、ロシアの関心をヨーロッパから極東に向わせ、イギリスをして露仏同盟の外交を麻痺させ、また日本の背後にイギリス配置することにより、日本にはロシアに対峙する外交圧力を与え、これを以って日露の開戦を想定出来る状況に追い込み、因って露仏同盟の弱体化を意図したものに外ならない。

斯くして、日英同盟は現実味をおびて、取分け永年日露協商論を堅持してきた元老

山縣有朋でさえ、親露主義を変えて日英同盟の必要を認めるに至った経緯となる。

1901年4月24日、山縣が伊藤首相に送った書簡に日露衝突が必ずやってくることを伝え、「此の衝突を避け、戦争を未然に防ぐ策は、唯^{ただ}他の与国の声援にかりて、ロシアの南下を抑制するに至り、今回同盟の計画は、恰^{あなが}も我に好機を与うるものなり、宜しく速に英の意を探り進んで、独に議し盟約の成立を図るべし」と述べている。

伊藤内閣は国内の財政問題(税制)によって倒れ、同年6月2日、桂内閣組閣し、日英同盟交渉を継続した。7月15日、桂総理に対して駐英公使林董からイギリスの内情の報告を受けて了承し、これによりエドワード7世を始め、ソルスベリー首相、ランスタウン外相、帰国中のマクドナルド駐日公使(義和団の乱柴中佐と籠城)らは日英同盟に賛成に回るのである。

ロシアの南下に対して極東に於ける権益保持のため、ロシアに単独では対抗できない日本政府は、安全保障が担保される事により、ロシア開戦に自信を持ち、英国に於いてはロシアのアジアへの南下を食い止める事が出来る同盟として、大いに期待した。

ドイツの裏側を覗けば、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は、ロシア皇帝に日露戦争を煽っていたが、なかなかその通りに進まない。ロシアが何時鋒先をドイツに向けられるかもしれない。何とか早期に日露の開戦を誘発する策は、ドイツも含めた日独英の3国同盟を提唱し、ドイツは日本と同盟する素振を見せて、イギリスを誘い込み、日英交渉が本格的に進んだ時、ドイツは降りたと同盟関係者たちは見ている。

日英同盟交渉 林公使は同盟に関する事項を日本政府に構想を伝えた。

① 朝鮮問題、日本は1898年の日露協商によって日本に与えられた特権を保持し、ロシアが朝鮮に優越権を獲得しようとする行動を排除する。日本はイギリスの支持を求める。

② 中国問題、日本の政策は中国における領土保全と門戸開放^註の維持を目的とする。

③ 攻守同盟、もし同盟国の一方が本同盟の目的を防護するために、第三国と交戦する場合には、他の一方は中立を守るが、一国以上の外国と交戦する場合には、他の一方は全力挙げてその同盟国を支持する。(日露開戦時、イギリスは仏・独が露国側に組する場合どう防ぐか、その時は英国も一緒に戦う防守同盟となる)

注・門戸開放宣言(1899年7月3日通牒) 門戸開放、機会均等、領土保全の三原則を

アメリカは中国に進出している欧州列強に対し、貿易活動に於いて清国市場に割り込む目的

であった。アメリカのジョン・ヘイ国務長官(写真 11 章 159 頁)は仏、独、英、伊、日、露に対し、中国の主権の尊重と中国内の港湾の自由使用を求める通牒を発した。1900 年 3 月アメリカは門戸開放が国際的な政策になったと主張を展開し、2 年後、アメリカは満州に於けるロシアの侵略は門戸開放に反すると主張。1904 年—1905 年日露戦争の結果、ロシアに代わって満州南部の権利を獲得した日本は、アメリカに対し満州では門戸開放を維持すると伝えた。アメリカは米西戦争(米とスペイン)で中国への参入が遅れ、門戸開放を力説する事情があった。

ランスダウン英国外相(日本の軍事力を評価)はイギリス政府案を林に手交し、案の骨子は、朝鮮が他国によって併合させられることを防ぎ、中国の独立、領土保全、商工業上の機会均等を保持するものであった。林はイギリス政府案を本国へ電送したが、その返信の訓電には「政府の確定意見は近く電報するが、その間にパリにいる伊藤を訪れて、従来の往復電報を全て示し、イギリス案の確認を伊藤の支持を得るよう努めよ」とあったのである。

何故、日英同盟交渉が進んでいる最中に、伊藤がヨーロッパに現われるのか、何故、伊藤の意見を仰がねばならないのか、林は大いに驚き、悩むのである。

その理由は、伊藤は野に下り、政友会総裁の地位にいたが、エール大学(米国イェール大学)創立二百年記念祝典にあたり、伊藤に名誉法学博士の学位を授与されることになり、その途次、ヨーロッパへ足を延ばして露都を訪問して、ロシアの要人たちと会談し、日露の紛議を緩和したい希望を持っていた。

伊藤は日英同盟よりも、日露協商の成立させることの方が、日本の安全保障に叶っている策と考えており、伊藤はロシアとの交渉を国家のために最後の奉公と考えていた。伊藤自身も日英同盟を否定するものではなく、彼自身日英同盟がそんなに早く結ばれるとは思っていなかった。日英同盟の様子を見ながら日露協商を上手にまとめることが出来るなら、それに越したことはないと思っていた。それが無理なら日英同盟交渉に変更する腹構えであったようである。

明治 34 年(1901) 1 月 13 日、林は伊藤と会い、日英同盟の交渉経過を報告した。伊藤は困惑し伊藤は直ちに桂に電報して、「日英同盟案について細目に疑義がある。自分とはとにかく露都に行き意見を交換するが、政府はこの間に細目を研究し、最後の決断を下すことを猶予ゆうよされたい」と伝えて来ている。

桂は「日英交渉は今や締結間近に進捗している、重大な理由がなければ回答を遷延せんえん

することは許されない」と、返電し暗に露都行きが無意味なことを示した。

林も日英交渉が公式に進行し、日本最高元老の伊藤公の露都訪問は、イギリスに大きな不信感を与え、両国の将来への影響を心配しはじめた。林にとっては甚だ迷惑なことで、林と伊藤の会見の際、伊藤は「桂はとくに日英同盟を重要視する様子が見えなかった」と伝え、それを聞いた林は政府の態度を疑い即刻日本政府の真意を正した。

これに対し小村外相は「伊藤は何ら官命を帯びず、自己の責任に於いて行動している。政府は従来の政策に変更なく従来の方針通り交渉を進められたい」と訓令した。

林は伊藤に対し「露都に於いては単なる意見交換に止め、日英同盟の精神に矛盾する談話は避けられたい」と、伊藤に二重外交の危険を林は強く訴えた。

イギリス政府も伊藤が露都（現サンクトペタルブルク）に向う行動に深く疑惑の念を抱いていた。林は伊藤の露都行きは全くの私的行動に過ぎず、なんらロシアと協定を結ぶ権限がないとイギリス政府に釈明した。

伊藤はロシアとの最終交渉に期待を賭けたが 同11月28日、伊藤はニコライ2世を拝謁し、ロシア皇帝は「朕が信ずる所によれば、両国の協和は決して出来ないことではない」と勅語を賜った。伊藤は感激し日露協商の可能を確信し、外相ラムスドルフ(9章96頁)、蔵相ウイッテ(10章130頁)と会談し、「個人の意見」と断りながら、「朝鮮の独立に相互両国が保障、朝鮮に於ける日本の政治上・工業上及び商業上の自由行動、朝鮮における事変に対する日本の必要なる軍事的援助、朝鮮政府に対する日本の排他的助言及び援助をロシアが承認すれば、日本は満州に於いてロシアのために相当の譲歩をしても差支えない」と伝えた。

しかし、ラムスドルフを始めロシアの大勢は、朝鮮から完全に退去することに同意しなかった。伊藤はこの際に日本が満州に就いてある程度の譲歩をすれば、日露協商は必ず実現すると、この時点では確信を持っていたと思われる。

そこで伊藤はベルリンから桂に対して日露協商締結の可能性があり、日英同盟の締結延期を電報で要請した。しかし桂や小村の内心は、ロシアが示す好意は日英交渉を牽制するために単なる表面的な演出に過ぎず、到底満足なる協定を結ぶ誠意は無いものと捉えた。たとえ協商を結んでも、我が国は満州に於いて相当の譲歩を許さなければならず、それは清国の主権を毀損（こわれろ）する恐れがあり、伊藤の提案に林は賛成できなかった。

伊藤の露都訪問は、イギリスに多大な猜疑の念を与えたが、それがかえってイギリスを深く思考させ、日本がロシアとの締結の可能性に恐れを抱き、日英交渉が急速に進展することになったと伊藤に云えた。

日本政府は12月7日、葉山で元老会議を開き、日英同盟と日露協商との利益得失について意見を聴取した。山縣、井上、大山、松方、桂首相、小村外相、山本海相が顔を揃え、井上を除く諸元老は日英同盟締結に賛成し、井上は伊藤との関係が深く同意を避けたが、会議の空気は日英同盟に賛成し、彼も多数説に従い、かくして、日英同盟が決定したのである。

桂首相及び小村外相はこれを上奏し、階下は元老に再議を命じられ、元老は前議に変わりないことを奏上し、12月10日、速やかに日英同盟を締結せよと聖断が下され、ここに至り伊藤の対露交渉は打ち切られた。1902年1月30日、イギリス外務省において日英同盟条約は調印に至ったのである。

日英同盟は当時世界の一等国と仰がれたイギリスが、東洋の一小国に平等に結ばれ、条約の意義は大きいと受取った。日本の極東に於ける国際的地位は、欧米の最強国の保障するところとなり、これによって日本は長年の死活問題であった朝鮮に於ける権益を強化し、ロシアの南下に対する防禦の自信を深めたのみならず、2年後に於ける日露戦役の勝因を固めたものといえる。

余話・新たな史実発掘 『検証日露戦争』読売新聞取材班・中央公論社より

《開戦前史をめぐり、日英同盟と日露協商とは二者択一の選択で、それらの推進の中心となった桂太郎首相らと、元老・伊藤博文らとの間には、熾烈な対立があったとする見方に反論が出ている。千葉功・昭和女子大学講師は、当時の日本は欧州諸国の「パワー・ゲーム」にならって、むしろ日英、日露の「二股交渉」を目指していたとした上で、対立の図式が作られたのは、「日英同盟締結の功を自分に帰す」そうとする桂首相があたかも「対立があったように言い出し」、しかもその発言がそのまま客観史料として一人歩きしたのが原因ではないかと分析した。》とある。

日英軍事協商の成立 『近代日本戦争史・1』 「日英同盟と軍事協商の成立」 田中宏巳参照

日英同盟成立から間もない明治35年4月、駐日英公使マクドナルドが小村外相に軍事協商を締結する必要の提案を日本側に持ち出し、日本側も応じ5月14日に海軍

横須賀鎮守府内で両国代表の会議が開催された。第2次日英同盟はイギリスのインドに於ける特権と、日本に於ける朝鮮支配権を共に認め合い、清国に対する両国の機会均等を定め、締結国が他の国1国以上と交戦した場合、同盟国はこれを助けて参戦するよう義務付けられた。終始会議の主導権を握っていたのは日本海軍で、会議が始まり海軍大臣山本権兵衛（1852-1933）が伝える。

「日英同盟海軍ノ作戦基地ハ之ヲ南北二方面ニ定メサルヘカラズシテ、北方ニ於テハ我カ軍港佐世保トシ之ニ付随シテ、対馬及朝鮮南岸ノ要地南方ニ於テハ貴国ノ海港香港ヲ主トシ、之ニ付随シテ廈門（福建省）及澎湖島（台湾島西方50km）ヲ指定セントス、而シテ此作戦基地ニ拠テ以テ第一ニ各方面ノ制海権ヲ占メ、然ル後進テ臨機応変ノ作戦方略ヲ定ムルヲ適当ナリト認ム・・・（略）」（『日英両国軍事関係書類』「横須賀鎮守府ニ於ケル会談記事」防衛研究所所蔵）

協商の核心に迫る発言をしていることは、日英同盟及び協商の主務機関が海軍であるとの認識が背景にあったのであろう。陸軍大臣寺内正毅（1852-1919）が「凡ソ海戦ノミヲ以テ戦局トナリシハ、古来歴史上其実例甚ダ少ナシ、必ラス陸軍ヲ上陸セシメテ敵ノ急所ヲ撃破シ、彼ヲシテ容易ニ立ツ事能ハシメサルニ非ルヨリハ、結局ヲ見ル事難シ」（同「明治35年5月14日横須賀鎮守府ニ於ケル日英軍事会議摘要」）と、強く発言しているが、海軍主導の展開として進み、軍事協商の目的がはっきり交渉されている。

- ① 相互の信号法と電信暗号の実用化
- ② 情報の交換
- ③ 艦船に対する日本炭及び英炭（カーディフ炭）の供給
- ④ 艦船に対する入渠修繕の便宜供与
- ⑤ 戦時陸軍輸送における英船の雇用

④の艦船に対する日本炭及び英炭（カーディフ炭）の供給は諸列強にとって極東艦船の行動には、当時は日本炭が絶対に必要な燃料となっていた。軍艦の造修ができるのは日本のみで、横須賀、呉、佐世保の3ドックで、英国東洋艦隊の極東での行動は日本の協力が不可欠となっていたのである。

この調印が7月の初め、その直前にエドワード7世の戴冠式がロンドンで行われる事になり、我が国は天皇の名代として小松宮彰仁親王殿下を差遣し、式を祝う観戦式に軍艦「浅間」と「高砂」の二隻を派遣し、随行員に陸軍歩兵中佐柴五郎（北京城籠城）、福島安正少佐（義和団事件の際駐日英公使マクドナルド北京城で共戦）、2人の渡英は偶然

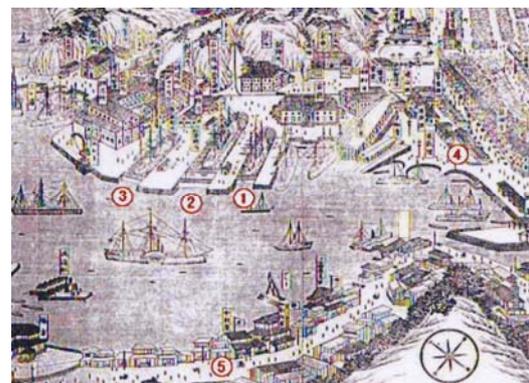
ではなく列強の仲間として戦った象徴的な2人を両国親善の為に演出したものである。

2次日英協商の交渉は難産であったのは、イギリスはロシアがアフガニスタンに南下する事を予測し、そのインドの戦局に日本軍を差し向けてくれるかの希望があり、日本側は満州の地にイギリス軍を向けてもらえるかの希望となっていた。両国の結論として「イギリス軍はインドのみ、日本軍は満州のロシア軍を自衛で守らなければならない」と、云う事項で落ち着きをみた。

イギリスはボア戦争で苦しんでいる時局であり、第3国との協力がなければイギリスは、既得権益国の維持が困難になっていた時局であり、このような協商の結論は、当時の日本陸軍側にとってはイギリス陸軍の加勢を期待した分失望を否めなかった。

日英の軍事協力は、実りある協力関係を相互に引き出すことが出来なかったが、日英の軍事協商は世界最強と新興の日本との同盟は、日本がイギリスより利益を得るのではないかと云う日本外交勝利の称賛の声が高かったが、しかし交渉はロシアの進出を阻止するため、イギリスの軍事力の期待は失望に変わり、それでも軍事協商が調印できたことは、大英帝国の風格が列強間での影響力は大きく、日本側にとっては、結果として、その期待していた以上の協商となったのである。

余話・今も残る海軍横須賀ドック 「明治絵地図説明」(①から⑤現在の位置)



現在に残る横須賀軍港・造船処・船舶修理ドック跡・現在も使われている (軍港めぐり遊覧より)

中央にある小さな建物2が下の図3、左の四角い建物(絵図では③)になる。ドックの岸壁は、慶応元年1865年の造船所建造がそのまま残る造船所となる。現在の旧海軍横須賀軍港の大部分は在日米軍基地となっている。現在は海上自衛隊の自衛艦隊司令部潜水艦隊司令部等の所在する基地となる。

① 江戸末期のドライドック ② ドライドック ③ドライドック(乾ドック・船渠)

- ④ 現在のダイエーショッパーズプラザ横須賀 ⑤ ヴェルニー公園一帯

「人物・地域」横須賀の落穂拾い（3）より

ヴェルニー公園案内 JR横須賀駅前

この公園はシーサイドパークとなり、軍港散歩と「軍港めぐり遊覧船」あり、海上自衛隊横須賀総監部と自衛艦隊棧橋、第7艦隊の原子力空母、原子力潜水艦、イージス巡洋艦等が見学することができる。原子力空母ロナルド・レーガンの大きさに驚いた次第の見学となる。公園には横須賀軍港に貢献されたヴェルニーと小栗上野介忠順のモニュメントがある。

フランソワ・レオン・ヴェルニー（1837－1908） フランス人の造船技師で、海軍増強をめざした徳川幕府の要請により横須賀製鉄所（造船所）建設の責任者として1865年来日した。明治維新後も引き続きその運営の任にあたり、観音崎燈台や走水の水道の建設、レンガの製造のほか、製鉄所内に技術学校を設けて日本人技術者の養成に努めるなど、造船以外の分野でも広く活躍して1876年帰国となる。

小栗上野介忠順^{おぐりこうずけのすけただまさ}（1827－1868） 日本初の遣米使節を勤め、外国奉行や勘定奉行など徳川幕府末期の要職を歴任し、フランスの支援のもと横須賀製鉄所（造船所）建設に携わった。軍政の改革、フランス語学校の設立など日本の近代化に大きく貢献したが、大政奉還後に徹底抗戦を主張したため役職を解かれ、領地の上野国権田村（群馬県倉沢村^{くらさわむら}）に墓がある）で官軍により斬首された。



小栗上野介忠順・ヴェルニー公園

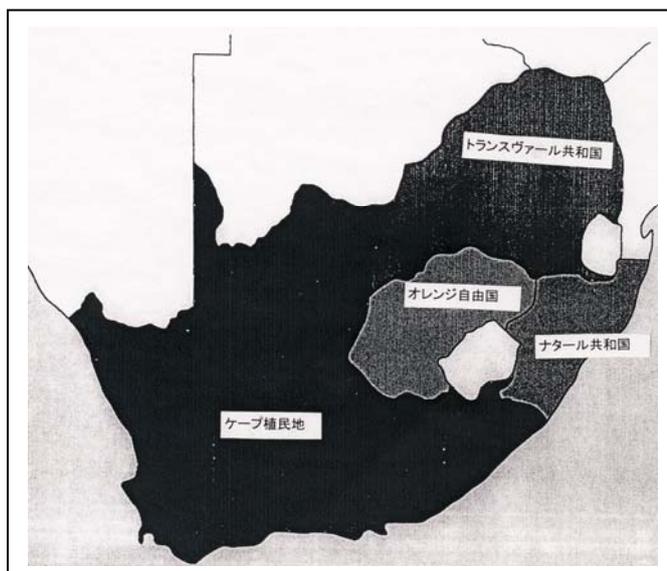


フランソワ・レオン・ヴェルニー・同公園

第7章 日露戦争前夜の米英の軍事状況を概観

英国のアフリカ植民地に於けるボーア戦争は（第1次・1880-1881）。第2次ボーア戦争（1899-1902）となる。アフリカ南部に住むオランダ系移民を主体に、フランス・ドイツ等ヨーロッパ人のプロテスタント教徒らが、宗教的自由を求めてアフリカ南部に移住し、アフリカ南部に入植した人々を指し、ボーア人（ブール人）と呼ばれた。オランダ系白人はブールといい、ボーアは英国発音の蔑視が込められている。

言語はオランダ語、仏語、マレー語、現地語の融合したアフリカーンス語を母語とし、ブール人はオランダ語、アフリカーンス語で農民を意味する。この時代に英国がケープ植民地を獲得したため、ボーア人達は1852年にトランスヴァール共和国を建国し、1854年にオレンジ自由国を建国して港を持たない内陸国家が建国した。



1840年代の南アフリカ・『ウィキペディア』より

1867年、オレンジ自由国のキンバリーで、ダイヤモンド・金の鉱山が発見され、1899年、帝国主義英国はこの地域に侵攻した。第一期開戦は、ボーア人による抵抗は強く、ドイツ製の機関銃、無煙銃などの武器で、予期せぬ大敗を屈した。これに慌てた英国は、18万の大軍を派遣して、トランスヴァール共和国を占拠し、合併が宣言された。が、ボーア人同意せず、更なる第二期ゲリラ戦争が継続する。やがてボーア人側も抵抗の限界となり1902年5月、両国は合併することを承認（フェリーニヒング条約）して戦争は終わり、ボーア人の2つの協和国が消滅した。

英国側の死者6千人、戦病、戦傷者合わせて3万9千人、軍事費は2億2千3百万ポンド（日本円22億3千万円）にのぼり、日露戦争の戦費を遥かに上回り、英国の国力を疲弊させる要因となっている。この戦争により英国はトランスヴァール共和国とオレンジ自由国を合併したが、英国軍の疲弊は甚大となり、非人道的な収容所戦略（女性と子供を強制収容所に隔離・餓死）、焦土作戦展開し国際的非難をあびた。

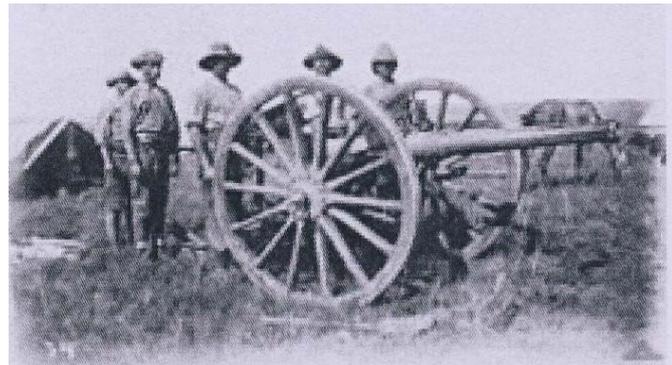
ボーア戦争に英国2年半も費やし、英国帝国としての権威が大きく失墜し、この時

期に於いて、英国は米国の工業力に追い抜かれていたのである。極東では1900年、義和団事変が勃発したが、この様な事情により、英国は「栄光ある孤立」の政策を改めざるをえず、1902年、「日英同盟」につながって行くのである。

その頃、ドイツは西南アフリカのナミビアを支配、さらにモザンビークのデラゴア湾にも野心をもち、英国の敵対国となっていた。こうした関係からボーア戦争は汚い帝国主義戦争と語られた。



ボーア戦争の英国軍



同・英国軍

yahoo 画像より

この戦争は、両軍が無煙火薬使用した近代的な小口径連発小銃で武装して戦った戦争となる。短い銃剣を装着し、兵士一人ごとに100発の弾薬を携帯し、他に弾薬箱で85発を運搬した。予期せぬ敗北と苦戦に英国軍はその戦法・戦術を変え、野戦の服装も射撃目標を受けやすいものから、風土に合わせたカーキー色の軍服に変えたのである。

このカーキとは本来「^{つちぼこり}土埃」を指す。19世紀、インド駐留英国軍が、現地語でカーキと称したのが始まりと云われている。日本では明治37年頃、陸軍が帯赤茶褐色・黄土色をカーキー色と紹介している。

1902年1月、英国陸軍全軍の軍服をカーキー色に定め、この時期の小銃の有効射程が1000m、命中精度も高く、しかも連発銃の出現により火力の密度が高く、それらを一斉射撃に繰り返す新戦法が確立された。

この「ボーア戦術」が今後の戦争で使われるかに問われていたが、即刻、日露戦争で試されることになった。世界の陸軍に多大な戦術的教訓を与えたボーア戦争は、近代戦争の要であったのである。 (『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・他参照)

トランスヴァール共和国 1830年代より英領ケープ植民地のオランダ系移民らが、英国統治への反発から、北東内陸へ集団移動し、ヴァールの北方(トランスヴァール)にボ

ーア人が拠点を築く。1852年にトランスヴァール共和国が成立した。

オレンジ自由国 国名の「オレンジ」は南部国境を形成するオレンジ川に因る。1854年、ボーア人によって建国された。1860年代以降、西部グリカランドのキンバリーでダイヤモンド鉱山が発見され、白人鉱山技師が流入し、英国はこの技師保護を名目にオレンジ自由国を侵略した。しかし、現実にはボーア人より待遇が悪く、1899年に第二次ボーア戦争が起きる経緯となっている。

米西戦争の概要 米西戦争=アメリカ=スペイン戦争。1895年のキューバ革命に対するスペインの弾圧にアメリカが軍事介入し、ハバナ湾に停泊中のアメリカ戦艦メイン号が1898年2月（4月25日—8月12日）に爆沈させられた事件を口実に、同年4月25日アメリカはスペインに宣戦布告した。

戦況はアジアに移り5月1日、アメリカアジア艦隊がフィリピンのマニラ湾でスペイン艦隊を撃破し、6月11日、アメリカ軍はキューバに上陸した。

12日にフィリピンでアギナルド(フィリピンの革命家)が独立を宣言し、同月20日、アメリカ軍がグワム島を占領した。7月3日、アメリカ艦隊がキューバのサンティアゴでスペイン艦隊に勝利し、25日、アメリカ軍がプエルト・リコを占領して8月12日に休戦協定が結ばれた。同月13日、アメリカ軍がマニラを無血占領し、スペインとの戦闘は4ヶ月で終結した。

12月10日、パリ講和条約が成立、スペインは、プエルト・リコ、グアム、フィリピンをアメリカに割譲し、キューバの独立を認める事になる。

この間、アメリカはハワイを併合し、翌99年にウエーク島を獲得し、東サモアの諸島をも獲得、サンフランシスコからハワイ、ウエーク、グアム、マニラを経て中国大陸に到達するルートが出来上がり、太平洋の中継基地群が一本の線で結ばれた。

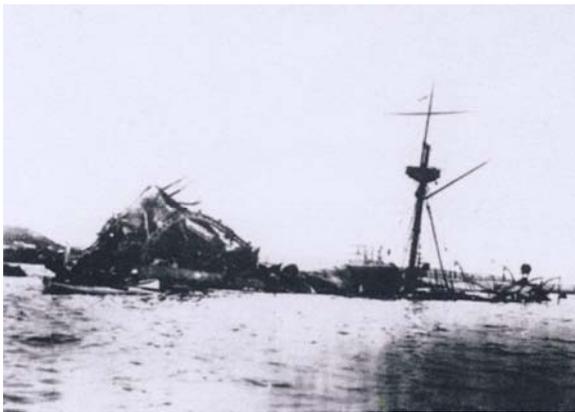
アメリカはフィリピン独立革命軍を懐柔してマニラを無血開城させたが、独立を認めないアメリカとフィリピン独立戦争が開戦となって行く。

「米比戦争」1898年8月14日、1万1千の地上軍が送られ、アメリカはフィリピン独立指導者エミリオ・アギナルド(1869—1964・フィリピン共和国初代大統領)に、勝利したら独立させると約束してスペイン軍を背後から襲わせ、アメリカはスペイン降伏後、約束の独立を反故にして、アギナルド独立軍1万8千を掃射の行動にでた。

アメリカのフィリピン征服戦争は苛酷な戦争の連続であった。アメリカ陸軍公式統

計によれば、投入兵力12万8千、死者4千、3千の負傷を出した。20万に近いフィリピン戦闘員が殺された。アメリカはパリ条約において、スペインへ2000万ドルを支払、フィリピン独立戦争に要した戦費はポンドに換算すれば、約1億3千万ポンド、イギリスがボーア戦争に費やした戦費より少ないが膨大な額に上った。

イギリスのボーア戦争、アメリカのスペイン・フィリピン独立戦争ともに1900年1月から本格化し、イギリス、アメリカは共に大兵力を投入した時期と、日露戦争の前夜に重なっていたのである。『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著参照



ハバナで沈没した米戦艦メイン



エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ

戦艦メイン号沈没 1898年2月15日、米国が裏で操作した沈没事件で、乗員士官、兵員374名、日本人を含む260名が死亡。原因不明であるが、結果、スペインを糾弾し、戦争に突入する口実を作りだし、米西戦争が始まる。この戦争以後、スペインは南北アメリカと太平洋から影響が一掃され、代わりに米国が太平洋に新興の帝国として歴史に登場してくるのである。

秋山真之は米西戦争に観戦武官として参加 明治31年、米国へ私費留学で軍事思想家であるアルフレッド・セイヤー・マハンに師事（「世界の諸処に植民地を獲得せよ。貿易を保護し外国に強圧を加え、諸処に海軍根拠地を獲得せよ」との思想家）し、秋山は米艦セグランサで、キューバのサンチーゴ港包囲作戦を武官観戦する機会を得た。

米艦隊は、狭い湾口に老朽船を沈めて「閉鎖作戦」（この閉鎖作戦を秋山は具^{つぶさ}に観戦している）を開始したが、結局この作戦は失敗に終わる。

スペイン軍は湾内の艦隊をフィリピンに派兵するため、湾内を抜け出す強行突破を敢行したが、操船の錬度と船速（ノット）に優れる米艦船に搭乗していた秋山真之は、

その攻撃の実観戦を体験したのである。又、スペイン艦艇の船底に貝殻の付着(スピードがおちる)を自らの眼で確認し、船舶の走行について実践学を学んだのである。

米国艦艇の造作に不燃化(鉄板装甲)、速射砲の完備の的確な観戦報告を日本へ送り、連合艦隊の作戦参謀本部への現場戦闘実践を覚醒させた。この時の秋山の報告書が後に、旅順港閉塞作戦の基になったと言われている。

余話・明治天皇とカラカウア・ハワイ国王極秘会談

明治14年(1881)年3月、ハワイ国王(7代目)のカラカウア王が世界一周旅の途上、横浜港に来航した。3月11日、随員の米国人にも知らせずに、一人で極秘に明治天皇(当時29歳)に会見を申し入れて来た。この会見の内容が「カラカウア王の会談」が『明治天皇紀』に残されている。

《「今次巡遊の主旨は、多年希望する所のアジア諸国の連盟を起さんとするに在り。欧州諸国はただ利己を以て主義と為し(しむける)、他国の不利、他人の困難を顧みることなし、而してその東洋諸国に対する政略に於いては、諸国能く(十分に)連合し能く共同(同じ目的)する、然るに東洋諸国は互に孤立して相援けず、又、欧州諸国に対する政略を有せず、今日東洋諸国がその權益を欧州諸国に占有される所以(理由)は一にこれにある、されば(それゆえ)東洋諸国の急務は、連合同盟して東洋の大局を維持し、以て欧州諸国に対峙するに在り、而して今やその時期に到来している。

・・・(中略) 今次の旅行、清国、シャム、インド、ペルシャ等の君主にも面会して、つぶさに連盟の利害の得失(そんとく)を弁説(解説)にしたが、然れども、我がハワイは小さな島々にして人口も少なく、国際的な大同計画立案する力はない、しかるに(ところでハワイ王は)貴国は聞知(聞き及び)するにたがわず(違わず)、その進歩は実に驚いているところで、人民は多くして、その気質は勇敢であり、故にアジア諸国の連盟を呼びかければ、陛下が進んでこの盟主になられれば、予(ハワイ王)は陛下に臣下として大に励みます。・・・》 (『明治天皇紀』五・現代語訳少し入れ読みやすくした)

ハワイ王は明治天皇に対し、欧米列強国の侵略対しアジア諸国が団結する必要がある。そして、明治天皇にアジア諸国連盟の盟主になってほしいと訴えている。すなわち、日本の天皇を中心にアジアをまとめて頂ければ、ハワイ王家は下臣としてついて行きます、との話をしたのである。

この提案に明治天皇は、《欧亞（欧米とアジア）の大勢は実に貴説（ハワイ王）の如し、又、東洋諸国（スマトラ周辺まで）の連合に就きて（理由を表す）も所見を同じくする。・・・しかし、我が国の進歩も外見ばかりでなく、殊に（特別に）清国とは葛藤（いがみ合う）ことが多く、彼らは常に我が国の征略の意図を感じる。既に清国との和平をも全く顧し（顧みて思いめぐらす）、王の考えを遂行（やりとげる）することは更に難事業であり、尚、閣臣等に諮り、熟考（念を入れて考える）して答えるべし・・・》と回答している。



カラカウア・ハワイ王（1874－1891）



カイウラニ王女

更にカラカウア王は、日本人の移民を要請と、ハワイ王室と日本の皇室とを結び付けることを強く希望し、カイウラニ王女（5歳）と日本皇族・山階宮定麿王（後の東伏見宮よりひとしんのう・当時13歳）との婚約申し入れをしている。

翌明治15年2月、明治政府はハワイに特使を派遣し「アジア諸国の連盟・盟主」となることをと、婚姻の申し出には丁重にお断りした。移民に付いての申し出は、明治17年、946名を送り、更に後続移民が続き、20世紀初頭には、ハワイ人口の4割を占めたのである。ハワイ王国の将来に於いては、白人による病気等によって、原住ハワイ人の激減したことにより、同種に近い日本人移民を増やし、ハワイ王国に白人社会を牽制の思惑があったと思われる。

この話が持ち上がったのは米国とのハワイ合併は直近のことで、もし、カラカウア王の申し出の如く、山階宮定麿王とハワイ王女が結ばれ、日本がハワイ王国を側面から支援する歴史を想像すれば、歴史のロマンを感じるお話しである。

カラカウア王はポリネシア帝国を建設する構想を抱いていて、1886年にポリネシア連合に計画資金3万ドルを確保し、サモアのマリエトア王とポリネシア連合が合意に至っていたが、翌年のクーデターでこの構想は消滅した。

第8章 日露戦争前夜にロシア圏への諜報活動した男たち

諜報者 1・石光真清の満州諜報活動 いしみつまきよ 石光は明治元年(1868—1942)、熊本藩士に生まれる。

少年時代を神風連や西南の役代の動乱の中に過ごし、陸軍幼年学校に入る。陸軍中尉ちゅういで日清戦争に参加し台湾に遠征し、その時ロシア研究の必要を痛感して帰国する。ロシア帝国の南下政策おびやに脅かされる弱小国日本を憂い、明治32年、特別任務を帯びてシベリアに渡る。

石光真清はロシア諜報活動に専念する動機を次のように語っている。《「日清両国の間で調印の済んだ平和条約によって、台湾と遼東半島が日本に割譲されたが、ロシア、ドイツ、フランスの共同干渉によって、日本は一週間後にやむなく遼東半島の放棄を宣言しなければならなかった。政府は国民がしんしやうたんに臥薪嘗胆を説いて軽挙を戒めたが、国民の悲憤は容易には治まらなかった。殊に、山野を血で染めた惨憺たる戦いの犠牲者を、自分の眼で見て来た私たちの悲憤は、一層治まり難いものであった。遺族の消息や、廢兵はいへい(日清戦争負傷傷害者)の姿に接するたびに、私の胸には次第に深い傷痕が刻まれていった。国と国の民族と民族との生きる戦い、子孫のための戦いの激しさを、私たちは血煙と絶叫のうちに、見せられ聞かされた。やがては、大ロシア帝国の侵略に脅かされて、再び国の運命を賭けて戦わねばならない時がくるであろう」と。

大津事件(露国皇帝襲撃事件)でロシア皇帝が寛大な態度を執った事により、日露の破綻はたんを喰い止められた。それは日露感情のくすぶりとなって、将来へ蟠わだかまりを残してしまう結果となった。大清国には勝つことはできても、大ロシア帝国に戦勝することは、国民も軍部も妙案など無く、只、戦慄を覚えるのみであった。ロシアは将来の有事を想定し、遼東半島を日本国の帰属から排除したのである。

時代状況から私(石光)はロシア研究の必要を感じ、当時軍界にあつて、ロシア研究に手を付け始めた人は、先輩の村田惇あつし砲兵大佐(1854—1917・最終階級中將。仏・伊留学、露国通)、田中義一(後の大將)歩兵少佐の他、2、3の人達に過ぎなかった。熊本の漢学塾に通っていた8、9才の頃から士官学校まで、一向勉強に方には身の入らなかった私が、このように熱心になったのは、自分でも不思議に思う事であった。これも、戦場で体験した国際世界の厳しさに揉もまれたお蔭であろう。どんなことがあっても、この勉強だけは続けて、将来の日露関係の危機にお役に立とうと、深く胸中に誓ったのである。》(『城下の人』石光真清の手記より・中央文庫。『曠野の花』『望郷の歌』『誰のために』著がある)



現在のハバロフスク公園よりアムール川望む 同公園ムラヴィヨフの像 石光真清『曠野の花』

明治20年代末期のハバロフスクは、^{ウラヤ}浦潮—^{ハバロフ}哈府間のウスリー鉄道の労働者、写真業、医師、洗濯女等約5千人の日本人が居た。又、明治11年9月、榎本武揚が66日間のシベリア横断の途次に立寄り、明治19年7月には黒田清隆も立ち寄っている。ハバロフスク公園にはこの街を造ったムラヴィヨフ・アルスキー伯爵の立像がある。伯は極東ロシアの主要都市、ハバロフスクの街を創立した人物で、1858年清国とアイグン条約を締結している。

アムール河の流血を見る 石光真清は明治33年、ロシア軍人カザック（コザック）連隊付騎兵大尉ポポーフ宅方に寄食、2月15日、ポポーフ大尉の人物記述に、

《「イワノウイッチ（大尉より命名石光のロシア名）君、僕は連隊長から選ばれて軍務知事グリーブスキー中將の使者を命ぜられてね、^{あいぐん}愛暉（アムール中流アイグン・現黒河市）の鎮守使公署に行くのだが、一緒に行かないか。馬は用意させておいた」と、思いもよらぬ出掛ける楽しみを受けた。》 愛暉はブラゴヴェヒチェンスクの対岸下流の支那街である。石光は露・中国境見聞に喜びを表している。

現在のブラゴヴェシチェンスク（中国名海蘭泡）はシベリア南部のアムール州の州都となる。対岸までのその距離750m、中国領^{こくが}黒河となる。1856年にロシアの要塞都市として建設され、アムール川（黒竜江）の北部は清朝に属していたが、1858年のアイグン条約（^{あいぐん}瓊瑣条約）、1860年の北京条約により、ロシア領となりアムール・コサック軍の根拠地となった所である。

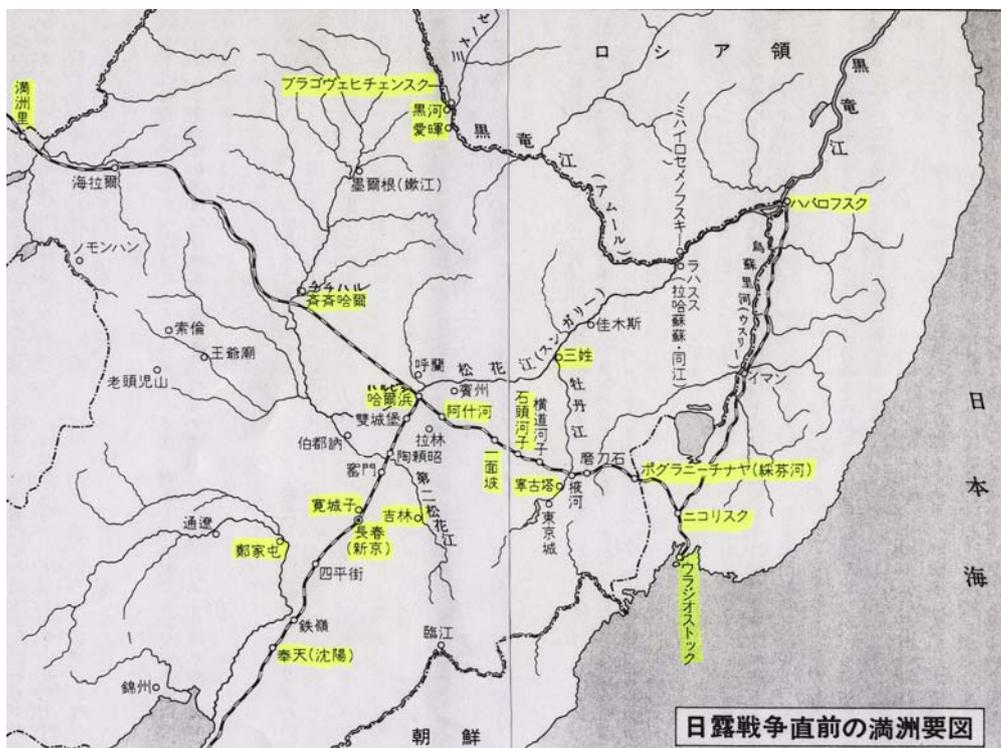
1900年に義和団の乱徒がブラゴヴェシチェンスクに2週間占有したが、ロシア軍は在住の清国民間人3千人を虐殺して、死体や生存者をもアムール川に投げ込み、対岸の^{こくがちん}黒河鎮、愛瑣城を焼き払い、この街に居住していた難民全員を皆殺にした。

アイグン条約でアムール川の左岸の外満州は、ロシアに割譲されていたが、黒河の

対岸の「江東六十四屯」(64箇所の村落)と呼ばれる地域に、多数の中国人居留民が居住していたが、義和団事件勃発時からブラゴヴェシチェンスクへ多くの難民が流入していた。1900年7月13日、この地域に露国コザック兵が、清国民間人3千人を排除するために起した殺戮事件である。更に8月2、3日にかけて義和団に対する報復として2千のロシア兵が、黒河鎮から渡河上陸し、清国人2万5千有余を虐殺してアムール川に投げ捨てた事件となる。

「アムール川の流血」 『曠野の花』より

《・・・叫喚と銃声と呻き声と怒号と、とてもとても、あの地獄のような惨劇は口では言えない。二隊に分けたと言っても2千名近い人間を一束にして殺そうと云うのだ、・・・走る、拝む、潜り込む、・・・子供を抱いて逃げようとする母親が芋のように刺し殺される。子供が放り出されて踏み潰される。馬の蹄に顔を潰された少年や、火の付いたように泣き叫ぶ彼等が、銃尻で撲り殺される。・・・黒竜江に半殺し人間の筏が流れ去った後は、土の上の夥しい血の海の中に、靴や帽子や手提や細々としたものが、雑然と踏みにじられて散らばっていた。・・・》と惨劇状況述べている。



日露開戦前の満州図・『曠野の花』より

その続きに 《黒竜江岸が悉くロシア軍の蹂躪するところとなったのであるから、

逃げる方面は南方より外になかった。避難路は必然的にチチハル公路ということになり、・・・2万幾千人の避難民が家財を持って殺到した。・・・ロシア軍は城内に取残された市民を片端から虐殺したばかりか、勢いを駆って市民の避難路へ追撃攻撃を始めた。既に清軍の影も無く、武器一つ持たぬ彼ら避難家族の大群を目がけて射撃したから堪らない、その惨状はブラゴヴェシチェンスクや黒河鎮における虐殺に劣らなかった。・・・こうしてブラゴヴェシチェンスク対岸の清国の都市村落は悉く焼払われ、その住民は徹底的に殺された。その虐殺の目的は、ロシア国境の安全を保つために清国側河岸に街の建設を断念させるために、刃向うものは、今後、かくの如き惨禍きんかを加えられるであろう事を思い知らせるためであったのだ。・・・。》と石光はロシアコザック軍の暴虐の顛末を記述している。

このアムール川の悲劇を明治34年、旧制第一高等学校の寮歌「アムール川の流血や」と歌われた歌詞に次の様にある。

1、アムール河の流血や 凍りて恨み結びけん

二十世紀の東洋は 怪雲空にはびこりつ

2、コサック兵の剣戟けんげきや 怒りて光ちらしけん

二十世紀の東洋は 荒波海に立ちさわぐ

3、満清まんしんすでに力つき 末は魯稿ろこうも穿ち得で

仰ぐはひとり日東にっとう（日本）の 名もかんばしき秋津島（大和）（4、5、6は略）

馬賊に接近する 明治33年の頃、石光真清は紅鬃子フンフーズ、馬賊頭目の栄紀、増世策、と出会う。馬賊おきての掟情報は下記の如くとなっていた。

① 機密を洩らした者は斬る。② 命令に反抗した者は斬る。③ 敵に内通し者は斬る。
④ 脱走を企てた者は斬る。⑤ 同志あざむを欺き或るいわ侮辱した者は斬る。これが彼らの5カ条の誓いとなる。

頭目とうもく（かしら）の元には2百から2千名の配下を持ち、勢力範囲を協定して互に連携を取り合っている。北満州の地は、馬賊の保護がなければ、旅行も、大きな商売もできない僻地となっていた。この地域は腐敗墮落した清朝の軍兵力で治めることは出来ない地域なのである。石光は馬賊の情報網を使えば、ロシア軍の機密を探ることができると直感して接近して行く。

満州義勇軍（馬賊を集結）については、有名なのは政治結社・玄洋社・代表頭山満とうやまみつる、

内田良平らは満洲馬賊を指揮して、ロシア軍の兵員・糧秣等の調査、鉄道破壊、電線破壊を馬賊に依って成し遂げようとするゲリラ活動の展開した地域となっていた。

馬賊の実情 「馬賊」(紅鬍子・赤顔)という言葉は日本側から生まれたものらしい。華北地方で馬を駆使し、古くは野盗等を働いたことに起因しているらしいが、この地方での用語として、馬賊という名称は使われていないので、日本人の間で使われた名称の様である。遼・金・元・清に至る歴代王朝は、西北方面から旋風のように満州辺境に現れ襲ってくる韃靼人(モンゴル、テュルク、ツングース系)に怯え、奴等を紅鬍子・赤鬍、赤顔で襲ってきたので、これ等の侵略者をそう呼んだ。後には赤鬍でなくても、他村から襲来してくる盗賊類を鬍子と称し、彼等は、食糧、家財、婦女子までも強奪して男たちを虐殺して去って行く匪賊であった。

歴代王朝はこれ等に対して、何等防衛処置を軍事力で平定する策を執らないでいた。農民たちは、自らの力でこの赤い鬍の掠奪者たちと必死の戦いを繰返していた。北満の農村自治組織は異常な発展の歴史を遂げたのが、後の保衛団、連荘会という民間自衛組織へと発達して行く過程となっている。

農民としては、政府の役人や官兵などの官匪(悪い役人)よりも、遊撃隊(義勇団より特選されて組織訓練を受けた攬把隊員・長は総攬把)に支払う金額で保護されるほうが信頼を置けたことによる。この郷村の遊撃隊を日本で言われる「馬賊」を指しているの
で、保衛団は旅行者の保護の他、現金、阿片、塩などの高級物資の輸送業務や、各郷村の縄張りに連絡を取りつけて、優秀な人材、優秀な武器を装備して護衛、高額の保障金を徴収し、馬賊の利用する時は、居民らは馬賊に金銭を支払うのである。又、権勢のある馬賊に地域住民は勲章をも与えていた。



出陣をまえに武装した攬把とその部下



女馬賊・満州お菊

この時期でのロシアは東清鉄道もほぼ完成し、東清政策が着々と実現して日露国境

の満州馬賊に対する懐柔は、日露両国とも苦心したのである。日本軍はその頃シベリア鉄道の東満鉄道の沿線に破壊工作を秘密裡に始めていた。

後に『曠野の花』などに見られるように、石光真清はウラジオストクで当時の花田仲之助少佐^{ノボタ}の諜略軍人と出会っている。彼は軍の密令によって満州で特別工作のために、日本人や中国人を集めて、鉄道破壊や後方攪乱を目的として満州義軍なる別行動隊を編成していたのである。(『馬賊』渡辺龍策著・中央新書・『馬賊社会誌』同著・秀英書房)



ウラジオストク公園・浦潮本願寺跡 1850年ロシア海軍入港埠頭(浦塩港内)右奥に記念碑が見える

注・満州義勇軍 1904年、ロシア軍の後方攪乱、兵站破壊を任務し満州の馬賊を集めて創設された特別任務隊。注・頭に「花大人」は花田仲之助^{ホアターレン}で、ウラジオストクの西本願寺僧に化け諜報活動に従事していた。

「秘密計画」『曠野の花』より 《・・・当時ウラジオストックには、町田経宇少佐^{けいご}(1885-1939・陸軍大将)、武藤信義大尉^{のぶよし}(1868-1933・元帥)を初めとして、郵船会社支店長手見機一氏(1848-1903・外交官)、東亜同文書院創立者杜根津一氏^{はじめ}(1860-1927・少佐)、商務官事務所の二ツ橋領事のほかに、志士団員を引き連れて来た内田良平(1874-1937・玄洋社・アジア主義者)がいて、何れもロシア軍の東亜征服計画の推移を見張っていて、思えば当時の民間人は本当に国家意識が強いものであった。日清戦争の三国干渉に憤激した志ある人々は、軟弱な政府を頼むに足らずと、悲壮な気持を抱いて続々と大陸へ渡り、各自思う処に愛国の情熱を傾けていたのである。ロシア軍に蹂躪^{じゅうりん}された満州の市場に、日本商品の販路を獲得しようとする商人や実業家も、政府機関に援助を求めるわけでもなく、単身ウラジオストックに乗り込み、ロシア軍の動静を探りつつ、満州の大地へ深く入り込んだ。私は(石光)、町田少佐、武藤大尉と協議した結果、結論として得たところは次のようなものであった。

① ロシア軍の満州占拠は既に経営時代に移って本格化していた。情報蒐集には、単独偵察では成果を挙げられない。諜報網を満州と黒竜江沿岸のロシア領に入り、これらの統率の中心をハルビンに置くこと。

② 従来私が行って来た旅行者の形式から居住者の形式に移らねばならない。その為に商館をハルビンに建設し、各地に支店を設置する。しかもその商館はロシア軍から疑われない程度に本格的な商売をするものでなければならない。

③ 本格的商館を建設するからには、その経営は万一を考え軍籍に在る者は不適格である。軍の事情に精通し、しかも商人たり得る者として参謀本部に意見を具申した。

《「商売はなにをやるか」だ、「ロシア軍が重宝して可愛がってくれるという商売でなければね」といろいろ考えたあげく、柴五郎氏(北京城籠城指揮)の写真屋を思い出した。柴五郎中佐が日清戦争前の明治23年、清国に派遣されて諜報任務に就いた時、福建省の福州で従弟に写真業の手代となって身を隠していたことがある。「写真屋だ、写真屋ならばシベリアでも日本人の特技が認められている。しかもロシア人は大の写真好きだ」・・・》という結論になったのである。

石光はハルビンに洗濯屋をも経営していた。当時、ロシア当局は、外国人には絶対に土地の貸与を許さなかった。苦勞の末、開店したハルビンの菊池(菊池正三の仮名)写真館は、写真好きのロシア人に最良にしてもらい、大繁盛となった。館は10人の大所帯に、そして浪人組も寄食し、その中に二葉亭四迷(谷川四迷)もいた。石光真清は写真館の仕事の裏側では諜報活動を盛んに続けて行くのである。

諜報者2・明石元次郎のロシア周辺国の後方攪乱工作 明治37年2月4日午前中、

御前会議が開かれ、明治天皇をはじめ、枢密院議長伊藤博文、枢密顧問山縣有朋元帥、参議総長大山巖元帥、枢密院顧問松方正義、枢密院顧問井上馨、首相桂太郎大将、海相山本権兵衛中将、蔵相曾禰荒助、外相小村寿太郎、陸相寺内正毅中将が集まり会議の結果、対露交渉中止と国交断絶し、開戦を決定した。

伊藤は御前会議終了後直ちに、金子堅太郎(1853-1942・司法大臣等、大日本帝国拳法起草に参加)を米国に派遣し、高橋是清(日銀副総裁)を戦時公債募集のため米英に派遣、伊藤の女婿の末松謙澄(内務大臣等・外交官)をロンドン・パリへ派遣、欧米の世論工作(日露開戦は正義の戦いと「黄禍論」の説得の喧伝)に、2月24日のアメリカ行の客船に金子と高橋を乗船させ、政府は早期に平和斡旋計画をぬかりなく手を打って

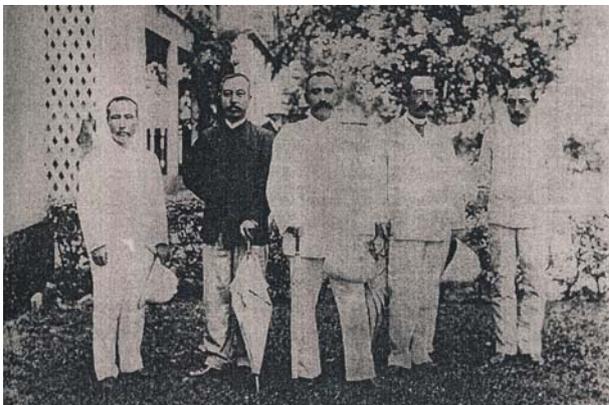
いる。この伊藤の戦略指示は、後世の我々から見れば、本当に凄い布石を打ったものと思わずにはいられない。

児玉総参謀長は連日参謀本部に泊り込み作戦を練り、ロシアとの戦いが長期になれば勝ち目は無い、先手必勝(1、2年内を想定)とし、短期決戦策を立案して、早期に講和に持ち込む作戦計画を練っていたのである。ロシア大陸は無限なので、露都まで攻め入ることは不可能である。それならばロシアの露都に内乱・攪乱を起させ、内側から崩壊させる。そして、シベリア鉄道を破壊して大動脈を止め、馬賊を糾合して満州義軍を組織しロシア軍にゲリラ攻撃を展開、あらゆる対露情報を収集する。優秀な諜報活動を展開、ロシア後方攪乱計画に抜擢されたのが、明石元二郎少佐であった。

「明石工作」・ロシア国内の内乱を扇動させる 明石元次郎の履歴・明治10年、陸軍幼年学校へ入学、フランス語はトップ級。明治20年、24歳で陸軍大学へ入学し、メッケル少佐(ウィルヘルム・ヤコブ・メッケル 1885年来日・フランス式兵制からドイツ式兵制を導入)から戦術論を学ぶ。同24年28歳の時、参謀本部第二部員(歩兵大尉)となり、茲で川上操六次長と出会う。明治27年、ドイツ留学。同29年、参謀本部第三局員となり、同年10月、川上参謀次長と共に台湾に出向、仏領インドシナへ5ヶ月間視察調査団に参加した。メンバーは川上参謀次長、伊地知幸介第二部長(最終階級陸軍中将)、村田^{あつし}副官(最終階級陸軍中将)、福島中佐(シベリア単騎横断者)、川上参謀が明石を高く評価していたことが分かる。明治34年1月、フランス公使館付武官としてパリ赴任、フランス語と独学を学び、翌年年8月、ロシア公使館付武官としてペテルブルグに赴任。明石はロシア語を再学し、諜報活動に従事、日露戦争の直前2月8日、「至急ムストックホルムへ行き、ここで不平党(反ロシア運動の革命家)達を扇動、同時にポーランド人を利用して武力抗争を起せ」との極秘命令を受けていた。

「明石工作」資金は、当時の金で百万円(現在の金で400億以上・当時の国家予算額は2億3千万円)。陸軍は諜報活動に桁外れの金額を、工作資金を出したのである。明治36年(1903)明石大佐(当時)の東欧・ロシアの各地で諜報活動が始まる。この極秘作戦の全容は、日露戦争終結後、明治38年に参謀総長宛てに提出した「復命書」に、詳細な記録、『落花流水』(落ちる花と流れる水)と題されたこの復命書が残る。日露戦争の最重要史料となって陸軍内部と、トップ級の参謀の士官たちの教育用に長く参謀本部で利用されていた。後、昭和37年、明石復命書『落花流水』原本の写しを、元陸

軍少佐明石泰二郎氏（元二郎の甥）から防衛庁戦史室に寄託となる。この写しは国会図書館憲政資料室の「明石元二郎文書」防衛庁防衛研究所戦史図書館に保存されているものがそれである。



仏領インドシナ視察調査団・左より明石元二郎、伊地知幸介、川上操六、村田惇、福島安正、明治31年2月、川上の命令で米西戦争のアギナルド将軍の戦闘を見分する。 右・明石元二郎

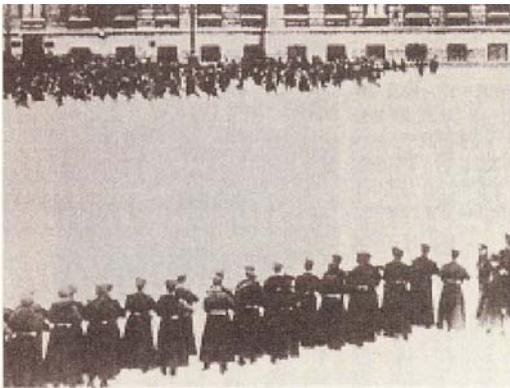
明石はロシア国内や周辺国で反政府運動に資金援助をして、テロ、暴動、革命へ誘発する政治活動情勢の際に扇動した。当時ロシア圏に隷属と圧政に苦しめられていたフィンランドやポーランドの独立運動家たちに接触して、ロシアに反抗するフィンランド憲法党カストレンと接触、フィンランド革命党の党首カストレンに、シリヤクスを紹介され、2人とは盟友関係となり、各党派に資金提供を約束した。全ヨーロッパの革命運動家に人脈を持つシリヤスクは、明石に代わって露都周辺国を走り回りロシア反政府活動に奔走したのである。

37年3月、ポーランド社会党執行委員会から、林董^{たかす}駐英公使にポーランド人による反ロシア工作の提案があり、極東戦線へ送るロシア増援兵のポーランド青年の徴兵や動員に、反対する暴動をポーランド各地で頻発^{ひんぱつ}させ、その鎮圧のためロシア軍が、約30万人が国内に止まることに成功している。7月には、革命家たちを弾圧していたロシア内務大臣プレーヴェが、馬車ごとダイナマイトによる暗殺に成功した。

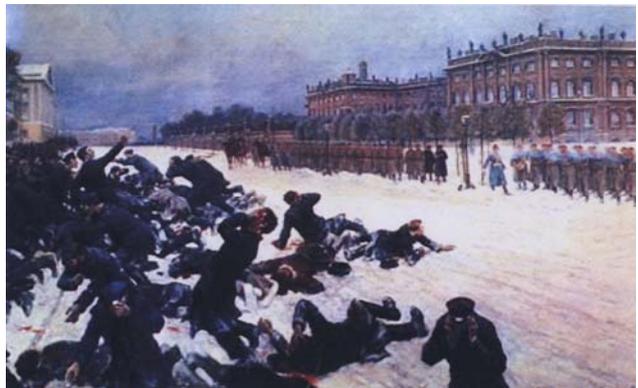
明石は、ロシア内外の革命グループとのネットワーク作りを充実させ、7月末、シリヤスクと共にスイスに行き、ロシア社会民主党のレーニン、プレハーノフ、ユダヤ系の革命組織、アルメニアの民族運動家たちと工作し、シリヤスクの助言によりロシア革命派を大同団結させて、反ロシア闘争を大同団結させることに成功した。

明治38年1月9日、サンクトペテルブルグで、ロシア正教会祭司のガボン神父の

率いる6万人もの請願行進がロシア皇帝宮に向かった時、政府は軍の発砲を許可し、千人からの流血大惨事「血の日曜日事件」が起きた経緯となる。



血の日曜日事件



露都流血事件

ロシア国内では皇帝打倒(反ツアー)革命の火が燃え上がり、5月には日本海戦でバルチック艦隊が壊滅し、6月にはロシア海軍最大の戦艦「ポチョムキン」(1905年戦艦ポチョムキンの反乱)で水兵の反乱が起き、ロシアの革命気運は高まり、皇帝の親衛隊に火がついたのである。明石は同月武器弾薬の購入を始め、その件を現代訳・前坂俊之著・『落花流水』から抜粋する。

《社会革命党から逮捕者が続出し、不平諸党の氣勢は一時衰えが、この劣勢をいかに挽回する^{ばんかい}か、関係者が集まって協議せざるを得なくなり、革命指導者のチャイコフスキー、シリヤクスク、ガボン、ソースキースがその調整に奔走し、その結果、革命社会党を中心に諸党らは、これに従って武装蜂起に立ち上がった。

同月、ドイツの地方でシリヤクスクは拳銃及びムマウセル騎兵銃の購入に着手、スイスからの購入はデカノージ、チェケソーフらがヴェテルリー銃を手配完了、チャイコフスキーやガボンらはロシア国内でその手配に動き、その兵器が入手したことを知らせ、諸派の劣勢挽回につとめた。

2隻の小型蒸気船「シスネ号」「セシール号」を購入し、目的はバルト海沿岸に大量の兵器を陸揚げするため、スイスで契約した銃器はバルト海方面用として小銃1万6千挺と弾丸約3百万発、黒海方面に送る分は小銃8千5百挺、弾丸百20万発であった。これらの大量の武器は、小型の蒸気船だけでは輸送できず、そのため約700トンの大型の輸送船ジョン・グラフトン号を購入した。

この船のチャーターは誰に頼むか、課題は多かったが、仲介者は日本の貿易商社、

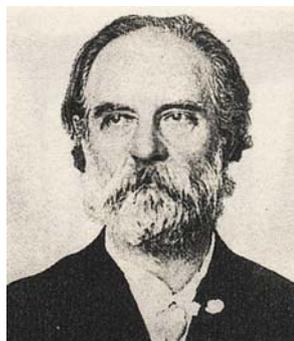
高田商会(明治大正期は三井物産と並ぶ)である。高田商会のロンドン支店長・柳田^{みのきち}巳之吉と、相談役のイギリス人スコットによる知恵と行動力を借りた。

又、8両の貨物に積んだ武器は、スイスからオランダへ搬入し、ロンドンで迂回して高田商会の取引先の「フラム号」で外洋へ積み出す手順となっていた。

話は紆余曲折で続くので省略するが、「ジョン・グラフトン号」に積載して出港した船はバルト海を北上し、ロシアのヴィンドゥで武器の一部を降し、トルネオ・ヤコブスタットでも陸揚げしたが、ラタン地方で座礁して残された武器は没収されてしまう。

こうした反乱分子を影で支えた日本の諜報活動を知ったロシア政府中枢は、大きな衝撃を受けた。この諜報活動に恐れを抱いた宮廷議会は、9月5日、ポーツマス講和条約の締結の要因の一つともされている。

日露講和後は、明石には資金は打ち切られ、同月11日に参謀本部から帰国命令が出る。山縣有朋の決断で支給され工作資金百万円の内、明石は27万円を使わずに持ち帰ったという。なんとも痛快な話ではないか。明石は身のきれいな人物と評される著書は多くあり、ただ諜報活動の内容については闇となっている。当時の百万円は、見方の幅はあるが、物価指数では7万倍となるらしい。



コンニ・シリヤクス N・V・チャイコフスキー ゲオルギー・ガボン ゲオルギー・デカノージ

ポーツマス講和条約締結の翌日、9月6日の夜、ジョン・グラフトン号は、ヤーコンブスタド市街地の北側に位置するラルスメという島の沖に到着した。迎えの船に1000挺せどのライフルと数百挺の拳銃と弾丸を積み替えると、7日朝、オーランド諸島(スウェーデンとフィンランドの間)へ向けて出発した。ところが詳しい海図を持っていなかったため、オルシェール島という小島の近くで座礁してしまう。ロシア官憲に発見され、翌8日、ジョン・グラフトン号はニュランデルによって爆破された。フィンランド人クルーたちは国内に潜入し、ラトヴィア人はヨットでスウェーデンに逃れた。・・・(略)とある。 (『明石工作』稲葉千晴著より)

資金工作の行方 『正論』平成16年12月臨時号「日本海海戦と明治人の気迫」・「明石元二郎なき平成日本への提言」佐々淳行著をみる。

《日本の資金が参加諸党に渡り、明石やシリフスクは武装蜂起のための武器調達に乗り出す。しかし、この武器蜂起は、ペテルブルグのエスエル党員がスパイの密告で大量に逮捕されて一時壊滅状態に陥り、武器調達も難航したことで当初計画の6月には間に合わなかった。8月に日露講和会議の開催が決まると、明石は講和交渉を日本有利に進めるための切り札として武装蜂起を急いだが、用意した小銃約2万5千丁と弾丸4百20万発の大半の輸送に失敗して、8月末のポーツマス講和条約に間に合わずに終わってしまう。明石や日本の資金がどれだけ関わっていたか、不明であり賛否両論はあるが、日本の資金に支えられた反帝政党派の活動が革命機運を煽り、日本海海戦でのバルチック艦隊壊滅と共にこの不安定な世情が、ロシアを講和へと向かわせる要因となったことは間違いない。・・・参謀次長の長岡外史は「一人で一個師団どころではない働きをした」と明石を評価しているが、まさにその通りであろう》と述べている。

シリヤクスについて、彼は元ジャーナリストで、フィンランドのスウェデン語新聞の特派員として米国に渡り、1894年から2年間あまり日本に滞在していたことがある。その間「桃太郎」をスウェーデン語に翻訳し、『日本研究と概観』という著書も出している。この人物に出会えたことは、明石と日本にとって幸運なことであった。



右の写真・ヤーコプスタドにあるジョン・グラフトン号の記念、

ヤーコプスタド沖オルシェール島、フィンランド側にある。(『明石幸作』稲葉千晴著より)

日露戦争に勇気づけられたポーランド、フィンランド 1772年にプロシア、オーストリア、ロシアによる第1回のポーランドが分割され、国土4分の1を失い、1893年には3分の1を失い、1896年に国土の全てを失った。ポーランド祖国の回復の運動が進められていた矢先、丁度この時期に日露戦争が勃発し、これを契機として彼らの運動は勇気づけられ、ポーランドはロシアと西欧州に位置している関係上、ロシアの革命分子たちと、海外連絡分子の中継地となっていた。そのため彼等は武力弾圧に反露気運が高

まってゆくのである。当時ポーランド人程、日本の勝利を喜んだ国民はいないと云う。

フィンランド人もまたロシアの敗北を切望し、ロシアの連戦連敗が伝わると、歓喜と勇気百倍となった。フィンランド人は、日露戦争のロシアに及ぼす影響を一番よく利用して戦った。森林を利用したゲリラ作戦で、銃を担いでロシア軍に対抗し、弱点に乗じて頑強に抵抗したのである。日露戦争に於ける日本の勝利はフィンランド人に多大な影響を与えたのである。フィンランドに於いて、奉天の戦いの敵将クロパトキン軍を打った第一軍司令官黒木大将の名にちなんで、「クロキカラー」と名づけた商品が売り出されたと云う。

その他、中国の孫文、ベトナムのファン・ボイ・チャウ、インド、トルコ等のアジアの日本の日露の勝利は、列強の圧迫を跳ね返す勇気となったのである。

『レーニン全集』8巻・「旅順の陥落」の記述 この記事は明治38年1月初め、レーニンが203高地・旅順は陥落に基づいて、ボルシェビキの機関紙『フペリョード』第二号に著し、1905年1月14日に記載を抜粋する。

《「旅順は降伏した。この事件は、現代史上の最も大きな事件の一つである。昨日電報で文明世界の隅々に伝えられたこの数語は、圧倒的な印象、巨大で恐ろしい破局、言葉では伝えがたい不幸の印象、を呼び起こす。巨大な一帝国の精神的力が地に落ちる。・・・旅順の陥落は既に早くから予見されていたし、人々は既に早くから口さきで誤魔化し、用意の文句で自分を慰めてきた。

この敗北は、あれほど神秘に包まれた、見たところ少年のように若い、きのう文明へ呼びだされたばかりの新世界によって、くわえられたのである」。ゆるぎない強力なツァーリ（皇帝）権力の威信と、切り離し得ないように結びついていた。この破局、全世界の資本主義的発展が異状に促進された。ブルジョアジーは、このような促進がプロレタリアートの社会革命を促進するものであることを非常によく、余りにもよく知っており、苦い経験によって知っているからである。・・・。

アジアの諸民族を搾取するという、長い年月によって神聖化された古来の権利を守った。日本が旅順を取戻したことは、反動的なヨーロッパ全体に加えられた打撃である。ロシアは6年の間旅順を領有し、幾億、幾十億ルーブリを費やして、戦略的な鉄道を敷き、港をつくり、新しい都市を建設し、要塞を強化した。この要塞は、ロシアに買収され、ロシアに奴隷的につかえているヨーロッパの多数の新聞がみな、難攻不

落だとして褒め称えたものである。

ちっぽけな、これまで誰からも軽蔑されていた日本が、8ヶ月でこの要塞を占領したのである。この軍事的打撃は取りかえしのつかないものである。

初めの内は日本の艦隊にまさるとも決して劣らなかつたロシアの太平洋艦隊は、決定的に壊滅させられた。・・・1万人もの優秀な海兵隊を失ったこと、一つの陸上軍をそっくり失ったことである。日本軍は、遼東半島全体を完全に占領し、朝鮮、中国、満州に圧力を加えるための測りしれない重要性をもつ拠点を獲得しようとしている。この重砲力が沙河に到着すると、日本軍はロシア軍主力に対して圧倒的に優勢となるであろう。完全に制海権をにぎり、ロシアの一軍を全滅させた今では、日本軍はロシア軍よりも二倍も大きな増援軍を送るであろう。日本軍の優秀な砲兵力の全量は、要塞戦に使われていたにも係らず、日本軍は今までロシアの將軍たちを続けざまに撃ち破ってきた。

旅順の陥落は、ツァーリズム（絶対君主制）の諸々の罪惡に最も大きな歴史的総決算の一つをつけるものである。農民大衆の蒙昧、無知、無学、萎縮は近代技術が要求すると同様の、高い質の人的材料を必然的に要求する近代戦において、進歩的な一国民とぶつかった時、恐ろしい程あからさまに現れた。・・・。（略）

小説『坂の上の雲』に明治37年、明石はジュネーブにあったレーニンの自宅で会談し、レーニンが率いる社会主義運動に日本政府が資金援助することを申し出たとあるが、2人の関係はロシア側の資料では確認されていない。この話は日本の巷には流れているが、レーニンとの会談の有無については判らないと云うが真相らしい。



レーニンの有名な演説・ロシア革命前夜

第9章 日露戦争の概観と乃木神話

日露開戦・序盤

明治37年（1904）2月4日、日本は御前会議を開き、ロシアとの交渉を打ち切る事を決議した。2月6日、栗野慎一郎駐露公使がロシアへ国交断絶を通告し、外務大臣小村寿太郎から栗野公使（駐露公使）に伝えられ、栗野公使からロシア外相ラムスドルフに伝達された。同日、小村外務大臣はローゼン駐日露国公使を外務省に呼び、外交関係断絶を通告した。

国交断絶の事実は国民には伏せられていたが、2月8日夜、小村外務大臣が各新聞代表を外務省に呼び、交渉決裂の経緯を知らせ、翌9日の新聞にその記事が掲載されて、日露開戦を国民が知る処となる。

明治37年2月9日午前0時28分、日本海軍は、ロシア海軍旅順艦隊（第一太平洋艦隊）に攻撃を開始、正午過ぎ指令長官、東郷平八郎率いる連合艦隊主力艦は、旅順港外のロシア艦隊に攻撃を開始し、ロシア側も艦隊及び旅順要塞から砲撃で応戦、日露の双方に艦船に被害を出した。ロシア巡洋艦アスコリドは、後部艦橋上部を切断、砲門破損を受けた。



栗野慎一郎駐露公使



ウラジーミル・ラムスドルフ外相



ローゼン駐日露国公使・駐米大使

明治37年2月10日、日露戦争開戦

両国の宣戦布告以前に、即ち2月9日0時に日本側より戦闘行為は始まっていた。この日本の宣戦布告前の攻撃は、背信・違法行為とロシア側から騒がれたが、日本の旅順奇襲は合法的行為で、ロシアの軍事的な怠慢に乗じての奇襲に過ぎず、ロシア側の無防備であって日本側の背信行為ではない。

「開戦に関する条約」ができたのは、1907年10月18日、ハーグ平和会議で「宣戦布告に関する条約」が署名された。日本は1911年11月6日、批准となる経緯となる。この国際条約での宣戦布告の効力は、相手国が受理した時点で発生する

と定められ、しかし当時は殆んど尊重されず、第一次世界大戦後に国際連盟が改めて確定となっているのである。旅順奇襲を不法とするロシア政府の国際的な宣伝をそのまま鵜呑みにした結果、生じたものである。イギリスの『タイムス』紙が論じたように、「今回の開戦の主原因はロシアが清国との満州撤兵条約に違反して、不法な満州占領を継続していることに原因があって、そのロシアがこのような主張をできる立場にはない」とロシアの主張は国際的に一蹴されたのである。

そして、早くも翌々日の10日、イギリスの新聞『タイムス』は旅順のロシア当局の発表として「日本軍の攻撃によって2隻の戦艦レトヴィザンとツェザレヴィチ、巡洋艦バルラダも損傷した」と報じた。同日アメリカの新聞『ニューヨーク・タイムス』も「日本の優位が非常に増大したのは明白」であると報じている。一方、ロシア同盟国フランスの新聞『ル・タン』は同日の紙面で、日本軍による宣戦布告前の攻撃を批判し、「戦争を望んだのは日本」だと断じた。当時の新聞は、自国にとって有利な報道に密接に結びついていた。

主な戦闘場面を観る

2月24日 ロシア海軍港旅順口に日本軍は廃船を沈めて、ロシア軍艦の出入りを阻止する作戦に出た。(米西戦争で秋山真之が見た作戦、7章で述べた) この戦いを「第1次旅順港口閉塞作戦」と呼ばれる。しかし、ロシア軍の反撃により、日本軍の船は旅順港に入る前に次々沈められ、作戦は失敗に終る。



旅順口に沈められた閉塞船(『地図で知る日露戦争』武揚堂より)



広瀬武夫中佐

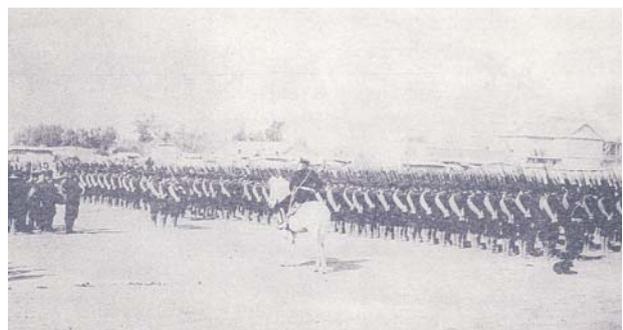
3月27日 「第2次旅順港口閉塞作戦」を敢行したが、「軍神」とされた海軍少佐広瀬武夫他、多数の犠牲を出し失敗に終り、作戦参謀の「閉塞ノ成否ニ拘ラズ、一面ニハ極力旅順口ヲ封鎖スルト共ニ、一面ニハ陸軍ト共同シ、以テ遼東方面ニ於ケル海陸ノ敵ヲ殲滅セントスル」との方針は変わらず、3度目の閉塞作戦が決行された。

4月30日 「鴨緑江の戦い」(現中朝国境) 日本第1軍は、2月から4月にかけて、朝鮮半島を北上して、4月末には韓国と清国との国境にあたる鴨緑江を守備するロシア軍と戦闘状態に突入、日露に於ける大規模な陸上戦が始まる。

開戦直後2月12日、日本は朝鮮半島中部の仁川(インチョン)から西南約30km離れた港町に上陸し、その軍事行動による、「日韓議定書」(日本・朝鮮との協約・軍事上必要な土地を日本が収用することを認めさせた)の調印を強制し、これより先満州を目指しロシア軍はそれを阻止する鴨緑江沿いに陣地を作り待ち構えていたが、4月29日から5月6日の「鴨緑江の戦い」で、第1軍4万余人、ロシア満州軍東部兵団3万余人と交戦し、日本軍はロシア軍の陣地を突破して鴨緑江を渡河に成功した。この戦いで、日本の軍事力の記事が『タイムス』掲載され、欧米に日本の力が評価されて軍費公債募集(第11章高橋是清参照)が達成される勢いとなった。「鴨緑江の戦い」後、日本軍第1軍は北上しロシア軍の拠点遼陽(遼寧省)に迫って行く。

5月3日 「第3次旅順口閉塞作戦」 第3次閉塞隊が旅順湾口に突入するが失敗に終る。『タイムス』紙は「第3回の閉塞作戦」に於ける日本海軍の勇猛さを伝えている。

5月25日「南山の戦い」 緒戦からの日本軍は、満州のロシア軍を南から追い詰めて叩く作戦構想であったが、5月5日、遼東半島西側に上陸を始めた第2軍は、25日に金州城を占領し、翌26日、早朝より行われた南山攻撃では、巾5kmの狭い丘に立て籠もるロシア軍の塹壕陣地を攻めあぐねた。30日、日本軍は4000人の死傷者を出し漸く金州城と南山・大連を占領に至る。この状況下に旅順要塞とロシア本国との電信は切断され、日本軍の作戦は予定通り進行し、南山は陥落したが、塹壕陣地を攻撃する戦法は甚大な日本軍の死傷者を出す。この事実を日本陸軍参謀本部は見逃し、以後、第1次世界大戦前の「塹壕戦」を10年先取りした戦いとなった。



5月4日コザック兵第1ボオルガ連隊を閲兵するニコライ皇帝

奉天に於けるロシア軍シベリア狙撃隊

6月15日「得利寺の戦い」 旅順に籠もっていたロシア軍を援護する為に得利寺陣地を構築するシベリア第1軍団と、日本陸軍第2軍の間で激突が起きた。日本軍が金州・南山を占領したことにより、ロシア主力軍は、旅順要塞の二個師団・ロシア太平洋艦隊と切り離された。これと合流するスタケリベルク中将率いるシベリア第1軍団が南下、得利寺付近に陣地構築を始め、大本営から敵の陣地構築が出来上がる前に、攻撃命令が出た。日本軍3万3千とロシア軍4万が衝突、決着は容易につかず、日本側の死傷者1163名を出し、ロシア側2700名を出し、捕虜400名となる。日本第2軍は遼東半島を北上し、朝鮮半島から北上した第1軍と、新たに編成された第4軍と遼陽に向けて進撃した。

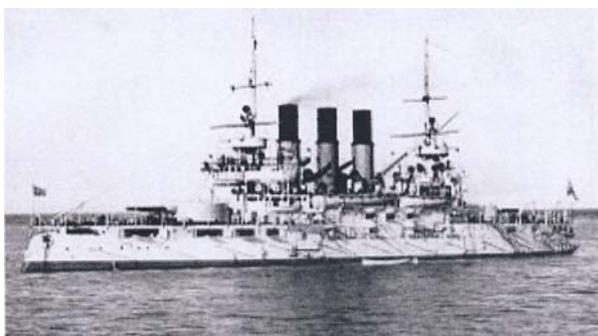
8月10日「黄海海戦」・8月14日「蔚山沖海戦」

連合艦隊は開戦以来、旅順口に8回の攻撃と、3回にわたる閉塞作戦を実行したが、ロシア旅順艦隊は依然として旅順港に戦力を保持していた。日本側はバルチック艦隊と旅順艦隊と合流することを恐れ、陸海軍共同で旅順要塞に攻略計画を進めていた。7月末には第3軍は旅順要塞に進軍、8月7日、要塞全面の大狐山と小狐山に砲撃開始、これに呼応し同日、海軍陸戦重砲隊からも旅順市街へ射撃が開始された。

9日にはロシア軍艦レトヴィザン(12700トン・全長117、85m)に砲弾を命中、商船3千トン撃沈、旅順艦隊はウラジオストクへ脱出を模索、報告を受けた東郷平八郎は、外洋へと旅順艦隊を誘導した。旅順艦隊は戦闘を避け、南東へ逃走、2時間後第1戦隊は旅順艦隊に攻撃を開始(2回目)、午後6時40分頃、旗艦ツエザレウイチは舵不能となり、味方艦に突入し、旅順艦隊は混乱に陥った。旅順艦隊は戦艦5隻と巡洋艦1隻は旅順港に帰還し、その他の艦船は膠州湾、芝罘、上海、サイゴン等に敗走したのである。一方、黄海海戦の報告を受けた上村彦之丞中将率いる第2艦隊は、旅順よりウラジオストクに逃走する旅順艦隊を待ち伏せし、14日午前5時、第2艦隊第2戦隊は蔚山沖において「蔚山沖海戦」始まる。午前8時22分、戦艦リュウリク艦を残して北方へ逃走、午前10時、旗艦出雲の砲弾欠乏により蔚山沖海戦は幕を閉じた。

8月19日 中盤「第1次旅順総攻撃」 旅順港のロシア軍要塞は、1904年2月から5月にかけての海戦を経ても、旅順艦隊は撃滅できなかった。やがて陸軍に旅順攻略の命令が出て、乃木希典將軍率いる3軍は6月に遼東半島に上陸し、ロシア軍は旅順攻囲作戦展開して攻撃に備えた。

旅順攻撃の策略は、「作戦上なるべく速やかに旅順を攻略する計画を要す」とされ、バルチック艦隊が旅順口に入る前に、完了しなければならない、との海軍側の強い要望であった。参加兵力5万7百余人中、8月19日から24日の間、二竜山と東鶏山間方面総攻撃を行った。この間日本側の死傷者1万5千8百余人の損害を出し、この攻撃は兵力不足、銃器準備不足、敵の情報と状況が判らないままに第1次旅順総攻撃を開始したが失敗に終わった。第3軍の行動は、旅順攻略後、満洲軍主力部隊と合流計画となっていたが、第1次の攻撃失敗は日本陸軍の遼陽・奉天の戦場が、ロシア軍と対峙する形ちとなり、陸戦に大きく影響が出てしまったのである。



ロシア軍艦レトヴィザン、後日本海軍戦艦「肥前」となる 黄海海戦 (写真財団法人三笠保存会蔵)

8月28日「^{りやうよう}遼陽会戦」 北上を続ける日本軍は、第1軍・第2軍・第4軍が遼陽目指し、遼陽は交通の^{かなめ}要、ロシア軍もこの地で陣地構築して日本軍を待構えていた。日本軍兵力13万人、ロシア軍22万人が対峙し、8月26日、右翼の日本軍第1軍が攻撃開始した。第2軍、第4軍は遼陽の南側のロシア軍陣地を攻撃したが、「^{しゅざんぼ}首山堡」(148m高地)からロシア軍反撃され、大きな損害を出した。



首山堡

遼陽南東の高地から砲撃する第1軍独立野戦砲兵

8月31日、第1軍は、遼陽付近の太子河を渡河し、ロシア軍の奉天への交通路を遮断した。これを見たロシア軍も太子河を渡河し、遼陽の東北に移動してその動きに第1軍は遼陽東北方の高地、「^{まんじゅうやま}饅頭山」を確保、これによって露軍はシベリア鉄道の遮断を恐れ司令官クロパトキンは北方へ退却し、9月4日、一斉に奉天方面に撤退した。

これに対し日本軍は、将兵の損害・弾薬の欠乏のため、ロシア軍の追撃を中止した。日本軍死傷者2万2千、ロシア軍の死傷者は2万5千となり、当初の目標「ロシア軍の殲滅」であったが、この戦い後、膠着状態に陥ったのである。

10月10日「沙河会戦」 遼陽を占領した日本軍は、兵員・物資の補給に苦しみながら、ロシア軍は態勢を立て直して反撃に転じ、10月4日、ロシア軍は奉天から大兵力を南下させた。意表を突かれた満洲軍総司令部は、ロシア軍を迎え撃つか、撃つて出るか、意見が分かれ10月8日夜半、ロシア軍の攻撃が始まり、「沙河会戦」（遼寧省瀋陽）が始まる。



塹壕の日本軍（ウィキペディアより）

軍使を護衛するロシア軍コザック騎兵 防衛研究所所蔵

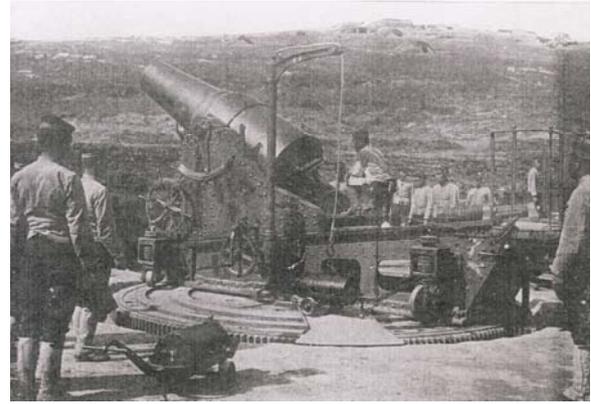
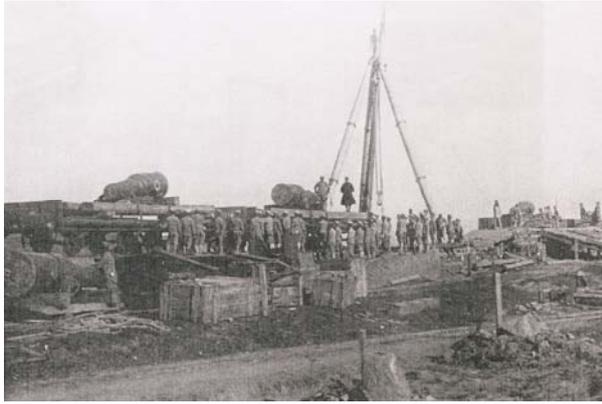
各地での激戦が展開され、10月12日、第4軍が三塊石山^{さんかいせきざん}のロシア軍に夜襲をかけ、同陣地を占領、両軍の均衡が崩れる。後退するロシア軍に、満洲司令部は15日、第4軍を中心に沙河河畔の丘陵、万宝山を占領したが、ロシア軍は翌16日に反撃に転じ万宝山を奪回された。

10月18日、満洲総司令部は、沙河南岸に陣地を築いて防衛体制を固めることを決定する。同月旅順総攻撃の日本軍は兵員補充と弾薬の補給する余裕がなく、ロシア軍も留まり、両軍は沙河を挟んで、翌年春まで対峙となる。沙河会戦に於いて日本軍12万800人、戦死者4099人、戦傷者16398人、ロシア軍22万1600人、戦死者5084人、戦傷者30394人・行方不明者5868人となっていた。

10月26日「第2次旅順総攻撃」 明治37年10月26日、第2次旅順総攻撃開始、攻撃目標は、松樹山砲台から東鶏冠山砲台の間にあるロシア軍砲台（旅順口の艦船を攻撃・地図118頁参照）や堡壘を奪い、劉家溝の北方から毅後軍副營の北方に至る一帯の高地を占領する目的としていた。参加兵力4万4千余中、戦死1092名を出し、第2次旅順総攻撃は失敗に終わる。この総攻撃中に、内地より搬入した28センチ砲を

観測点に203高地に設置した。直径28センチの砲と海軍砲で港内の艦船、港湾施設を砲撃、港口から榴弾（炸裂弾、海岸に固定し艦船を攻撃）を打ち出す大砲となる。

これは内地から解体して現地へ搬入して組み立てたもので、第3軍には大砲砲撃の専従部隊「陸戦重砲隊」が加わっており、砲撃はこの部隊と陸軍砲兵部隊と共に担っていた。ロシア軍の砲台崩壊、火薬庫の爆発をさせたが、しかし、松樹山砲台、二龍山砲台、東鶏冠山北砲台は外濠に守られ攻略できなかった。



明治37年9月・干大山東28cm榴弾砲取り付け工事 10月1日王家甸西南凹地28cm榴弾砲・重量10、758屯、口径280mm、最大射程7800m（『日露戦争PHOTOクロニクル』溇標の会編纂より）

11月26日「第3次旅順総攻撃」 明治37年11月26日、第3次旅順総攻撃が始まる。第2次総攻撃が失敗に終わった後も、第3軍は次の総攻撃によって旅順の攻撃に手を緩めなかった。この年、明治37年(1904)10月半ばにバルチック艦隊がロシアのバルト海沿、リバウ港からウラジオストクに向けて出港情報が日本軍に届いていた。バルチック艦隊が日本近海に到着する前に、参謀本部は旅順太平洋艦隊を壊滅させたい事情に切迫していた。27日、28cm砲弾400発、15cm砲弾150発が命中し、厚壁を破壊したが、しかし、犠牲者が多いため、翌日27日に攻撃目撃が変更された。

新たな目撃は、203高知を奪うこと、この高地を占領すれば、ここより旅順港内より、ロシア旅順艦隊を攻撃することができる。この作戦は以前から主張されているものであったが、海軍と第3軍と大本營の意志統一が進まなかった経緯となっていた。

11月14日、203高地主攻(集中の総攻撃)に固執する参謀本部と御前会議で「203高地主攻」を決定するが、満州軍総司令官大山巖元帥はこれを容れず、総参謀長の児玉源太郎大将は、10月までに観測地点砲撃で、ロシア旅順艦隊の軍艦機能は失われたと判断し、艦船への砲撃を禁じた。この様な上層部の意見の食い違いは、乃木

と第3軍を混乱させ、結論として第3回総攻撃案は両者の意見を全部取り入れた折衷案となった。^{せつちゅう}
『地図で知る日露戦争』武揚堂より



203高地頂上から旅順港を遠望 ウィキペディアより

11月29日、新着の第7師団(北海道部隊)が投入され、翌日、西南堡壘を占領したが、しかし数時間後、ロシアの反撃により奪還されてしまう。11月29日、煙台(遼陽の北東)から児玉満州軍総参謀長が12月1日に到着した。児玉は203高地の状況を勘案し、大山満州軍総司令官に電報を打ち、北方戦線へ移動中の第8師団(東北地方)の歩兵第17連隊を南下させるよう要請した。

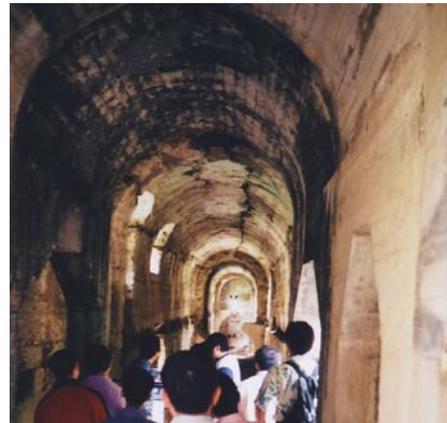
12月4日、早朝から203高地攻撃開始、翌5日午前10時、西南堡壘全域を攻撃し制圧した。12月5日午後より態勢を整え、東北堡壘へ攻撃開始、22時にロシ

ア軍は撤退し203高地を完全に占領した。203高地陥落後、観測所からの日本軍の砲撃により、ロシア海軍各艦は次々に沈没したのである。

この攻撃による日本軍の戦死5,052名、負傷11,884名。ロシア軍も戦死5,380名、負傷12,000名近くに達した。12月10日、第11師団による東鶏冠山への攻撃開始し、18日、日本軍工兵が胸壁(身を守る壁・壁体)に取り付けた2トン爆薬による爆破で崩壊、ロシア軍の甚大な被害がでた。

28日、第9師団による二竜山堡壘への攻撃が始まり、胸壁を3トン爆薬で破壊、ロシア兵300名が生き埋め、双方との射撃戦となる。しかし歩兵36連隊が後方に回り込みだすと、それを見たロシア軍守備隊は撤退し、29日3時、遂に二竜山堡壘の占領に成功した。第9師団の戦死237名、負傷953名、ロシア軍も300名の死者を出した。

31日、第一師団による松樹山堡壘へ攻撃開始、ロシア軍守備兵、208名のうち、坑道爆破で半数が死亡し、占拠した二竜山堡壘からの援護射撃もあり、ロシア軍の後方を遮断することに成功し、ロシア軍は11時に降伏した。



203高地堡壘内側、^{にれいざん}爾靈山日本軍爆破口・海拔203m 堅固な内部と大きさに驚く・2002年筆者撮る

1月1日、未明より虎頭山や望台への攻撃を開始、ロシア軍の軍備の枯渇、東北方面の主堡壘も落ち、ロシア首脳部も戦意を失い、16時半に降伏を伝えてきた。5日、旅順要塞司令官ステッセリと乃木は水師營で会見、こうして旅順攻囲戦は終了し、日本軍の投入兵力は延べ13万名、死傷者約6万名に達した。

乃木希典考察論を観る

『明治文学全集』49「ウォシュバン・他集」より。S・ウォシュバンは米国従軍記者で来日、乃木の軍司令部に従属した。戦後『乃木』を著作、旅順口攻略から戦後の明治天皇崩御、

そして乃木の殉死までの従軍記となる。『乃木』の「風声鶴唳」の一部から抜粋する。

《(略)・・・露軍は乃木大将が何れの方面(奉天会戦時)に自由に活動しつつあることは知っていたが、果して何処にこれを待機すべきか、戦闘後、数日を経るまで、少しも知ることが出来なかった。戦闘開始の瞬間から、乃木大将の名は、露軍の翼端から翼端(隊のはし)まで恐怖の響を伝えていた。乃木軍が大山軍に合体したことは、全ての露兵に判っていたが、何処に撃って出るかを知るものは一人もいなかった。

シベリア草原の雑兵や、ヴォルガ河(ロシア西部を流れ)や、遠きはニーヴァ河の流域から抜き出されて来た農兵等には、乃木という人間は悪霊の権化か、戦の魔神のように思われていた。陣屋の爐辺夜話などには、乃木軍の兵は血の鬼か火の鬼で、ただ死を求めて、敵と組打しなければ止まぬものとなっていた。旅順包囲戦の物語となると、誇張しても誇張しきれないが、話は更に拡大されて、乃木大将とその将卒は、残虐に浸り増悪に染まって、死を怖れない超人的な怪物であると。

一旦火ぶたを切ったならば、一人残らず斃れるまで襲撃を止めない乃木軍だというのが、露軍全員の考にあった。旅順口瞰射(高所から射撃)の地を得んがために、1万5千の兵を犠牲とした203高地の物語は、露軍の伍列の間に幾度となく繰返され、或る時は一回の強襲に日本軍の歩兵がほとんど皆殺しになってしまい、弾丸が尽きても退却を肯んじない。踏み留まって石礮を投げつけつつ、一人も残らず戦死した話も出たことであろう。

軍人として、また軍隊として、この奉天に於ける乃木大将とその部下ほど、恐れられたものは絶無だといっても過言ではない。会戦当初から、襲い来るのは乃木その人に外ならならぬ恐怖が、露軍の陣営到るところに蔓草が張り、幾多流言はこの鬼神を欺く怪物接近のお伽噺を誠やかに幾多の陣営に伝達して、又幾度か風声鶴唳(風の音や鶴の鳴き声に驚き敗走)となって消えるのであった。

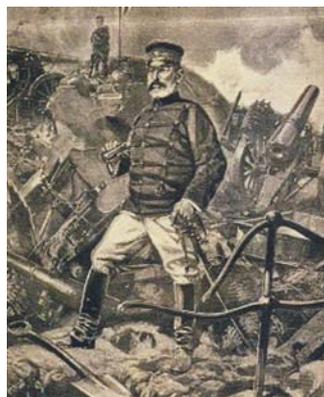
しかし今度はいよいよ大鉄槌が振りかかった。音に聞こえた日本第3軍が、既に彼の右翼を迂回して、全速力を以ってその退路を遮断しようとしているという事実は、野火の如く、稲妻の如く全露軍の頭上に閃いた。いよいよ襲撃が来るぞとなると、乃木大将が何処にどうして討って来るかは疑う余地もなかった。彼のもの凄き山砦の包囲戦を経て来ては、野戦の如きを物の敵の数とも思わない旅順口の老兵が、露軍の側面に接触して、突如として出現したのである。

そして露軍の知らぬ間に、既に深くその側背に迫って、第一回の突撃に、露軍の防

禦工事は、紙屑の如くに揉み潰されてしまったのだ。日本軍兵士は巧みに覚えたロシア語の喊声^{かんせい}を揚げ、日本語の「万歳」の声も打ち交えて、「我等は旅順の乃木軍だぞ」と叫んで追撃した。この戦慄すべき喊声^{かんせい}が露軍の側面に鳴り響くと同時に、勝敗の数は既に決していた。絶望は火の如くに蔓延して、やがて全軍こぞっての退却となった。・・・(略) 》と。

この記述で見えてくる事は、乃木將軍の鬼神の如く恐れた露軍は、当時の露軍全軍が乃木將軍の行動が怖れられていたことが判る。乃木は戦地に於ける目に見えない魔力を持った殺人鬼の將軍に映っていたに違いない。

乃木將軍水師口会見 乃木凡將論に付いては他の書に譲るとして、乃木について少し述べる。明治38年1月5日、水師營の会見に先立ち、明治天皇は山縣有朋を通じ乃木に対し、ステッセリが祖国のために力を尽くしたことを讃たえ、武人としての名誉を確保するように要請した。これを受けて、乃木はステッセリに帯剣を許し、武人としての名誉を重んじ、写真に付いては、再三の要求に拘わらず一枚のみの写真とした。ロシアの『ニーヴァ』が乃木の英雄的な挿絵を掲載している。乃木に対する世界各国から賛美の書簡が寄せられ、乃木の武功と、ロシア兵に対する寛大処置が世界的に評価されたのである。



水師營会見・中央二人が乃木とステッセリ 『ニーヴァ』挿絵乃木將軍 ステッセリ・1890頃

乃木希典人物像について 日清戦争の戦績から野戦の得意な將軍と国民に評価されてきた。日露攻略戦時、乃木は56歳、野津64歳、黒木61歳、奥59歳、乃木は一番若かった。旅順攻略戦が難航すると、東京の乃木邸に投石されたこともあった。その後、水師營会見などの美談が喧伝されたことや、奉天会戦に於ける活躍から、凱

旋帰国時には好印象で国民に迎えられた。

歴史は下り、昭和43年の世、司馬氏の国民的に愛された小説『坂の上の雲』に、この旅順攻囲戦で日本軍が膨大な戦死者を出したのは、第3軍司令官の乃木と、参謀長の伊地知幸介の無為無策が原因とする考えに基づいて、乃木凡将説を描いた。司馬氏の所謂^{いわゆる}凡将説は読者に受け入れられ、この考えに基づく乃木凡将説書籍が出版されているが、この凡将説の元とされる書籍は、谷寿夫著の『秘密日露戦史』が昭和41年に刊行されたことが要因とされる。しかしこれらには誤解・偏見も多くみられ、公平な評価とは言い難く、その評価は現在も賛否両論があつて評価は定まっていない。

「乃木將軍は軍神か愚将か」 福田恆存^{つねあり}著『中央公論』昭和45年12月、臨時増刊号

はしがきに、《・・・私が司馬遼太郎氏の『殉死』や福岡徹氏の『軍神』に疑問を感じ、乃木將軍擁護論を書く気になったのが、決して単なる思い付きでない事は諒解して頂けよう。尤も司馬氏の『殉死』だけだったなら、これを書く気にならなかったかも知れない。司馬氏は將軍を軍人、戦略家としては否定しながらも、その宿命的な生涯に同情を以って書いている。そればかりではない。南山攻撃において日本軍は始めてヨーロッパ人の何たるかを知ったと述べ、日露戦争、旅順攻略戦に日本と西洋との出会いの運命を感じ取っている。・・・私の関心は前に述べた様に旅順攻略戦にあり、その歴史的意義にある。乃木將軍は悲運の人であり、悲運の国の象徴である。將軍が後に軍神として祀られる理由の最大なるものはそこにある。

ところで、將軍は福岡氏の言う如く、一つ一つの戦略について見る時、果たして愚将であったか、また司馬氏の言う如く「乃木ほど軍人の才能の乏しい男もめずらしい」人物であったのか。勿論、私も將軍を智将とは思わない。確かに兎玉大将の方が智将の名に値する軍人であったろう。が、旅順攻略戦における將軍の行動について私の調べた限り、將軍を愚将と呼ぶ事は出来ない・・・(略)》

「合鍵を持った歴史観」の結語に (同に続く) 《近頃、小説の形を借りた歴史読物が流行し、それが俗受けしている様だが、それは全て今日目から見た結論であるばかりでなく、善悪黑白を一方的に断定しているものが多い。が、これほど危険な事は無い。歴史家が最も自戒しなければならない事は、過去に対する現在の優位である。吾々は二つの道を同時に辿る事は出来ない。とすれば、現在に集中する一本の道を現

在から見透かし、ああすれば良かった。こうすれば良かったと論じる位、愚かな事は無い。殊に戦史ともなれば、人々はとかくそういう誘惑に駆られる。事実、何人かの人間には容易な勝利の道が見えていたかも知れぬ。が、それも結果の目から見ての事である。日本海大海戦における丁字戦法も失敗すれば東郷元帥、秋山参謀愚将論になるであろう。が、当事者はすべて博打を打っていたのである。丁と出るか、半と出るか一寸先は闇であった。それを現在の「見える目」で裁いてはならぬ。歴史家は当事者と同じ「見えぬ」目を先ず持たねばならない。

・・・合鍵を以って矛盾を解決した歴史というものにほとんど愛想を尽かしている。私が、戦史には全く素人の身でありながら、司馬、福岡両氏の余りにも筋道だった旅順攻略戦史に一言文句を付けざるを得なかった所以である。勿論、読者がそういうものを、一種の娯楽として読める程度にまで成熟していれば問題は無い。が、戦後の歴史軽視の結果、人々は「正史」を知らず、また歴史の読み方も知らない。その反動として歴史読物や歴史を扱ったテレビに縫^{すが}り付き、その渴^{かわ}きを癒そうとしている。歴史家のみならず、歴史小説家もその点をよほど慎重に考えねばならでであろう》と述べておられる。中々手厳しいご指摘、歴史を追っている筆者も反省いたす所存であります。

当時の要塞(堡壘)についての認識論 日本に於いては本格的な「要塞攻略の思想」が無かったことが上げられ、露軍は欧州からの要塞建設技術を極東軍港に持ち込み、旅順天然の要害の地に、ロシアは8年を費やし、セメント20万樽を使って大要塞を築いた。これらの堡壘には重層銃眼^{じゅうがん}(はざま)があつて、そこに機関銃が備えられ、地下一階と二階^{おほ}蔽うコンクリート壁厚は2m、日本軍の手榴弾等は寄せ付けなかった。

当時、参謀本部(日清戦争での経緯から)は旅順攻撃を、中小口径火砲(カノン砲)の射撃と銃剣突撃で陥落出来ると考えていたらしく、3日後には旅順に入城の予測を立てていたと伝われる。参謀本部に於いても敵側の情報収集能力の不備もあり、旅順要塞の内側の情報を全く持たず、突撃に次ぐ突撃よる事が死傷者を甚大にしたのである。

乃木3軍にはロシア側の要塞内部が全く分からず手探りの攻撃となり、参謀本部に於いても戦術に苦慮し、9月中頃に日本最大の本州沿岸に配備されていた28cm榴弾砲(旅順攻囲戦合計18門配備、28cm砲投入提案者は有坂成章少佐提案)が旅順に到着した。この砲の威力によって要塞破壊の解決の糸口を掴み、児玉の命令で28cm砲を15分間隔に打ち込^{ひる}こみ、露軍の怯んだ203高地を占領とる。

当時の乃木の作戦は、砲兵の火力で敵陣を徹底的に叩いてから歩兵が突撃する戦術は、「強襲法」と呼ばれ単純な肉弾攻撃とは別物で、当時の要塞攻略の定石であった。この作戦は第一次世界大戦のヴェルダン要塞(フランスヴェルダンの地で独・仏軍の戦い)等で踏襲されている。

一般に203高地を確保すれば、その位置から旅順港を見渡し、市街と要塞陣地の全てが視界に入り、28cm砲や15cm砲で旅順港攻撃することが出来る、旅順さえ陥落すれば総てが終わると思われる人が多いが、実際、203高地が陥落しても、ステッセリは降伏しないし、降伏に至ったのは、旅順東北正面の永久堡塁の全てが、日本軍の爆薬による地下坑道攻撃が吹き飛ばされ直後の、1月1日に降伏の使節が日本軍陣地に訪れ、やっとのことで旅順攻囲戦は終わったのである。

乃木神話の崩壊 ここで乃木將軍凡將説の出典、谷寿夫著『機密日露戦史』と、『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著から、乃木將軍と児玉総参謀長に触れる個所を抜粋してみる。

203高地攻囲戦に於いて、第3軍司令官乃木希典の「乃木神話」が生まれ、連合艦隊司令長官東郷平八郎の過度の称賛による「東郷神話」も生まれた。大正13年(1924)、日露戦争20周年に当たり、陸軍大学校兵学教官であった、谷寿夫教官によって戦略機密戦史が完成された。本著述がそれであり、戦争指導史と称せられる、『機密日露戦史』(明治百年史叢書『機密日露戦史』谷寿夫著・原書房)が、昭和41年に公刊され、学界に与えた衝撃を与えた。

『機密日露戦史』の「はしがき」に「・・・先ず当時参謀本部第4部(戦史)に在職していた沼田多稼蔵大尉(後の中将)の名著『日露陸戦新史』があり、その公刊本は、大正14年3月頃までに5版を重ねる盛況を呈していた。が、陸軍大学校兵学教官であった谷寿夫大佐が兵学教書として高度の機密戦史を著述し、谷は「・・・戦史ノ裏面ニハ更ニ裏面ノ存スルコト之レナリ。茲ニ研究スル要領ハ秘密戦史トシテ軍ガ外部ニ対シ公開セザルモノヨリ、一層深刻ニ戦争統帥又ハ高等統帥ノ真相ヲ語ルモノ、即チ秘史ノ裏面ナリ、然ルニ此裏面モ亦其裏面ヲ有ス。・・・(略)」とある。

「児玉総参謀長の南下とその活躍」 同書の「第6章旅順要塞攻城作戦指導の経緯」の部分《11月27日より28日までの状況の報、・・・総参謀長は斯く第3回旅順

攻撃意の如く進捗せず。就中203高地は直接旅順の運命を制するものにして、その奪略は実に国家の全運命を決する大事である。我軍は3回これを占領し、3回奪還せられる。即ちこの占領を確実にするため、翌29日旅順行の決意を松川参謀に示した。松川参謀は大山総司令官に「乃木將軍へ、予に代わり兒玉を差遣わす。兒玉の云う所は予の云う所と心得べしとの一札を乞う」をもって松川少將の熱心説くところ、兒玉大將は、この大山元帥の書翰を懐に、田中騎兵中佐を随えて南下の途に就いた。・・・大山総司令官は、総司令官の名を以って、第3軍の作戦を指導するため、兒玉参謀長を差遣わす。本官の名を以って兒玉総参謀長の指示に従しめられたし。・・・汽車移動中、203高地陥落の情報に接し、祝電を第3軍司令部に発した。翌1日朝食の最中、旅順より飛電(至急電報)あり。一旦奪取した203高地再び奪還されると。兒玉將軍は食事を中止し激怒した。兒玉は乃木と会見し、・・・一時軍司令官の指揮権借用を以って、貴兄の代理たる一筆の添書きを授けられ、此の時、兒玉大將の手は懐の書状に触れる所であったが、乃木大將は快諾の上、書状を兒玉大將に附与した。兒玉大將は直ちに軍参謀を集め、攻撃計画の修正を要求した。

(1) 203高地の占領を確保するため速かに重砲隊を移動してこれを高崎山に陣地変更し、以て敵の回復攻撃を顧慮し、椅子山の制圧に任じる。

(2) 203高地占領の上は28mm砲(二十八mm米榴弾砲・28cmりゅうだんほう)を以て一昼夜毎15分間隔に砲撃して、敵の逆襲に備えること。

然るに重砲隊副官奈良少佐は第1項に反対し、第2項は友軍に危険なりとし不同意を唱えたが、兒玉將軍は砲撃味方打ちを恐れずとて肯(がえんずる・うなずいて承知)んぜず。兒玉大將直ちに、豊嶋將軍に第1項の陣地変換(搬入据え付け)に要する準備時間を問い、24時間を要するとの解答を以って、これに実行を命じた。・・・。

斯くして第3軍、所期の如く愈々203高地を占領するや、兒玉大將は直ちに28mm砲を前進せしめて軍艦射撃を命じたが、豊嶋少將はこれを否認して、必ずや敵の回復攻撃の集中火に浴すべければ、徐々に鉄板を置きて砲廠(弾幕・敵弾を防ぐ建物)準備の後に応じるべしと答えしに、兒玉將軍これに耳をかす所なく、即刻射撃開始を命令した。斯くして旅順艦隊のポヘーダその他、艦船8隻は立ち所に命中、遂に沈没するに至った。兒玉大將のこの行動たる一面指揮権の問題あり。これを厳密に云えば、軍規軍律上大問題となるが、吾人は満腔の同情を第3軍に呈し、その赫々たる名誉には触れずして、只高等統帥上の隠れたる深甚(深く知る)の教訓を学ぶことの見地より、敢

えて諸君に実情を披露したに止まるを^{りょう}了とされたい。・・・。」と。

「旅順攻囲軍第一線勤務者の雑感」 「同第6章」 陸軍中将 志岐守治(中佐・第11師団の大隊長)口演部分、《(1)(2)略、(3)・・・旅順第1回の総攻撃は、8月18日から19日、20日と3日間の連絡砲撃により開始された。第1回の強襲的攻撃は無論効を奏するものと感得して居た。平時における参謀勤務の不充分であった。又、何人も砲撃の成果が如何な程度の者かを承知して居なかった。当時として第1回総攻撃の強襲を実施した事は蓋し^{けだ}正当な決心であったと信じる。(4、略)

(5)・・・第3軍では総攻撃の度毎に「補助憲兵」も各隊に予定させ、そして旅順陥落時の使用に準備させた。その目的は正しく日本軍の^{りやくだつ}掠奪、その他の暴行を取り締るにあつたが、我々は乃木式だなど、軽蔑の念を以ってこの命を実施したのであつた。凡そ人を死地に狩り立てるに際し、果たして人心を得た^{しよち}所置であろうか。二者共に戦争を物質的視し、日本軍の忠勇を過信した戦場心理を無視した好一對である。

勝ち戦にはこれでもよかろうが一旦負け戦となったら大変だ。将校たり、その幕僚なる者は心得ねばなるまい。ここに一つ弁じて置くことがある。乃木将軍もその当時は今日の人が崇拝する如き司令官ではなかつたのである。第3回総攻撃の前だったか、此度の攻撃に旅順が落ちねば、軍司令官は將に死を決して居るとの風説が伝わったことがある。然しその風説はいささかも第一戦部隊の^{とくれい}督励(励ます)にも発奮にもならなかつたのである。それはご随意とばかりに聞き流しただけである。又将軍の子供が2人戦死した如きも、今日でも大に第一線の志気を鼓舞した様に云い伝えているが全く^{きよぎ}虚偽である。・・・。」(6-10まで略)

旅順第3回総攻撃失敗と203高地攻略戦 『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・「第5章長期・消耗戦化から講和へ」、《第3軍の203高地軽視の作戦に対し、大本営は203高地攻撃を推進させる目的の下に、近い将来の作戦として計画していた樺太遠征司令官要員として、大本営付となつていた鮫島重雄中将を旅順に派遣した。工兵出身で由良要塞司令官・東京湾要塞司令官を歴任、薩摩出身で伊地知参謀長の先輩であり、且つ乃木第2師団長・鮫島近衛師団参謀長として、台湾征服戦争を共に戦つた関係もあり、第3軍司令部の説得には適任と考えられた。・・・しかし、鮫島の派遣も効果がなかつた。長岡次長の回顧録には、「鮫島中将、203高地占領の屈強なる

賛成者であった。・・・11月5日鮫島に、ご意見聞きたし、と電報を發した。鮫島の返電の要旨は、第3軍は状況の如何にかかわらず、先般来の攻撃方法を最良として実行しつつあり、各隊の士気は旺盛でなく、自分の判断でき望台(東正面堡壘の最高地)占領の目的を達するには少なくとも10日以上を要するので、先ず203高地を占領して敵艦隊の処分を急ぐのは、それ程困難とは思われないが現状では従前通りの攻撃法をとる以外にない。203高地の占領を急ぐことは師団への作戦命令に含めていないので、これを師団に強要することはできない、という趣旨のものであった。鮫島の電報を見た長岡は、もはや第3軍司令部の「改造」以外に道がないと判断して、即日満州軍司令部の井口高級参謀に長電を發した。・・・。」『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・2001年・立風書房

児玉総参謀長の第3軍直接指揮と203高地占領 同5章・《・・・「203高地は直接旅順の運命を制するものにして、その奪略は実に国家の全運命を決する大事である」(『機密日露戦史』)と、単に旅順攻囲戦のみならず、日露戦争全般の帰趨^{きすう}を決する決戦的性格を帯び始めたことによる。旅順攻囲戦に早期決着をつける唯一の可能性がある203高地の攻略が、遅延若しくは失敗すれば日本海軍の戦略は全面的に蹉跌^{さてつ}する危険性をはらみ、陸軍の北進野戦軍の作戦計画も多大の齟齬^{そご}(くいちがい)をきたし、予期される大会戦に兵力不足ゆえの敗北を喫する可能性が生じた。戦機を見るに天才的な頭脳の持主である児玉は、第3軍司令部に任せておいてはこの決定的戦機を逸する恐れが多分にあると考え、自ら203高地攻略の現地指揮をとることを決意したと考えてよいであろう。と。

12月1日、正午に第3軍司令部に到着した児玉は乃木軍司令官と密談し、乃木軍司令官は快く軍の指揮権を児玉に委任したという。乃木軍司令官自身が、もはや第3軍司令部の「指揮統率」が不可能なることを認識し、軍参謀長以下の作戦介入を防ぐためにも児玉総参謀長に指揮権を委ねたとも推測される。・・・。

5日午後2時、豊島攻城砲兵司令官は占領した203高地、西南山山頂に観測所を開設し、直ちに旅順港内に潜むロシア艦隊の砲撃を開始した。観測所開設による射撃の効果は絶大で、早くも午後過ぎには戦艦ポルタヴァの火薬庫に弾丸が命中して火災を起こし、レトウィザン、ペレスウェートは6日に、巡洋艦パルラダは7日に沈没させた。残るは観測所の死角に隠れた戦艦セヴァストポリは連合艦隊の襲撃により、1

5日頃航行不能が確認された。ここに連合艦隊は旅順艦隊の全滅を確認して封鎖作戦を解除し、各艦艇は逐次内地軍港に帰港して、修理、整備を行い、バルチック艦隊(第2太平洋艦隊)の来航に備える時間的余裕を得た。・・・。》

余話・筆者の考察として 弾幕について=乃木第3軍は3度高地を占有したが、児玉のように、占有した高地陣地に弾幕を火急に張り巡らしていない。これは野戦場に於いて土木工事となるので、工兵集団が、陣地を守る構造を造らねばならない。一般兵士では無理なことで、建造物に手慣れた職人集団(土木工・とび工・重量物据え付け工・高地地曳工等・28cm榴弾砲は10トン級となる)が必要となる。殊に重砲等の重量物搬入(修羅車・かぐらさん)の高地への引き上げは、困難に次ぐ困難の連続の工事であり、攻撃との時間との兼ね合いが勝負となる。又、これを指揮するプロの頭・棟梁が居なければ工事が迅速に進まない。この件に於いては、児玉将軍が優れた工兵集団を確保していることが判る。弾幕と重砲取り付けは児玉将軍が優れ、至難の地下の坑道堀と坑道爆発等による要塞占領は乃木将軍の高評価があってもよいと思う。筆者は建築造園石材業の生業なりわいであったのでこのイキサツの件は理解できる。

葬られた「旅順」の教訓 『検証日露戦争』読売新聞取材班・2005年

《・・・203高地目がけて山肌を駆け昇る日本兵は、ロシア軍の放つ砲弾に吹き飛ばされ、機銃になぎ倒された。多くの犠牲を目の当たりにしながら、陸軍は戦後、銃砲火力を軽視し、歩兵を中心とする白兵(軍刀と銃剣による突撃)主義を採用する。

その疑問を解く一つのヒントが、防衛庁の防衛研究所(東京都目黒区)に保管されている一冊の綴りつづの中に残されていた。日露戦争終結後の1906年2月、陸軍参謀本部が戦史を残すために定めた「日露戦史編纂綱領綴」だ。綴りには、「編纂綱領」の他に「日露戦史編纂規定」「日露戦史編纂に関する注意」「日露戦史稿審査に関する注意」「日露戦史整理に関する注意」が収められている。

満州軍総司令官として日露戦争で陸戦の指揮を執った大山巖・参謀総長が指示した綱領はわずか3頁で、「日露戦役ニ於ケル陸戦ノ経過ヲ叙述シ以テ用兵ノ研究ニ資シ兼テ戦争ノ事跡ヲ後世ニ伝フル」という目的が記されている。戦争の経過をきちんと整理し、陸軍として今後の戦術研究に役立てるという戦史編纂の理由を明確に示している。だが驚かされるのは、「史稿審査に関する注意」の内容だ。参謀本部第4部長の指

示とされ、8頁に亘って、陸軍にとって不利となる事実や失敗した内容を記述することを厳しく禁じている。その主な項目は、①各部隊間ノ意志ノ衝突ニ類スルコト、②軍隊又ハ個人ノ怯懦(おびえ)、失策ニ類スルモノ、③輸送力ニ関スルモノ、④国際法違反又ハ外交ニ影響スベキ恐アルコト、⑤司令部幕僚ノ執務ニ関スル真相——などだ。その主な理由として、①軍の内情や真相を暴露する恐れがある、②勤務上の機密を暴露することになる、③捕虜の虐待などを疑わせるなどを列挙している。

取分け、部隊や個人の失策については、「戦闘ニ不利ノ結果ヲ来シタルモノハ潤飾(粉飾)スルカ又ハ相当ノ理由ヲ付シテソノ真相ヲ暴露スベカラズ」と記されている。つまり、部隊や個人(司令官)のミスや汚点に関しては真相と真実を記述しないばかりか、脚色しろと指示していたのである。・・・。」

上記の通り、大正13年までは日露戦史の記述については、問題は起こらなかったが、翌年、谷寿夫が参謀本部第4部の幹部教育の一環として『機密日露戦史』を著したものであろう。それが昭和41年に公刊され、明治百年史叢書『機密日露戦史』谷寿夫著・公刊され、学界に与えた衝撃は大きかった。

乃木希典の復命書 「特集・日露戦争と百年後の日本」『諸君』2004年・福田和也著

明治39年1月14日、東京に凱旋した日露戦争の各軍司令官は、そのまま参内して復命書を奉読した。第3軍司令官乃木は、戦場で着けていた軍服のまま、明治帝の前に立ち、嗚咽して屢々詰まり、絶句落涙したと伝えられている。

《「而シテ作戰16箇月間、我將卒ノ常ニ勁敵(強敵)ト健闘シ、忠勇義烈死ヲ視ルコト帰スルガ如ク、弾ニ斃レ劍ニ殪ルルモノ皆、陛下ノ万歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ臣之ヲ伏奏(ひれ伏し奏上)セザラント欲スルモ能ハズ。然ルニソノ斯クノ如キ忠勇ノ將卒ヲ以テシテ、旅順ムノ攻城ニハ半歳ノ長月日を要シ、多大ノ犠牲を供シ、奉天附近ノ会戦ニハ、攻撃力ノ欠乏に因り退路遮断ノ任務ヲ全ウスルニ至ラズ、又敵騎大集団ノ我が左側背ニ行動するに当り、此ヲ撃摧(敵を打ち負かす)スルノ好機ヲ獲ザリシハ、臣ガ終生ノ遺憾ニシテ、恐懼(怖れ畏まる)措ク能ハザル所ナリ。今ヤ闕下(天子の御前)ニ凱旋シ、戦況ヲ伏奏スルノ寵遇(待遇)ヲ担ヒ、恭シク部下將卒ト共ニ、天恩ノ優渥(手厚い)ナルヲ排シ、顧ミテ戦死病没者ニ此光荣ヲ分ツ能ハザルヲ傷ム。》

(「復命書」乃木希典全集下巻)

兵の「忠勇義烈」を讃、戦死病没者を悼みながら、乃木は自らの指揮について、き

わめて「遺憾」だと、天皇の前で述べている。涙と共に、いかにも凱旋には似合わない振る舞いだが、同時にこれこそが乃木だというイメージを裏切らない。だからこそ乃木はその能力如何を超えて、「天皇に、国民に愛されたのだ」と、福田氏は語る。

旅順陥落とステッセル将軍の考察 『日露戦争を演出した男モリソン』下巻（アーネスト・モリソン、オーストラリア出身、『タイムス』極東通信員、英国擁護記事を掲載、義和団の乱、日英同盟、日露講和に裏面で活躍。尚当時の記述は『タイムス』となっている。）

《・・・旅順陥落によって日本の名は世界に轟いた。各国の新聞はロシアの覇権の失墜として一斉に書き立てた。「旅順は単なる一個の要塞ではない。これこそロシアが誇る勢力のシンボルであった。10年前、3国干渉という非道を受けた日本の悲憤は今回の旅順占領によって拭われたのである」と。

1月14日、203高地の戦死した将兵の招魂祭が水師營の高地(爾靈山)で挙行され、乃木希典は沈痛な口調で戦死者の魂に切々と呼びかける。

「嗚呼、諸子と此の光栄をわかたんとして幽明相隔つ悲哉、乃ち全軍の旅順口に入るや、諸子の忠血を以って染めたる山川と要塞とを下瞰する所を相し、先ず地を清め壇を設けて諸子の英霊を招く。希くば魂やほうふつとして来たり饗けよ」、

参列者はみな泣いた。言葉の分からない外国人までもが泣いていたのである。



203高地の忠魂碑・2002年撮る アレクセイ・クロパトキン エヴゲーニイ・アレクセーエフ

アレクセイ・クロパトキンの来歴 (1848-1925) 幼にしてパヴロヴスク兵学校、18歳にて卒業、副中尉より中尉に進み第一土其機斯坦歩兵大隊附として中央アジアに赴任。多々の戦争に従事し、1868年のボクハラ役には負傷し、露都に還るや功績を賞せられた。1877年露土戦争(露国とオスマン帝国)は、彼は参謀長として出征した。やがて日露戦争開戦時、満州軍總司令官として日本の敵手に立つ。殊に奉天の大敗後、将軍の名声甚だ振るわなかった。

エヴゲーニイ・アレクセーエフ (1843－1917) ロシア海軍太平洋艦隊司令長官、極東総督として日露戦争の原因を作った人物。1904年4月、ステパン・マカロフが戦死後、太平洋艦隊を直接指揮、陸軍の頭アレクセイ・クロパトキンと不仲、クロパトキンが陸軍総司令官となる。

余話・旅順攻撃戦の秘録 『悲しき帝国陸軍』高原友生^{ともお}著より、石原廬^{いおり}中佐本人が「子孫ニ伝フ・明治37、8年戦役・旅順要塞第1回総攻撃ノ概要」と題する記録を残されている。石原廬氏の軍歴は、『干城偉績^{かんじょういせき}』(巻之上)松本栄編・1892年に、石原廬の熊本鎮台在勤、熊本城戦歴となる。石原廬は高原友生氏の母方祖父の死後、石原廬の長男が遺稿の整理中に記録を発見した。「子孫ニ伝フ旅順要塞第1回総攻撃ノ概要」から旅順攻囲戦部分を抜粋する。

《「明治37、8年戦役 旅順要塞第1回総攻撃ノ概要」旅順第1回総攻撃ハ37年8月21日午前4時、鳳凰山ニ於テ打チ上ル^{のろし}の烽火ヲ相図ニ、全線同時ニ突撃ヲ開始セラル。是ヨリ先、軍ハ突撃用トシテ鉄条網ヲ切断スル為メノ鋏^{はさみ}、濠ヲ渡ル為メノ携帶橋ヲ各隊ニ配布ス。此日予ノ率ユル第44連隊ハ師団ノ攻撃目標タル鷄冠山新砲台ニ(第43連隊ハ大孤山ヨリ海岸ニ亘ル線ノ警戒ニ任ズ)向フ予定ナリシ。而^{しこうし}テ師団司令部ハ大孤山北麓ニ在リ、師団ノ攻撃隊長タル第10旅団長・山中少将ハ、南部王家屯北方高地ニ在テ突撃隊ノ指揮ヲナス。(攻撃目標タル新北砲台ニ来ラザリシハ何ノ意カ解スル能^{あた}ハズ)以上ノ配置ステニ決定セリ。而^{しか}モ師団長ハ勿論突撃隊長モ、参謀モ誰一人攻撃目標タル新砲台ノ地形敵状ノ偵察ニ来ルモノナシ。・・・(略)。

軍ハ19日ヨリ20日ニ亘リ全線砲撃ヲ開始シ攻撃準備ヲナセリ。敵ノ砲台ハ多少破壊サレ、敵ハ此間我ガ砲撃ニ任セ殆ド之ニ応砲セズ。破壊サレタル部分ハ我砲撃止マバ直チニ起テ之ガ修理ヲナスヲミル。19日軍ノ砲兵部員某ガ予ノ処に來リ。其言ニ、砲一門ニ砲弾120発ノ準備アリ、恐ラク君等ノ隊ヲ煩^{わずら}ハスコトハ無ルベシ等、頗ル樂觀的話ヲナシ歸レリ。今日ヨリ思ヘバ、軍ニテハ27、8年戦役(日清戦争)当時ノ旅順攻撃ノ様ニ考ヘ居タルモノ、如ク思ハル。

愈々翌朝攻撃トナルヤ、予ノ連隊ハ予定ノ如ク新砲台ニ向テ突撃ヲ実施ス。豈ニ^あ 図^{はからん}ランヤ胸^{きょうしょう} 牆(身を守る盛土)高く、濠深く、猛火ノ為メ忽^{たちま}チ将校以下多大ノ損害ヲ受ケ、進路コレキハマルノ悲境ニ陥リ、補備堡壘ニ向ヒシ大隊ハ、鉄条網ヲ破壊シ、接戦格闘ノ後、堡壘内ニ突入シ、旭旗^{きよつき}(旭日旗)ヲ其壘上ニ立テ、占領ヲ報セシモ、援兵至ラズ、^{あまつさ} 刺^{しき}ヘ(そればかりか)我砲兵ハ知ラザルモノノ如ク、此堡壘ニ向テ頻リニ砲撃ヲ続行シ、之ガ為メ多クノ死傷者ヲ出シ、敵ハ一時退却セシモ間モナク逆襲シ來リ。

同時ニ、各砲台ヨリ集中射撃ヲ受ケ、死傷相踵キ、最早軍旗ト共ニ殲ルルノ外策ナキニ至リ、苦戦ノ余、屢々突撃ヲ試ミ、他隊ノ進出ヲ促セシモ、忽チ多大ノ損害ヲ受ケ、全ク他隊ノ進出ヲ待ツニ非ラザレバ、何事ヲモナス能ハザルニ至レリ。

而テ隣接第22連隊ハ突撃功ヲ奏セズ、全ク孤立ノ悲境ニ陥リ、終ニ敵ノ奪還スル所トナル。(左モアルベシ、陥落ノ際、此堡壘ニ到リ見レバ、旅順市街ハ眼下ニアリ)

大隊長ハ早く負傷シ、大隊ハ殆ド全滅。一方、本隊ハ予定ノ如ク新砲台ニ突撃セシモ、濠ノ幅広ク、携帯橋ハ何ノ用ヲモ為サズ。勇敢ナル将卒ハ濠底ニ飛下セシモ、外斜面ノ傾斜急ニシテ、其深サ亦3メートル以上ニ達セシヲ以テ、攀登(よじのぼる)スルニ由ナク、且ツ機関銃ノ掃射ヲ受ケ、大隊長ハ早くモ戦死シ、其他ハ胸牆下ニ殲レ、如何トモスルコト能ハズ、我連隊ノ右翼ハ第9師団後備連隊ナリシガ、是モ亦突撃ヲ果サズ。全ク無援孤立ノ姿トナリ、生き残りタルモノハ空シク切齒シテ胸牆下ニ伏スルノミ。・・・(略)。

此間師団長ハ攻撃目標ト遠ク隔リタル大孤山北麓ニ在テ師団ノ指揮ヲ取り、一片ノ命令モ来ラズ、又一人ノ参謀スラ来ラザリシハ遺憾ノ次第ナリシ。此際軍モ攻撃ノ失敗ヲ悟リタルモノカ全線突撃中止ト言フコトニナリ、此日ハ有耶無耶ノ間ニ終レリ。・・・。 実ニ予ハ半年ノ攻撃中、不幸ニシテ師団長参謀長ヲ戦闘中、一度モ見タルコトナシ。況ンヤ地形ノ偵察ヲヤ。又軍ヨリ折角渡サレタル携帯橋ハ、短クシテ架スルニ由ナク、無用ノ長物否短物ナリシ。・・・。

第1回総攻撃ノ後、補充兵ヲ以テスラ、着々坑道作業ノ成功ヲ見タリ。之ヲ第1回総攻撃当時ノ精兵ヲ以テセバ、容易ニ目的ヲ達セシナラン。・・・。要スメルニ、単ニ銃剣突撃ヲ以テ、北砲台ガ取レルモノナレバ、何ゾ旅順要塞ノ攻囲ニ、半年ノ永キヲ要セナンヤデアル。以上両度ノ突撃ニ於テ、連隊死傷、大隊長以下実ニ2131名。・・・

実ニ不運ナル連隊ナルカナ。・・・尚当時ノ戦況、往々人ノ誤伝スル所トナル。然レドモ之ヲ弁解スレバ、勢ヒ上官ノ行動ニモ言及ボサザル可ラズ。斯ノ如キハ軍人ノ徳義トシテ忍ブ能ハザルヲ以テ、知ル人ゾ知ルト諦メ、一言モ他言セズ。只茲ニ感状ト神尾少将ノ書翰及ビ其大要ヲ記シテ、子孫ニ伝フト云爾。 明治38年12月・元歩兵第44連隊長・石原 廬 誌 》(『悲しき帝国陸軍』高原友生著・中央公論社・2000年)

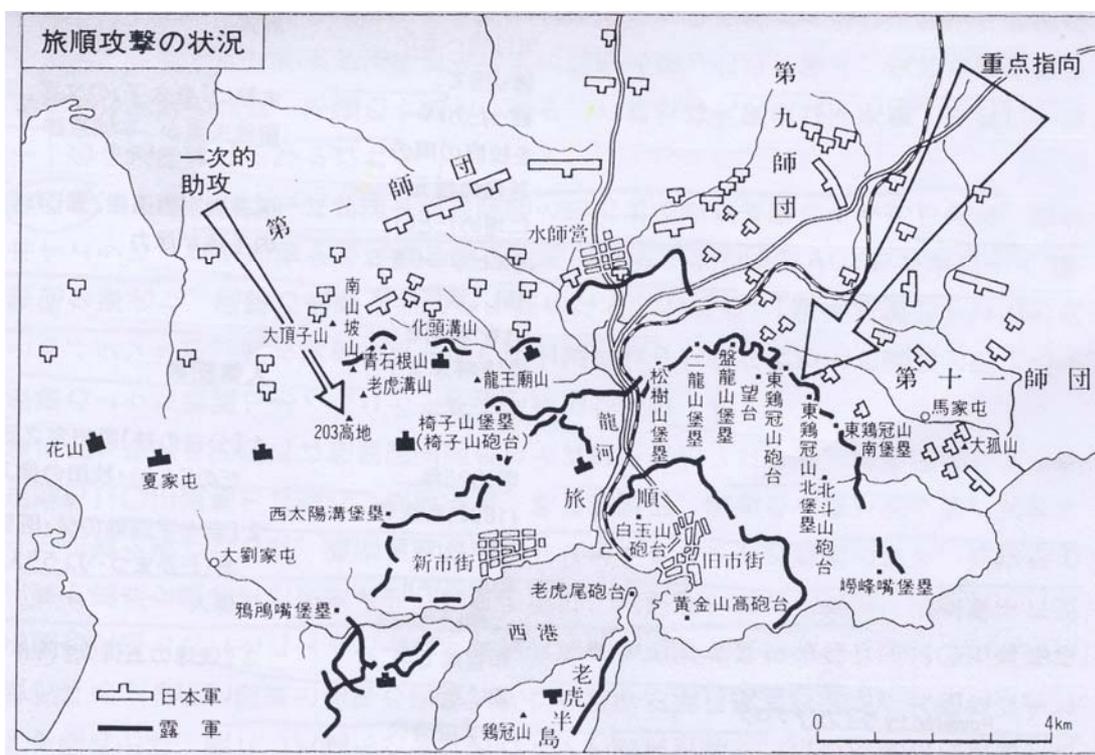
高原氏は残された記録に「高地第44連隊の名誉、特に2千名を上回る戦死傷の鎮魂を想うとき、第11師団司令部の戦闘指導、第3軍、満州軍総司令部、在京参謀本

部の旅順攻略の作戦指導の拙劣と怠慢を感じざるを得ない。と述べこの記録から得られる知見を整理してその要因をあげている。

第1に、第11師団の戦闘指導は、ただ肉弾をならべ、銃剣のみに頼って敵陣に突撃させる戦国時代変わらぬ戦法であった。第2に、要塞防備の情報に乏しく、胸墻は7メートル、コンクリート壁1、5メートル、坑幅20メートル、機関銃50を超え、作戦立案段階で理解されていない。また驚くべきは戦闘開始以来、師団長、参謀、連隊本部は現場へ来ていない。10年前の日清戦争の1日で陥落させた旅順の記憶の準備と用兵であった。第3に、44連隊の肉弾突出が成ったとき、左右の連隊が成功せず、この相互の連携が師団司令部の指導によってなされるべきなのにそれが無い。

第4に、何故当初から坑道作業を併用しなかったのか。何故28センチ榴弾砲を搬入し砲撃の成果を当初から期さなかったのか。過信と思い込みの戦闘であった。

第5に、旅順陥落の決め手は決して203高地ではなく、東部正面、特に鶏冠山、望台の占領であり、ステッセルが白旗を揚げたのは、鶏冠山での勇将コンドラチェンコの戦死と併せ、当初から第3軍が重点を最後まで指向し続け、**旅順港ではなく旅順市街を眼下に収める望台**を落としたことによる事実¹⁾に注意を払わなければならない。



旅順攻囲図 『悲しき帝国陸軍』高原友生著より

高知第44連隊長の石原廬は、高知県の連隊を率いて旅順攻撃に参加、2千有余の

死傷を出し、連隊長は生き残り、高知では連隊長の評判が悪く無慈悲の連隊長との噂があった。連隊長は口癖の如く、一度高知へ参って誤解を一掃したいと言ってはいたが、終にその機会を得ずして逝かれたのであると述べておられる。

ステッセルの降伏 『日露戦争を演出した男モリソン』下巻・「ステッセルの不名誉な降伏」に、《・・・1月1日、ステッセルは開城やむなしと次のようにツァー(皇帝)に訴えた。「我は人力の限りを尽くしたり。願わくば陛下これを許し憐察(あわれむ)を垂れ給わんことを。11カ月の永きに亘つての絶え間なき戦闘は、我が精力を消耗せり」と、ステッセルは乃木大将と会見後、彼は自分の守りきれなかった土面に^{ひざまず} 跪き、短い祈りを唱え土地に別れのキスをした。

ステッセルの武勇と献身に対して、ドイツ皇帝は武勇勲章を与えた。欧州の人々は感動し、ステッセルを悲劇のヒーローとして讃えた。しかし、そのような欧州人のステッセル観をモリソンは根底から覆した。ステッセルは英雄どころか、実は臆病風に吹かれた惨めな敗者に過ぎない、とモリソンは主張したのである。モリソンは陥落直後の旅順をくまなく調査し、降伏時の残余兵力及び物資の数量を綿密に調べ、ステッセルの降伏の理由が、兵力、武器、弾薬、食料等の不足によるものでない事を状況証拠から証明した。

ロシア降伏の理由を正当に説明しうる者はいない。兵力欠乏という訴えは理由にならない。バラショフ将軍は、「2万5千の駐屯兵のうち2万人は負傷して病院におり、戦えるのは僅か5千人であった」と云い、ステッセル将軍は「戦えるのは僅か4千人、無傷の将校は28人になった」と公表しているが、日本が要塞を占領して明らかになったことは、2万5千人以上の身体健全な兵が出撃に出来るほどであり、その兵士たちは良い服装をしており、栄養満点、無傷の将校はなんと数百人もいた。入院中の者は1万4千人いたが、重傷の者は殆んどおらず、特に士官クラスに仮病が多く、彼らの評判は地に落ちた。

・・・降伏した戦闘員は32,206名であった。日本軍が押収した武器弾薬の数量は^{おびただ} 夥しく、日本軍を驚かせた。日本軍が押収した各種大砲は3百30門、各種砲弾は206,704発、各種小銃は36,600挺、小銃実包は543万6240発もあった。食料に付いてモリソンは云う、「食料不足ということも降伏の理由にはならない。あと3カ月^{ろうじょう} 籠城するに足る十分な食料があったからである。その上、大量の

シャンペン、クラレット、ウオウカ、医療品も充分にあった。・・・」。

事実、降伏した時、ロシア側には麦粉が17万7千貫あり、これは4万人以上の旅順のロシア人を、約50カ月養える量、その他、ひきわり麦、玉蜀黍粉^{とうもろこし}、米、重焼パン、牛肉缶詰、食塩、砂糖など余る程あった。馬は2千頭、馬糧^{ばりょう}は56日分もあった。

石炭も5カ所の地下倉庫に7万トンの貯蔵、その中に3万トン良質のウエリッシュ一般炭もあり、このような状況証拠に基づいて、モリソンは降伏の真の原因について、唯一の降伏の理由は日本の勇敢さに参ってしまった。・・・。」と。

筆者の感想 『日露戦争を演出した男モリソン』下巻の考察であるが、203高地の評は、結果から見た判断と思う。個々の将軍・士官たちは、その現場に於いて、最良の結論を以って答えを出す訳である。唯結果として、後世の人にとっては戦場の経緯を知っているので、「こう云う作戦があったではないか」という云々の合理性の作戦を評したい処である。が、ここが人間、天から授かったもの、国の環境や育つ人間環境の過程差があり、両将軍の総合的軍事能力差あり、知略の差が当然に有るが人間の世界である。現在の我々が想像するよりも、「乃木将軍」に対するロシア側兵士に与えた畏怖心が大きかったことは、ウォシュバンの『乃木』の記述の通りであったと思われる。後世の軍事評論者たちは自己の安全が保障されている座で、彼是^{あれこれ}云々している訳である。国と国の戦争は、軍事力の外に、国民性・自国の政治・軍事力を背負った国の外交者たちの外交発言も大きな影響を与えているのである。

奉天会戦 奉天会戦は現在の遼寧省瀋陽の地で、1905年3月1日から3月10日にかけて、日本軍24万人、指揮官大山巖・参謀長児玉源太郎、ロシア軍36万人、ロシア満州総司令官アレクセイ・クロパトキンの双方が60万人よる激突となる。

クロパトキンは100万人の動員令を出していたが、ロシア国内の血の日曜日事件や紛争が起き、ニコライ2世皇帝の国民の忠誠心は揺らいでいた。日本軍に於いては、危うい勝利を拾い続け、なんとか全体の優勢を保っていた。しかし、日本軍に於いても、満州奥地まで進撃を続けたため、兵站の維持や兵力補充は益々困難となり、戦争継続自体も危うい状況になっていた。

1905年3月、ロシア軍の奉天増援前に、大山巖は日本軍有利の段階で講和を結ぶため、総戦力を賭け、「今戦役は関ヶ原とならん」と決意を将兵たちに示している。

奉天会戦の激突の末、やや日本軍優勢で結末をみた。3月9日、ロシア軍総帥クロパトキンは、第3軍（乃木軍）によって退路を断たれることを恐れて、鉄嶺（遼寧省北部）・ハルビン方面へ転進指令を出した。3月10日、無人となった奉天に入城した。

3月10日は陸軍記念日となる。



奉天入城



3月11日撫順占領

クロパトキンは鉄嶺も捨てて北へ更に退いた。日本軍が鉄嶺を占領、ハルビンに逃れたクロパトキンは皇帝に罷免された。奉天を制圧したことにより、会戦の勝利は日本側あるように見えていた。ロシア軍の奉天転戦は、ナポレオン戦争時にもロシア軍が採用した伝統戦法「戦略的撤退」であった。まさに日本軍を満州奥地へ誘い込む作戦であった。ロシアはクロパトキンを罷免したことにより、国際的には敗北と認知されてしまった。代わってリネウィッチ將軍より、軍律を正し、軍の立て直おして日本軍に対峙する状況となって行くのである。

しかし、ロシア国内に於いては、この年の1月に「血の日曜日事件」「ロシア第一革命」が始まり、国内の反乱分子の鎮圧行動に軍事力は取られ、陸軍100万と云われた軍事力を満州地域へ派兵することはできなかった。

日本側に於いても、総司令官大山と参謀長児玉による、「有利な段階の内に講和を進める」児玉を急遽、大本営へ戦争終結の方法を探るように具申している。児玉は韓京に居て、講和条件の「軍費賠償」の一条を見て「桂の馬鹿が償金を取る気になって居るゾ」と語ったと云う話が伝わる。児玉は償金の一条を見て、当時の我が国の経費と人命犠牲が莫大なことも、斟酌しなければならないと述べている。

この時期の日本国内に於いては、奉天会戦勝利の報に日本中は沸き上がり、戦争継続と世論は高まり、大本営は更にウラジオストクや沿海州の占領、侵攻計画を練り始めていた矢先となっていたのである。

第10章 「ウィッテ回想記」より開戦の経緯と講和談判を探る

『ウィッテ伯回想記・日露戦争と露西亜革命』上、復刻原本=昭和6年・原書房より抜粋

日露戦争開戦と「栗野公使と私の会話」 《・・・或る日、日本公使栗野（駐露公使・写真9章96頁）の訪問を受けた。彼は中々聡明な人物である。彼はよくロシア政治事情を理解し、彼の語った記録を見れば、「両国の交渉はどうも意の如くに進行しない。日本が回答の時期を誤ることはないが、ロシアは極めて緩慢で、簡単な回答にも数週間、甚だしい場合には数ヶ月間を要することがある。この交渉ぶりから見れば、ロシアの真意は開戦を欲するのではないかと疑う。・・・日本の与論はロシアの態度を遺憾とすることに一致している。その憤慨は日々激調をおびて来て、政府もこれを制するに苦しんでいる」と語った。更に云う、

「抑々極東統監（政治軍事を監督）とは何であるか、極東の地はロシアの領土でもなければ、その保護領でもない。何処にロシア皇帝の派遣した統監を置く理由があるのだろうか、・・・。」栗野公使の言葉は実に道理に叶っている。

栗野公使は1903年7月に満州問題を整理するための、一つの協定案を私と外相ラムスドルフ伯（9章96頁）に提示した。その案は極めて妥当なもので、ロシアがこれを承認すれば日露間の紛議は平和に解決できるものであった。案はアレクセエフ（エヴゲーニイ・アレクセーエフ（1843-1917）太平洋艦隊指令長官、極東総督・写真6章68頁）の処へ回付されたが、そのまま握り潰された。実はアレクセエフはこの案を見て、日本の誠意を見透す眼識は無かった。ロシアは威圧的態度を示しておけば、日本は譲歩するであろうと、彼等は野心を起したのであろう。その時、栗野公使の話は決して虚喝ではなく実情を吐露（打ち明ける）したものに相違ないと考えたのである。

ラムスドルフ外相は相変わらずで、遂に断固たる決意を表示する事もなく、「自分としては如何ともすることが出来ない。この交渉は自分が担当しているのではないから」云うのみであって、ロシア政府は遂に相当の時機に回答を与えないでいた。そして、明治37年2月9日の夜、日本の軍艦は旅順付近で我が艦隊を襲撃して軍艦数隻を撃沈させ、そして2月10日、遂に宣戦の布告が発せられた。》と開戦時を語る。

「奉天大会戦まで」（同）《・・・1904年中の戦争の経過は大体下記の如であった。3月31日 我が戦闘艦「ペトロパウロフスク」が撃沈されて、マカロフ提督（11章160頁）以下乗組員の大部分が戦死した。マカロフ提督は我が極東艦隊の司令官であ

ったから「ペトロパウロフスク」(11章160頁)の撃沈と、その後我が艦隊に起った戦艦の損傷とで、極東艦隊は殆んど戦闘力を失ってしまった。

4月17日・18日 我が軍は九連城(鴨緑江沿い)の戦いに敗れた。

4月28日 日本軍は貔子窩(遼東半島南岸)に上陸した。これが旅順陥落の導因。

5月28日 旅順港付近で海戦があり、我々はまた戦艦数隻を失った。

8月17日—23日 我々は遼東付近の会戦に敗れて奉天方面へ退却し始め、我が軍が奉天へ退却した時、総司令官クロパトキン是最早この上に一步も退却せぬと公言した。12月22日 旅順が陥落した。それ以後の我が軍の敗類は1905年に入ってからのものであるが、最後に奉天の大会戦に敗れて、遂にハルビン方面へ後退を余儀なくされたのである。》

「奉天大会戦」について (同) 《翌年2月15日—20日まで、我が軍は奉天付近で日本軍と大会戦を戦った。総司令官クロパトキンの発した命令には、ロシア軍は如何なることがあっても奉天から北方へは一步も退却してはならぬとあったが、我が軍は散々に敗北した。この戦闘に参加した兵数からみても非常に大規模なものであった。ロシア軍は秩序を乱してハルビン方面へ退却する他はなかった。私はロシア軍隊が奉天で受けた様な大敗北を史上でまだ見たことがない。・・・》悲観論となっている。

「クロパトキンの失脚」 (写真9章115頁) (同) 《・・・日本との戦争は、戦うごとに我が軍に不利であった。敗報ばかりが頻りに伝わるので、陛下やその周囲を取り巻く寄生虫共(ベゾブラゾフ派)の心に動揺を生じる様になったのは当然である。同時にこの戦争はロシア国民の各階級を通して、前例の無い衝動を与え、全ロシアは遂に理性を失ったかの観を呈した。元来ロシア帝国は何に因ってその存在を認められて来たのであるか、それは専ら軍隊の力ではなかったか。ロシアの文化、ロシアの官僚主義的教育、ロシアの富力、その何れも世界を脅伏せしめたのではないか、それはロシアの武力を諸国が恐れたからである。今のロシアはそれほど強くない。

それは砂上に立つ巨楼であるであることが判ると、世界のロシアに対する観念は全く一変した。奉天付近の会戦が我が軍の惨敗に終わり、ロシア人の常識ある者はこの戦争は「この上継続すべきでない。出来るだけ体面を傷つけない範囲で一日も早く終局すべきである」という観念が濃厚になって来た。》と。

「皇帝に講和勧告」 (同) 《・・・日露戦争中に最も思慮深く最も的確に将来を予言した論評は『ルスコエ・スロウオ』(露国外務省機関紙)に掲載されたミハイロウスキーという人物の論説であった。奉天に於ける敗戦後、彼は更に一論文を掲げて「将来リネウイチ将軍(ニコライ・リネウイチ・満州軍総司令官)から何ら期待することは出来ない」と極論した。それは極めて簡明で賛成すべき論文であったので、私はこれに自分の意見を附して陛下の秘書に送り、陛下に見せる様に依頼した。数日後に秘書からの返事が来た。それはこの論説と私の意見に対して可なり皮肉な弁駁(べんぱく)(誤り突く論)を加えたものであった。そしてこの返書の内容は陛下が眼を通された旨が付記してあった。そこで私は更に一書を送って言った。

「私は最初からこの戦争には反対であった。私の考えではこの戦争は政治上から見て、一種の罪悪ある。それ故にこれを償う道を講ぜねばならない。が、その道は一日も早く平和を克復することである。それは一日でも早いだけ我々の利益である。何故ならばこの際ロジェストウエンスキー艦長(5章63頁・バルチック艦隊指令長官)の行動に期待をかけるなどは甚だ無理なことだからである」陛下は性来の因循(いんじゆん)(改めようとしない)と、樂觀主義とからロジェストウエンスキー艦長の成功を期待していたのである。陛下は何処までもロジェストウエンスキー提督の成功を期待して、「彼は必ず日本艦隊を爆破する」と信じていたが、それは似而(に)愛(え)国(こく)者(者)のロジェストウエンスキー艦長が支那海に現れたという一報によって、日本では大恐慌が起ったなぞと盛んに吹聴して陛下の聡明を晦(くら)ましたにも由(よ)る。》と真実性を語り出している。

「対馬沖の大惨劇」 (同) 《・・・5月27日、28日の両日に亘って対馬沖の海戦が行われた。ロシア艦隊の全部は日本海の水底深く葬られてしまった。これが日本との戦争を惹起(じびつき)(引起す)した例の冒険派の事業に対する最後の打撃であった。この敗戦の後は何人も、もはや戦争の継続を思う者はいなくなった。いずれも早く講和の手段をとる必要を自覚し、この思潮は日と共にその勢を増して、遂に宮廷内にまで蔓延する様になった。陛下も遂に講和を希望するという意志を示し、私は戦争中も絶えず戦争の我々に不利な理由を説いて、一日も早くこれを停止する必要があることを主張して来たが、私の努力は何の効果も無かった。・・・対馬沖大海戦後、海軍総長アレクセイ・アレクサンドロウイチ太公及び海軍大臣アウエランは、共に辞表を出して解職した。》と疲労感で述べている。

「ポーツマス講和談判」・「ムラヴィヨフの全権辞退」 (同) 《・・・ポーツマス講和談判人選に走り回る時期となっていた。外相ラムスドルフ伯(1900—06 外相・写真9章 96頁)は私に次の様に話した。「ネリドフ(駐仏大使)は老齡と健康を理由に大命(ポーツマス談判役)を辞した。デンマーク駐在大使イズヴォリスキー(1906・外相)は、自分はその任に適しない。この難局に相当の成功を収めうる者はウィッテ一人である」と、殿下に言って辞した。陛下は外務大臣ムラヴィヨフ(1897—00在)に全権の命を發した。

後日、ラムスドルフ伯爵がやってきて、「今日、陛下に謁見するので、全権について貴下の腹藏(本心)のない意見を聞きたい。貴下はもし陛下からの委任があれば、日本との講和談判を一身に引き受けて、アメリカへ行く意志があるか」と聞いた。私は「ムラヴィヨフはどうなったのですか」ラムスドルフ伯に反問したら、「陛下の話では、ムラヴィヨフは昨日、宮中に伺候して陛下に謁見し、持病再発のためと言って全権を辞したそうです。その際、自分は望むように御奉公の出来ないと涙を流したので、陛下もムラヴィヨフは余程重病らしいと言っておられた」との話であった。

私(ウィッテ)は諸氏の全権辞退をなんと見るかと訊ねたところ伯は、「ムラヴィヨフは元来が外交官たる才能に欠けているし、また今度の談判をするために必要な研究もしていない。持ち前の功名心に駆られて飛びついただけだと。しかし利口な彼はこの談判の成否が彼の将来の榮辱(名誉と恥)に、大きな危険の伏在(隠れて存在)することに気付いたので辞退したのであろう。それにもう一つは、彼は全権に対する手当金に興味があって、十万ルーブル位は支給されると思っていたらしい。ところが私が全権の手当を1万5千ルーブルと決定している話をしたら、彼は非常な失望の色を見せた。これが彼の辞意の原因かもしれません」。と。

そしてラムスドルフ伯は国内事情からロシアが危機に臨んでいる事、講和の成立を絶対必要とする詳細を述べて、私に承諾するよう懇願したのである。

私は考えた。ロシアが講和の成立を必要とする事は言うまでもなく、その情勢を飽く事を知りながら、尚、相手に譲るところなく折衝するには、相手国である日本の内外の情勢と、その指導者の性格や技術を知らねばならない。その点において私以上の知識を有する者はいない。これはどうしても私が立たねばならないのは当然である。そこで意を決し「よろしい、もし陛下から私に直接の委任か命令があったら、私はこの件を引き受けましょう」この言葉を聞くとムラヴィヨフ伯は非常に満足の意を表した。直ぐその晩に陛下からお召状が来て、翌6月29日に私は参内した。陛下は私が

命をお受けしたことに非常に満足の意を表され、直ちに私を講和全権に任命した。同時に陛下は、心の底から和議成立を希望するが、それはどこまでもロシアの体面を傷着けないものでなければならないと。

陛下は「如何なる場合でも一銭の償金も、一握の領土も譲渡するものであってはならぬと言った」と念を入れて述べられた。宮中の一部では「それはいかん。ウィッテを全権にするのは日本に降参する様なものだ。ウィッテは絶対的平和論者だから相手のどんな条件にも応じてしまうに違いない」とささやかれた。》と内情を述べている。

ポーツマス講和会議・「フランスの対英態度」（同）《・・・日露両国が極東で戦っている間に、ヨーロッパの政局に変化が起きていた。日露戦争前の数十年の間、フランスとイギリスの関係は疎遠^{そえん}となっていた。原因はイギリスがナポレオン帝国疲弊後のエジプトからフランス軍を駆逐し、その地の支配権を握り、更にスエズ運河をも収めた。イギリスはアフリカの北部に於いてフランスと支配競争を誇示してきた。

この軋轢がフランスをロシアへの同盟に向わせ、ロシア鉄道建設公債募集に応じる経緯となっている。その結果として、ロシアの兵力は極東に移動してヨーロッパ西部国境の攻防力を弱めたことになっていた。ロシアの武力を遠く極東へ移動したことにより、フランスにとっては、露仏条約を無価値にした事になった。

フランスの与論は「日露戦争は決して起りえない」と確信していたが、フランスが日露の関係に着眼して、ロシアに対して対日態度の不遜を指摘して警告したならば、日露の紛争は破裂に至らなかったであろう。

私の考えでは、同盟国たるフランスが真に厳粛な態度で忠告したならば、ロシアは日本に対して、もっと真面目な態度で応対したであろうと考えている。

ところが戦争は始まり、ロシアが連戦連敗すると、不注意であったフランス外交当局は狼狽し、フランスはドイツとの手を握るまでの決心はつきかねていた。そこでフランスは、数年来の不愉快なイギリスとの関係を水に流して、仏英は結合する条件が整ってきたのである。》と経緯をのべている。

ポーツマス講和会議・「ドイツ皇帝の態度」（同）《・・・日露戦争は益々ロシアに不利に展開し、これに手を打って喜んだのは、ドイツ皇帝ウイルヘルムである。元来、日露戦争はウイルヘルムが、多年に亘りニコライ2世の性格を研究して、その弱点に

乗じて誘惑的暗示を与えた為に起ったものだ。その結果、北方の巨人ロシアを弱めると同時に、同盟関係にあるフランスをも併せて孤立無援の地に置くことを得たのである。これに依って同盟国を失ったと同様な立場のフランスはイギリスと握手をした。この事実が又、青天の霹靂^{へきれき}となってドイツ皇帝とドイツ外交界を驚ろかした。

フランスはロシアの国力と国威が失墜したのを見て、現在のロシアの政治に失望したと同時に、将来の成り行に不安を感じていた。ロシアが疲弊し、フランスが孤立状態にあるのを好機として、ドイツ皇帝はフランスに一撃を加え、数十年は立つことが出来ない様に陥れようとする策謀計画をしているのではないかという危惧を懐き、そこでフランス政府は一日も早くロシアと日本との戦争を止めさせ、ロシアの武力を満州から移動することを熱望していたのである。》と。

ポーツマス講和会議・「私の行動方針」 (同) 《日本との講和談判に望み、自分の談判の立ち振る舞いの態度、行動を大体次の様に定めた。

① どんな事があっても、我々が講和を望む様な態度を見せない。ロシア皇帝陛下は周囲の諸国が戦争継続を望まない様であるから、その意を容れたに過ぎないという態度を示すこと。

② 自分は大国ロシアの全権代表者であるという顔をして大きく構える。大国ロシアの最初からこんな戦争を重要視して居ないから、その勝敗については少しも痛痒^{つうよう}(痛くもかゆくもない)を感じない態度を示して相手を威嚇すること。

③ アメリカにおける新聞の勢力の強大を鑑みて、記者達に対しては特に愛想よく心安く待遇すること。

④ 極端に民主的であるアメリカの人気を味方にするために、態度を簡単自由にして少しも尊大ぶる様な態度を示さぬよう注意すること。

⑤ アメリカは特にニューヨークでユダヤ人と新聞の勢力の強大なことを打算して、少しも彼等の不快を招く様な挙動のない様に細心の注意すること。私はアメリカ滞在中に以上の心得を固守し寸時も油断なく行動しなければならない。》と告白している。

ポーツマス講和会議・「私とアメリカ新聞記者」 (同) 《・・・アメリカの各新聞社の記者団に向って「自分は昔からロシアと親交を持続している。アメリカの地に来たことに無上の悦びを感じている。また不断に有益な、そして力強い努力をするアメリカ

の新聞に対して満腔^{まんこう}の敬意を表す」と語った。この時以後、私がアメリカを辞するまで、各新聞の監視下に置かれ、一挙一動は悉く新聞記事の材料となったのである。

米国大統領ルーズヴェルトは談判の初めから、常に日本を支持するに努めたのは明白な事実であった。彼の同情は日本側に傾いていた。その事は当時彼が陸軍大臣(ウィリアム・タフト一行)と同行して愛嬢(長女アリス)が日本に旅行することを許したことを見ても明かである。彼は聡明な人であるから、アメリカ一般の同情がロシア側に傾いたのを見て与論に反対することが、大統領として如何に自分に不利であるかを知っていた。そこで日本に向って交渉の譲歩を勧告したのである。(日本側は新聞操作を小村寿太郎全権たちは秘密主義を貫いた)

それにもう一つ私の都合の良かったのは日本全権一行の態度であった。その秘密主義と陰気な態度が、殆んど正反対に開放的なアメリカ人の人気に写らなかった。私は談判の初めから彼等のこの欠点に気付いていたので、これを利用することを思いついた。そこで冒頭に提議した。「私がこの席で言明することは総て全世界に向って訴えようとする処である。ロシア皇帝から全権を委任された私には何等の秘密もない。故に私は日々の交渉談判の経過を新聞に公表することを希望する」と述べた。

私は日本側がこれに反対することを予見して提唱したのである。果たして日本側の同意は無かった。この私の提議と日本側の拒絶は、直ぐ新聞記者の知るところとなり、これが日本側に対する好感とは成らなかった。結局、会議毎に書記の手で会議の記録を作成し、双方の全権の検閲^{けんえつ}を経た上で各新聞社に交付することに決定した。

談判が要領を得ない原因は、日本側の検閲のためだという評判が立った。会議の席で議論を闘かわしたのは主に小村全権であった。双方とも副使が発言することは非常に稀で、私が余り横柄^{おうべい}な態度で議論するので、或る時、小村全権は私に向って「貴下は何時でも戦勝者の様な口調で物を言う」と言った。私は「今日の場合には戦勝者はない。従って戦勝者のあり得る道理もない」と答えた。」と米国与論を見越している。

ポーツマス講和会議・「講和談判」 (同)《・・・会議の後半、私がこれ以上の譲歩は決してしないから、この上会見に日を費やすことはないと言い切ってしまったので、小村全権と日本政府の間に会見を決裂させるか、私の提議を容れるかについて意見の一致を見ず、決答の引き延ばした時であった。

この時、東京では議論が二派に分れて、伊藤侯の一派は私の提議を容れることを可

とし、他の軍人派は償金を取るか、さもなければ戦争を継続すべしと主張し、共に相譲らないので回答が遷延^{せんえん}した。その間にはルーズヴェルトがアメリカの人气がロシアに有利に傾いたのに驚き、私の提議を容れることを勧告する意味の電報を、直接日本の皇帝に送った。そのため東京の議論は一決して、小村全権に電報を打って来た。これは日本側の内情に精通している一通信員の談である。

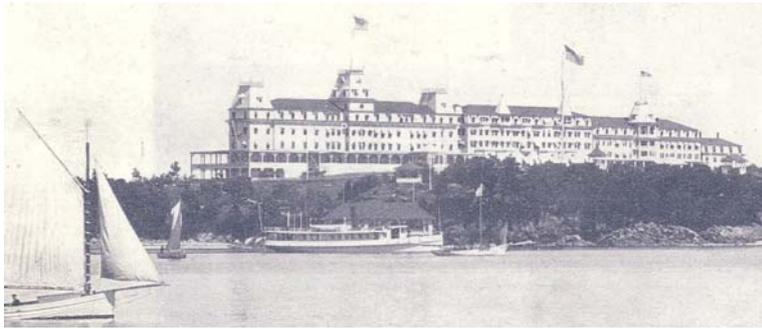
日本側随員の話では、小村全権は今度の講和条件には不同意の点があったが、東京からの命令で止む無く自己の信念に背いて調印した。しかし日本国民は彼の真意を知らないから帰国後は強い非難を受けるのを覚悟して居るということであった。》と、実に日本側の情報を的確に掴んでいる。

ポーツマス講和会議・「南樺太譲渡と皇帝」（同）《講和条件に関する陛下の訓令を見れば、私が承諾した条項には一つも訓令の範囲を超えたものはない。ただ樺太島の南半分を譲渡した事だけは訓令の外である。考えて見ればそれは賢明な処置であった。この程度の譲歩もしない様では講和の成立はなかったかも知れない。》

ポーツマス講和会議・「講和条約調印の日」（同）《・・・ルーズヴェルトは談判の進行中に私が無賠償無割譲を頑強に主張したので、私からは到底何らの譲歩も期待し得ないことを看破した。そこで彼一流の筆法で、直接に我が皇帝陛下に勧告し、そこでようやく活路を見だし、調停者の面目を維持したのである。講和条件は私の予定より幾分か良好であったが、結局私は戦勝者でなく、戦敗者として署名調印しなければならなかった。ロシアは何十年間こんな屈辱を蒙ったことがない。私は今度の戦争の結果を恐れて始終反対した、そしてこの反対のために陛下の不興^{ふきよう}（不機嫌）を受けた私が、講和締結者となり、ロシア人として忍びがたい恥辱^{ちじよく}を感じながら条約に署名する役割を演じなければならないとは、何という運命の悪戯であろうか。》

更に、《・・・私は今度の使命を果たす為に、政府から1万5千^{ルーブル}留を支給され、その後、更に5千留を増して総計2万留を受取ったが、尚、自分の懐から数万留を持出していた。》と述べる。

以上が『ウィッテ回想記』上の記述、すなわち日露開戦からポーツマス講和条約に至るウィッテの心境を回想記より拝見したのである。



ニューハンプシャー州ウェントウォース館、日露全権団が宿泊したホテル



ロシア全権セルゲイ・ウィッテ
『ウィッテ伯回想記・上』より

ウィッテ人物の考察 ウィッテの父はオランダ系の人で、母は露国の一名門の生まれ、妻はロシア人となる。彼はオデッサ(ウクライナ南部黒海に面した都市)大学で物理数学科卒、露国の西南地方の一鉄道会社に入り20年間勤務。彼は鉄道の財務、鉄道の運輸経営に関する知識を得て、露国トルコ戦役の際、オデッサ鉄道の責任者として、軍隊輸送に大活躍をした。これに当時の露国鉄道専門家アレクサンドル3世帝(ロマノフ朝第13代皇帝、アレクサンドル2世と皇后マリア・アレクサンドロヴナの第2皇子)に召され、露都の官僚界に俄然頭角を表す。鉄道以外の全経済に及び、数年のうちに大蔵大臣となり、1905年に露国憲政政府の初代の首相となった人物である。

ポーツマス談判の末期に際し、ウィッテはよく重大危機に打ち勝った。露国の帰国の折は同胞より非難を浴びせられた。彼は一切の責任を一身に負い、講和条約の批判を甘受した。寧ろ日本より見れば、露国に有利なものであったが、国内一般の世論や新聞の論調は、彼を「半薩^{サガレン}哈^ハ嚏^{テン}伯爵」と呼んだ。この点は、小村寿太郎とても、自らの責任に於いて、弁解も回顧録も残さず胸にしまい込み、あの世に行った小村と実に類似しているのではないか。皇帝はウィッテに伯爵を授けたが、これは露国の慣例で、皇帝は彼には寧ろ冷淡であった。

国際的な新聞報道記者ギロン(ウィッテの首席報道係兼随員)は、ウィッテをピョートル大帝以来の露国第一の政治家として激賞している。ウィッテの成就した3大事業は、ポーツマス条約、弊制改革、1905年の憲法制度を改革と(国务大臣時代)、これだけの政治を成した彼は、露国のみならず世界の政治家と肩を並べて遜色はない。

(『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平著・昭和3年・萬里閣書房より)